

# 松崎馬場跡(3)

— 県営首里城公園 発掘調査報告書 —

令和7(2025)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

## 序

本報告書は、県営首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市公園課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが令和4(2022)年度に実施した松崎馬場跡の遺構確認調査の成果をまとめたものです。

松崎馬場は、龍潭の東側に沿って造営された広場です。松崎馬場が成立した詳しい年代は不明ですが、龍潭が完成した1427年には、ある程度の整地が行われていたと考えられます。1700年頃の様子を描いた首里古地図によると、龍潭のほとりに広がる松林や、松林の横を蛇行しながら南北に走る宿道(中頭方西海道)が描かれています。1801年に首里王府の最高教育機関である国学が龍潭の東に設置された際、「松崎前から国学までの道に嘉木が植えられ、白砂が敷かれた」ことが『球陽』尚温7年条に書かれています。また、明治12(1879)年の琉球処分前まで、冊封使を歓待するために開催された重陽宴において、爬龍船を観覧する広場として使われていました。

このように松崎馬場は近世まで冊封使を歓待する重要な場として、そして主要街道である宿道の一部として使用されていましたが、近代に入ると国学・孔子廟跡に師範学校が設置されたことにより、敷地が縮小されるなどの改変が行われました。

更に昭和20(1945)年の沖縄戦とその後の琉球大学、沖縄県立芸術大学の設置によって周辺地形が改変されました。

今回、県営首里城公園の一部として復元整備を行う目的で遺構の確認調査を行ったところ、松崎馬場の整地層や造成層、宿道に関連する遺構が確認されました。これらの成果を踏まえて、将来的に首里城公園として復元整備を行っていくこととなります。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を理解する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

令和7(2025)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 池田 潤



卷頭図版1 トレンチ2 遺構検出状況(西から)



卷頭図版2 トレンチ3 遺構検出状況(西から)

## 例　　言

- 1 本書は、県営首里城公園の整備に伴い、令和4(2022)年度に実施した松崎馬場跡の埋蔵文化財発掘調査について、令和5・6(2023・2024)年度に資料整理作業を行い、報告書としてまとめたものである。
- 2 発掘調査、資料整理作業については、沖縄県土木建築部都市公園課より予算の分任を受けて実施した。
- 3 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標値は、全て世界測地系の第XV系に基づく。
- 4 本書に掲載した古写真や古地図については、所蔵先を明記し、必要に応じて許可を得て掲載した。また、遺跡分布図については、国土地理院の地図を利用した。
- 5 本書に掲載した調査時の写真撮影は、羽方誠、城間宏次郎、高原彬浩が行った。出土遺物の写真撮影は、小渡直子、嘉数渚、工藤孝美が行った。
- 6 本書に掲載した遺構図は、羽方誠の指示のもと、城間宏次郎、高原彬浩、西江洸嬉が作成した。
- 7 本報告書の編集は、調査体制の項で記した多くの協力のもと、羽方誠が行い、各章の執筆は次のとおり行った。  
第1章～第3章、第5章 羽方誠  
第3章(遺物観察表) 花城媛子  
第4章 株式会社パリノ・サーヴェイ
- 8 各章で参考・引用した文献の一覧は、巻末にまとめて掲載した。
- 9 本発掘調査で得られた出土品、図面、写真等の記録は、沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

## 目 次

序	
卷頭図版	
例言	
<b>第1章 調査の概要</b>	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	2
<b>第2章 位置と環境</b>	
第1節 地理的環境	12
第2節 歴史的環境	13
<b>第3章 調査成果</b>	
第1節 層序	17
第2節 遺構と遺物	41
第3節 遺物の種類別概観	95
<b>第4章 自然科学分析</b>	109
<b>第5章 総 括</b>	
第1節 はじめに	122
第2節 松崎馬場跡の変遷	122
第3節 今後の課題	123
参考・引用文献	123
報告書抄録	125

## 図 目 次

図 1 龍潭周辺の調査区平面図	3
図 2 松崎馬場跡の調査区平面図	4
図 3 松崎馬場の位置及び周辺の遺跡	11
図 4 松崎馬場跡の位置	12
図 5 「首里古地図」(沖縄県立図書館所蔵CC BY 4.0)	13
図 6 「重陽宴松崎之図」に見られる松崎馬場の施設 (沖縄県立博物館・美術館所蔵)	14
図 7 トレンチ1 北壁土層図	20
図 8 トレンチ1 溝1 石列下壁面土層図(略図)	20
図 9 トレンチ2 北壁土層図	25
図 10 トレンチ3 北壁土層図	31
図 11 トレンチ3 南壁土層図(略図)	31
図 12 トレンチ4 北壁土層図	35
図 13 トレンチ5 北壁土層図	40
図 14 トレンチ1 平面図	41
図 15 トレンチ1 溝1 断面図	42
図 16 トレンチ1 溝1 北壁立面図	42
図 17 トレンチ2 平面図	48
図 18 トレンチ2 石列2 立面図	49
図 19 トレンチ2 出土遺物(1)	59
図 20 トレンチ2 出土遺物(2)	60
図 21 トレンチ3 平面図	63
図 22 トレンチ3 石積み1 立面図	64
図 23 トレンチ3 出土遺物	73
図 24 トレンチ4 平面図	77
図 25 トレンチ4 出土遺物(1)	86
図 26 トレンチ4 出土遺物(2)	87
図 27 トレンチ5 平面図	91
図 28 トレンチ5 断面図	91
図 29 各種の遺物(1)	95
図 30 各種の遺物(2)	96
図 31 出土遺物点数の円グラフ	98
図 32 出土遺物重量の円グラフ	98
図 33 曆年較正結果	111
図 34 松崎馬場跡の変遷イメージ	123
図 35 グスク時代に造られた宿道の想定図	124

## 写真目次

写真 1	調査開始前の状況(北から).....	5
写真 2	磁器探査の状況(北東から).....	5
写真 3	作業状況(南から).....	6
写真 4	除草作業(北から).....	6
写真 5	掘削作業(東から).....	7
写真 6	撮影状況(東から).....	7
写真 7	測量作業.....	8
写真 8	現地説明会の状況(東から).....	8
写真 9	埋め戻し作業(東から).....	9
写真 10	埋め戻し後の状況(南東から).....	9
写真 11	現場事務所(西から).....	10
写真 12	現場事務所内での作業.....	10
写真 13	明治期の松崎馬場跡 (那覇市歴史博物館所蔵).....	15
写真 14	明治期の松崎馬場跡と龍淵橋 (琉球大学附属図書館所蔵).....	15
写真 15	戦前の松崎馬場跡 (那覇市歴史博物館所蔵).....	16
写真 16	戦前の航空写真 (沖縄県教育庁文化財課所蔵).....	16
写真 17	トレンチ2・3から出土した現代磁器.....	17
写真 18	トレンチ1全景(東から).....	21
写真 19	トレンチ1北壁分割①(南から).....	22
写真 20	トレンチ1北壁分割②(南から).....	22
写真 21	トレンチ1北壁分割③(南から).....	23
写真 22	トレンチ1北壁分割④(南から).....	23
写真 23	トレンチ1溝1下部北壁(南西から).....	24
写真 24	トレンチ19層検出状況(上が北).....	24
写真 25	トレンチ2北壁(南西から).....	26
写真 26	トレンチ2南壁(北西から).....	26
写真 27	トレンチ2北壁分割①(南から).....	27
写真 28	トレンチ2北壁分割②(南から).....	27
写真 29	トレンチ2北壁分割③(南から).....	28
写真 30	トレンチ2北壁分割④(南から).....	28
写真 31	トレンチ2北壁分割⑤(南から).....	29
写真 32	トレンチ2北壁分割⑥(南から).....	29
写真 33	トレンチ27層検出状況(上が北).....	30
写真 34	トレンチ215層検出作業状況(北東から).....	30
写真 35	トレンチ3北壁(南から).....	32
写真 36	トレンチ3北壁分割①(南から).....	32
写真 37	トレンチ3北壁分割②(南から).....	33
写真 38	トレンチ3北壁分割③(南から).....	33
写真 39	トレンチ3北壁分割④(南から).....	34
写真 40	トレンチ3南壁(北から).....	34
写真 41	トレンチ4北壁(南東から).....	36
写真 42	トレンチ4北壁分割①(南東から).....	36
写真 43	トレンチ4北壁分割②(南から).....	37
写真 44	トレンチ4北壁分割③(南から).....	37
写真 45	トレンチ4北壁分割④(南から).....	38
写真 46	トレンチ46層検出状況(上が北).....	38
写真 47	トレンチ411層近世の整地層 検出状況(南西から).....	39
写真 48	トレンチ411・13層近世の整地層・道跡 検出状況(上が北).....	39
写真 49	トレンチ5北壁(南から).....	40
写真 50	トレンチ52・4層検出状況(南から).....	40
写真 51	トレンチ1設定状況(南東から).....	43
写真 52	トレンチ1道跡検出作業状況(南から).....	43
写真 53	トレンチ1道跡、石列1、石敷き1(南から).....	44
写真 54	トレンチ1道跡、石列1、石敷き1(東から).....	44
写真 55	トレンチ1溝1(上が南).....	45
写真 56	トレンチ1集石1(東から).....	45
写真 57	トレンチ1全景(西から).....	46
写真 58	トレンチ1全景(東から).....	47
写真 59	トレンチ2設定状況(東から).....	50
写真 60	トレンチ2作業状況(東から).....	50
写真 61	トレンチ2道跡①(西から).....	51
写真 62	トレンチ2道跡②(西から).....	52
写真 63	トレンチ2道跡分割①(上が南).....	53
写真 64	トレンチ2道跡分割②(上が南).....	53
写真 65	トレンチ2道跡(東から).....	54
写真 66	トレンチ2石列2(東から).....	55
写真 67	トレンチ2石列2(南から).....	55
写真 68	トレンチ2石列2西側(南から).....	56
写真 69	トレンチ2井戸跡1(北から).....	56
写真 70	トレンチ27層検出状況(北東から).....	57

## 写真目次

写真 71	トレンチ2 全景(東から).....	57	写真 95	トレンチ4 道跡東端(上が南).....	80
写真 72	トレンチ2 出土遺物(1).....	61	写真 96	トレンチ4 6層検出状況(東から).....	81
写真 73	トレンチ2 出土遺物(2).....	62	写真 97	トレンチ4 8層近代の整地層(東から).....	82
写真 74	トレンチ3 設定状況(東から).....	65	写真 98	トレンチ4 11層近世の整地層(北西から).....	82
写真 75	トレンチ3 作業状況(北東から).....	65	写真 99	トレンチ4 11層近世の整地層(北東から).....	83
写真 76	トレンチ3 道跡①(西から).....	66	写真 100	トレンチ4 全景(東から).....	84
写真 77	トレンチ3 道跡②(西から).....	66	写真 101	トレンチ4 出土遺物(1).....	88
写真 78	トレンチ3 道跡西端(南西から).....	67	写真 102	トレンチ4 出土遺物(2).....	89
写真 79	トレンチ3 道跡西端(西から).....	67	写真 103	トレンチ5 設定状況(南西から).....	92
写真 80	トレンチ3 道跡東端(東から).....	68	写真 104	トレンチ5 作業状況(南西から).....	92
写真 81	トレンチ3 石積み1と道跡(西から).....	68	写真 105	トレンチ5 表土掘削状況(北西から).....	93
写真 82	トレンチ3 5層近代の整地層(東から).....	69	写真 106	トレンチ5 全景(南から).....	93
写真 83	トレンチ3 5層近代の整地層(西から).....	69	写真 107	トレンチ5 全景(東から).....	94
写真 84	トレンチ3 8層近世の整地層(南から).....	70	写真 108	脊椎動物遺体.....	97
写真 85	トレンチ3 9層近世の造成土(南から).....	70	写真 109	貝及びウニ類遺体.....	97
写真 86	トレンチ3 南壁の土層堆積状況(北東から).....	71	写真 110	花粉化石・植物珪酸体.....	113
写真 87	トレンチ3 全景(東から).....	71	写真 111	大型植物遺体.....	114
写真 88	トレンチ3 全景(西から).....	72	写真 112	顕微鏡・マイクロスコープ(1).....	115
写真 89	トレンチ3 出土遺物.....	74	写真 113	顕微鏡・マイクロスコープ(2).....	116
写真 90	トレンチ4 設定状況(東から).....	78	写真 114	作業工程(1).....	118
写真 91	トレンチ4 設定状況(北東から).....	78	写真 115	作業工程(2).....	119
写真 92	トレンチ4 作業状況(北東から).....	79	写真 116	作業工程(3).....	120
写真 93	トレンチ4 道跡東端①(東から).....	79	写真 117	作業工程(4).....	121
写真 94	トレンチ4 道跡東端②(東から).....	80			

## 表 目 次

表 1 土層対応表	18	表 26 塚出土状況	104
表 2 トレンチ1～5層序対応表	19	表 27 瓦出土状況	105
表 3 トレンチ1 遺物出土状況	42	表 28 円盤状製品出土状況	106
表 4 トレンチ2 出土遺物観察表	58	表 29 金属製品出土状況	106
表 5 トレンチ2 遺物出土状況	62	表 30 石製品出土状況	106
表 6 トレンチ3 出土遺物観察表	72	表 31 ガラス製品出土状況	106
表 7 トレンチ3 遺物出土状況	75	表 32 錢貨出土状況	106
表 8 トレンチ4 出土遺物観察表	85	表 33 土製品出土状況	106
表 9 トレンチ4 遺物出土状況	90	表 34 貝製品出土状況	106
表 10 トレンチ2/トレンチ4 遺物出土状況	90	表 35 骨製品出土状況	106
表 11 トレンチ5 遺物出土状況	91	表 36 プラスチック製品出土状況	106
表 12 遺物出土状況(総合)	99	表 37 平瓦の加工品出土状況	106
表 13 中国産青磁出土状況	100	表 38 現代遺物出土状況	106
表 14 中国産白磁出土状況	100	表 39 不明遺物出土状況	106
表 15 中国産青花出土状況	100	表 40 脊椎動物遺体種類一覧	107
表 16 中国産瑠璃釉出土状況	100	表 41 脊椎動物遺体(魚類)出土状況	107
表 17 中国産褐釉出土状況	100	表 42 脊椎動物遺体(哺乳類)出土状況	107
表 18 タイ産褐釉陶器出土状況	100	表 43 貝類の生息地類型	108
表 19 瓦質土器出土状況	100	表 44 貝及びウニ類遺体出土状況	108
表 20 土器出土状況	100	表 45 分析試料、分析項目一覧	109
表 21 本土産陶磁器出土状況	101	表 46 放射性炭素年代測定結果	110
表 22 沖縄産施釉陶器出土状況	102	表 47 花粉分析結果	111
表 23 沖縄産無釉陶器出土状況	103	表 48 植物珪酸体分析結果	111
表 24 陶質土器出土状況	104	表 49 微細物分析結果	112
表 25 陶管出土状況	104		

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

かつて琉球王国の政治・文化の中心であった首里には、首里城をはじめとする王府の中枢施設が配置されていた。それらは明治12(1879)年の琉球処分において廃絶し、多くが撤去されたものの、いくつかの建造物は明治以降も残され、大正15(1925)年には首里城正殿や円覚寺仏殿などは国宝に指定された。しかし、昭和19(1944)年に首里城地下において日本軍の第32軍司令部壕が構築されたことにより、首里は米軍からの集中砲火を浴びることとなった。それと共に、国宝に指定されていた建造物を含む首里に所在する多くの文化財が破壊され、焼失した。

戦後、琉球政府により守礼門や円覚寺総門、圓比屋武御嶽石門、円鑑池、弁財天堂などが修復、復元整備される一方で、戦後復興による宅地開発などが進められたことにより、戦前に見られた首里のまちなみの多くが失われていくこととなる。

松崎馬場跡についても、琉球大学ならびに沖縄県立芸術大学の施設などが建造されたことにより、大きく景観が変貌することとなる。

そのような状況下で、昭和47(1972)年に策定された第1次沖縄振興計画に盛り込まれた要項に基づいて、総理府外局沖縄開発庁の予算で、沖縄県教育庁文化課による首里城跡の復元整備を目的とした発掘調査が実施されることとなった。更に昭和63(1988)年に沖縄県土木建築部が首里城公園基本設計を策定し(沖縄県土木建築部 1988)、それに基づいて沖縄県教育庁文化課が平成3(1991)年度から龍潭・ハンタン山を皮切りに発掘調査を実施することとなった。その後、天界寺跡や綾門大道跡などが調査され、平成12(2000)年度以降は、沖縄県立埋蔵文化財センターが調査主体となって、中城御殿跡や松崎馬場跡などの調査が継続して行われている。

今回の報告に係る松崎馬場跡の調査は、首里城公園基本設計に沿って、将来的な公園整備を実施するに当たっての基礎データを得る目的で行った遺構確認調査である。当初の首里城公園基本設計では、松崎馬場を歴史の道として再生を図ることや幅員4m、最大勾配15%、石粉舗装といったことが策定されていた(沖縄県土木建築部 1988)。しかし、古写真や史料などからは松崎馬場の詳細までは判明できないことから、発掘調査による成果に拠るところが大きいとして、平成21(2009)年度、平成23(2011)年度、平成30(2018)年度に沖縄県土木建築部より予算の分任を受けて、沖縄県立埋蔵文化財センターが主体となって発掘調査を実施した。これらの成果については、2冊の発掘調査報告書にまとめられている(沖

縄県立埋蔵文化財センター 2017, 2020)。

また、令和元年10月31日に発生した首里城火災を受けて、復興の気運が高まり、首里城公園の整備についても加速していくこととなった。

令和4(2022)年度の調査については、文化財保護法第99条の規定により、沖縄県教育庁文化財課へ着手報告を行った(令和4年7月4日付 埋文第242号)。また、調査終了後には終了報告を行うとともに(令和4年10月7日付 埋文第408号)、発見された埋蔵文化財(出土品)について内訳・数量の報告を行った(令和4年10月7日付 埋文第409号)。

なお、松崎馬場跡の遺跡範囲については、これまでの発掘調査の成果や、「首里古地図」の情報、隣接する遺跡の範囲などを考慮して決定された(令和6年度1月10日付教文第1338号)。

## 第2節 調査体制

松崎馬場跡の発掘調査は、令和4(2022)年度に実施し、資料整理作業と報告書作成は、令和5・6(2023・2024)年度に実施した。その体制は次の通りである(職名は当時のもの)。

### 令和4(2022)年度 発掘調査

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶺満

**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課

課長 瑞慶覽勝利

記念物班 班長 仲座久宜、主任専門員 金城貴子

**事業実施** 沖縄県立埋蔵文化財センター

所長 前田直昭

総務班 班長 池田みき子、主査 渡久山盛之

調査班 班長 中山晋、主任専門員 羽方誠

専門員(臨時の任用職員) 城間宏次郎

**発掘調査作業** 沖縄県立埋蔵文化財センター

調査班 主任専門員 羽方誠

専門員(臨時の任用職員) 城間宏次郎

史跡・埋蔵文化財調査員 高原彬浩、西江洸嬉

発掘調査作業員

新垣良雄、大城勝則、襲田智、親川あや子

新本淳、吉本みゆき

### 令和5(2023)年度 資料整理

**事業主体** 沖縄県教育委員会

教育長 半嶺満

**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課  
課長 瑞慶覧勝利  
記念物班 班長 新垣力、主任専門員 亀島慎吾  
**事業実施** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 前田直昭  
副参事 仲座久宜  
総務班 班長 城間奈津子  
主査 渡久山盛之  
調査班 班長 中山晋、主任専門員 羽方誠  
埋蔵文化財資料整理員 工藤孝美  
その他協力者  
上原園子、小渡直子、嘉数渚(埋蔵文化財資料整理員)

#### 令和6(2024)年度 資料整理

**事業主体** 沖縄県教育委員会  
教育長 半嶺満  
**事業所管** 沖縄県教育庁文化財課  
課長 瑞慶覧勝利  
記念物班 班長 新垣力、主任専門員 亀島慎吾  
専門員 名嘉李果  
**事業実施** 沖縄県立埋蔵文化財センター  
所長 池田潤  
副参事 仲座久宜  
総務班 班長 城間奈津子、主査 村吉由美子  
調査第2班 班長 仲座久宜、主任専門員 羽方誠  
専門員 花城媛子  
埋蔵文化財資料整理員 小渡直子、嘉数渚、工藤孝美

### 第3節 調査経過

#### 1. 発掘調査

##### 令和4(2022)年度

調査期間は、令和4年7月1日から令和4年9月30日までの3か月間、調査面積は33m<sup>2</sup>(トレンチ1~5の合計面積)であった。

調査はまず、草刈り作業や、侵入防止用のカラーコーンを設置するなどの環境整備を行った。その後、トレンチ設定用の測量を行い、トレンチの四隅に目印となる釘やピンポールを打ち込んだ。

トレンチ設定後は、表面清掃を行い、磁気探査を行った。トレンチの掘削は、まずトレンチ1・3から開始し、その後トレンチ5・2・4の順で着手した。

調査を進めていくと、近世から近代にかけての遺構が現れ、近世の造成土の下から道の路面が現れた。

調査終盤の9月10日に、一般の方々を対象に現地説明会を行った結果、参加者は72名であった。

調査終了後は、土嚢を使って遺構を保護しながら遺構表面の凹凸を減らし、その上からブルーシートをかけた後に、土で埋め戻した。

出土品の量は、遺物収納コンテナで4箱であった。

#### 2. 資料整理

##### 令和5(2023)年度

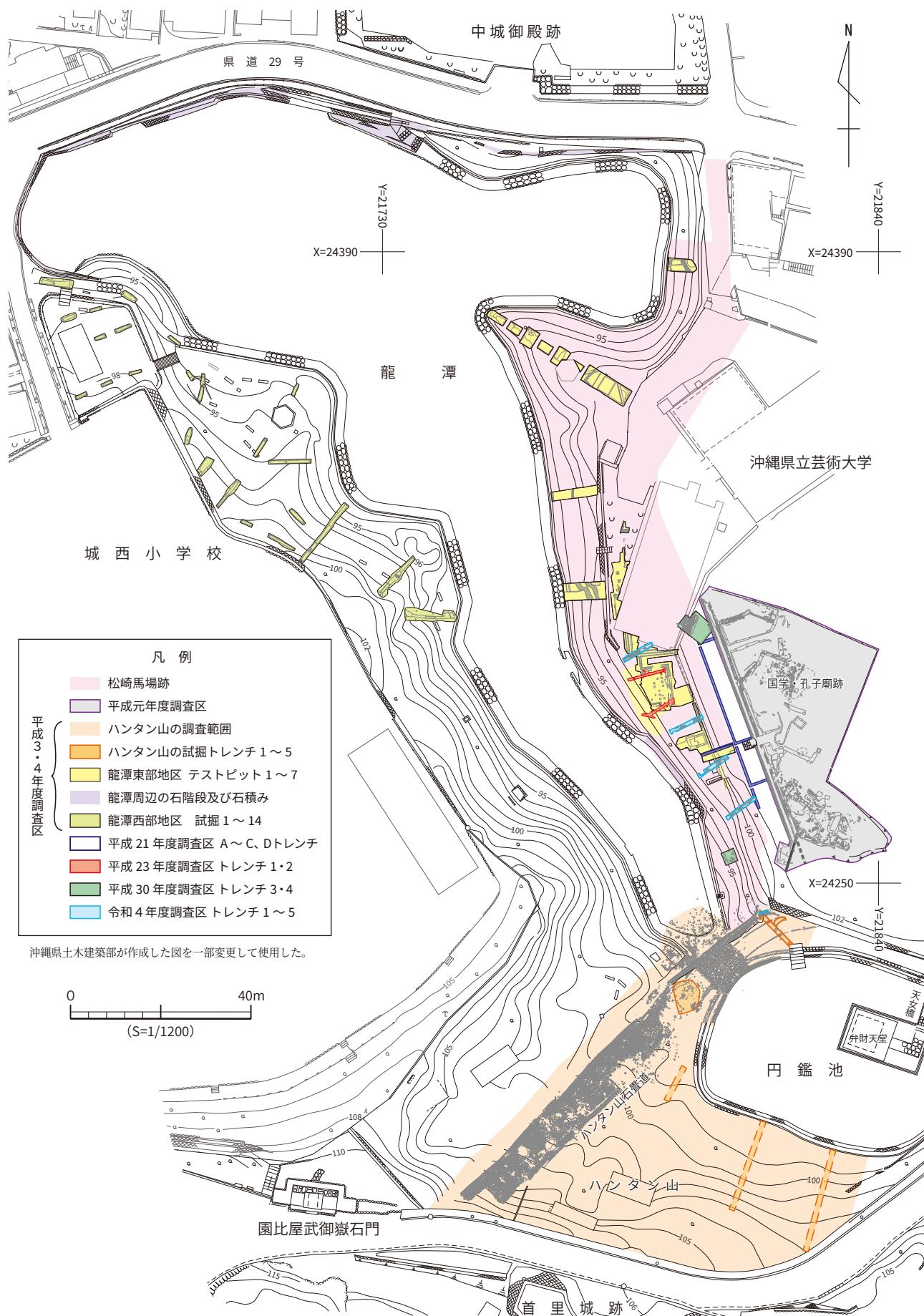
出土遺物の洗浄作業については、発掘調査期間中の雨天時に現場事務所内で行っていたため、令和5年度は、遺物のナンバーリング作業から実施した。その後は遺物の分類、接合、報告対象遺物の抜き出しを行った。

また、過去に松崎馬場跡とその周辺で行われた発掘調査の記録類を確認し、令和4年度の調査成果との整合を図った。

##### 令和6(2024)年度

報告対象遺物の撮影・実測・トレースを行い、その後レイアウト作業、原稿執筆、編集作業を行った。

そして指名競争入札により落札した印刷業者と契約を結び、本調査報告書を300部刊行した。刊行した報告書については、県内外の教育委員会・図書館・大学・研究機関などに配布した。



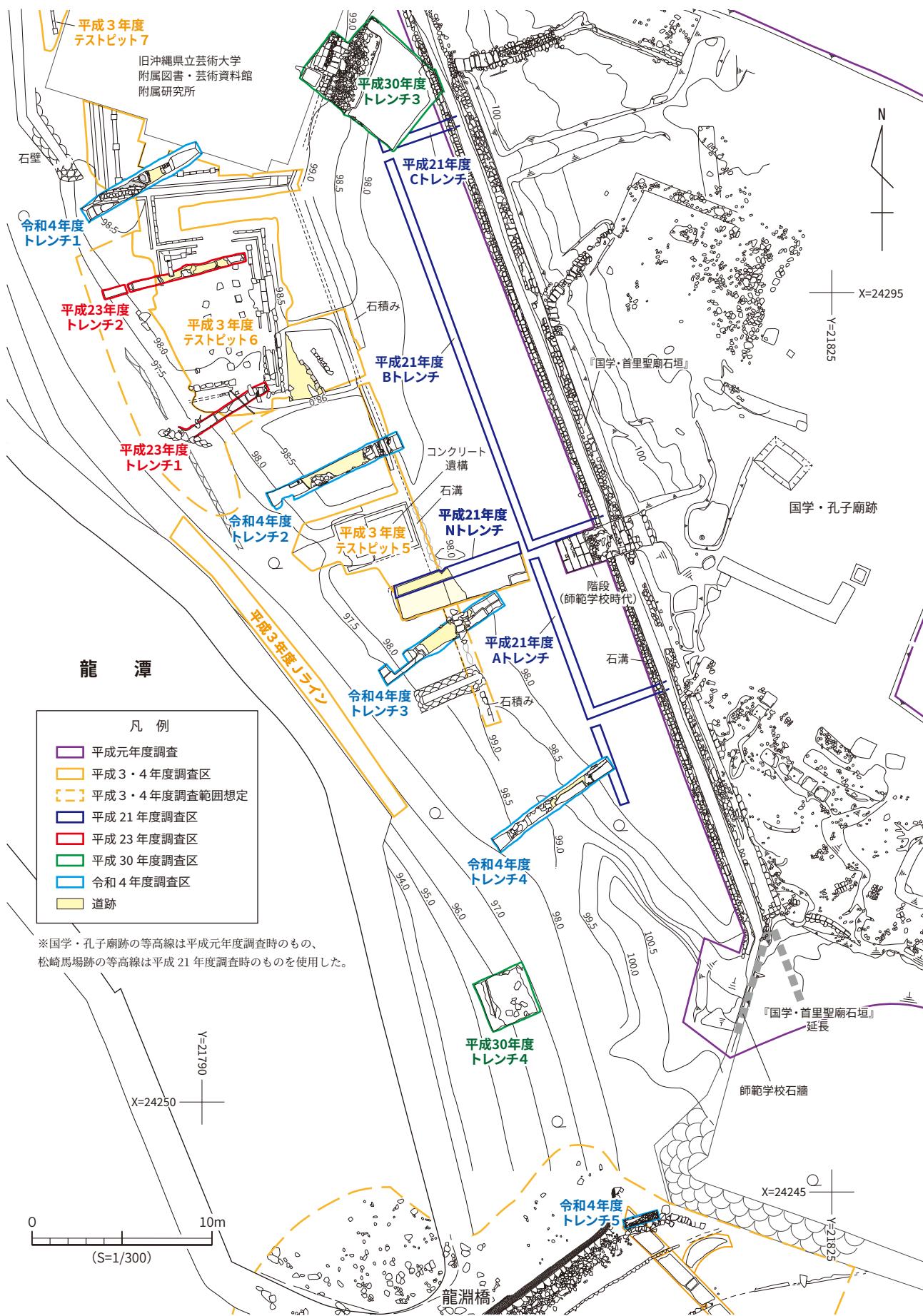


図2 松崎馬場跡の調査区平面図



写真1 調査開始前の状況（北から）



写真2 磁器探査の状況（北東から）



写真3 作業状況（南から）



写真4 除草作業（北から）



写真5 掘削作業(東から)



写真6 撮影状況(東から)



写真7 測量作業



写真8 現地説明会の状況(東から)



写真9 埋め戻し作業(東から)



写真10 埋め戻し後の状況(南東から)



写真 11 現場事務所(西から)



写真 12 現場事務所内での作業

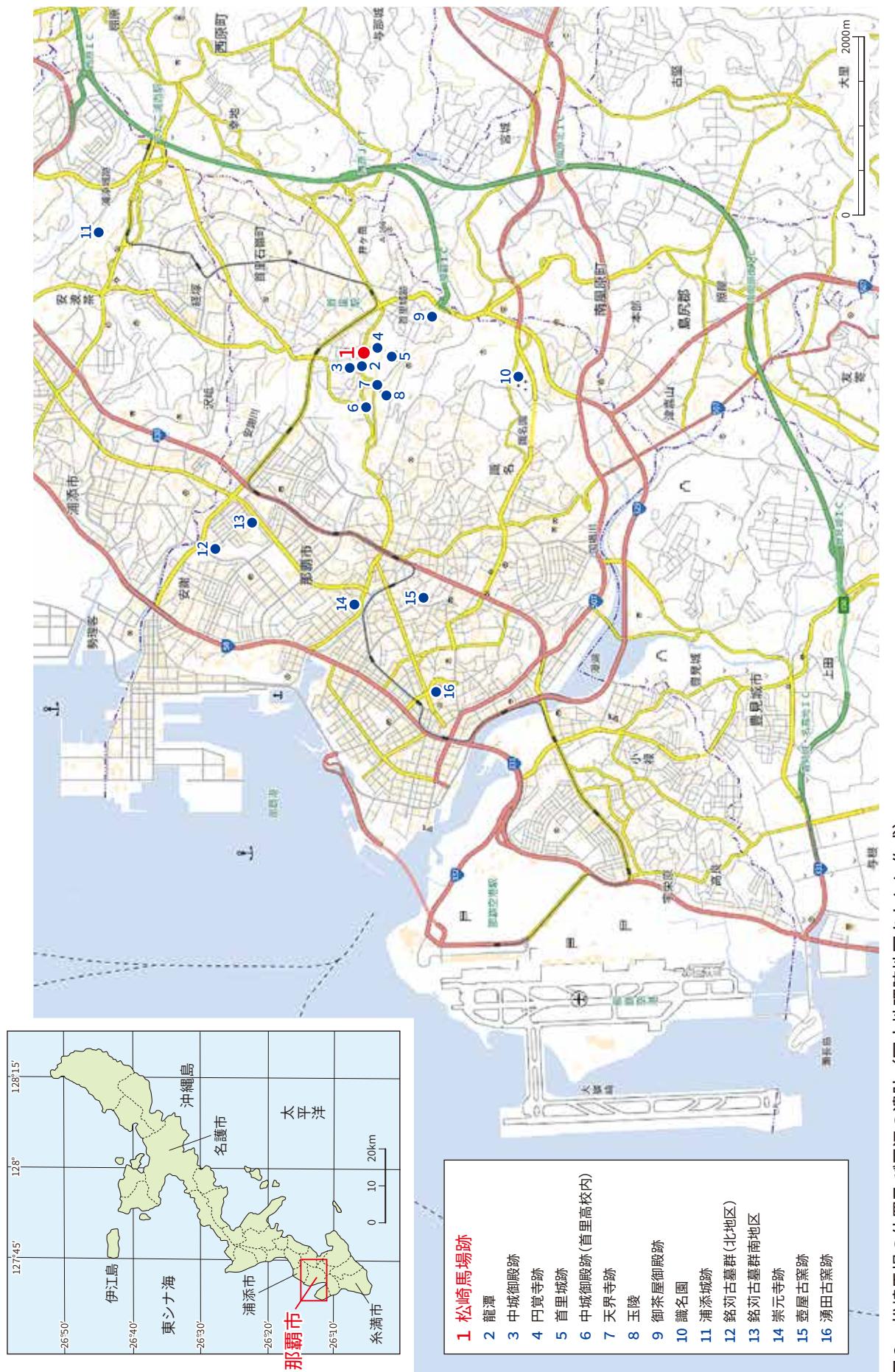


図3 松崎馬場の位置及び周辺の遺跡（国土地理院地図をもとに作成）

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

松崎馬場跡が所在する那覇市は、沖縄島南部の西海岸に面しており、東西約10km、南北約8kmと東西にやや長い形をしている。北は浦添市、東は西原町・南風原町、南は豊見城市と接している。市のほぼ中央にあたる泉崎には、沖縄県庁や那覇市役所があり、行政の中心地となっている。その東隣にあたる久茂地・牧志一帯には、国際通りを中心に多くの商店や飲食店が立ち並び、観光客も多く訪れる。また、西海岸沿いには、北から那覇新港、泊港、那覇港、那覇空港があり、物流の中心地にもなっている。

那覇市の東側にあたる首里一帯は、那覇市内でも標高が最も高い地域となっている。最高所の弁が岳(165.6m)を起点に、北は西原町との境に沿って高所が続き、西は安里川に沿って急斜面が形成される。このような高所からは、安謝川の支流と安里川の支流によって分けられた台地や丘陵が西に向かって延びている。安里川の支流によって形成された台地は首里台地とも呼ばれ、首里城跡をはじめ中城御殿跡や玉陵など琉球王国時代の代表的な遺跡が集中している。

松崎馬場跡は、首里城の北側、龍潭の東岸に沿って立地する遺跡で、現在は、遺跡の大部分が沖縄県立芸術大

学の敷地となっている。標高97~99mに位置しており、南から北に向かって緩やかに高くなる地形となっているが、戦後の造成等によって、盆地状に低くなっている場所や、盛土されている場所もある。龍潭の水面と松崎馬場跡は、比高差が約4mもあり、急な落ち込みを見せる。また、「国学・首里聖廟石垣」がある南東側では、石垣の東西で3m程度の高低差がある。

首里台地の基盤を構成するのは、地質時代の第四紀更新世(180~160万年前~1万年前)に区分される琉球石灰岩であり、その下層には鮮新世(500万年前~160万年前)から中新世(2,300万年前~500万年前)に区分される島尻層群が堆積している。この表層を成す琉球石灰岩層は、透水性が高く、浸透した雨水は不透水層である島尻層のクチャ(泥岩)の上面まで至り、両層の境を伝って泉として湧き出す。首里周辺にある井泉や桶川はこのような不透水層から伝って湧き出した横井戸が大半を占めている。首里城の北に広がる龍潭は、周辺の不透水層から流れ出た雨水が溜まった池であり、松崎馬場周辺に溜まった雨水も西隣に位置する龍潭へ流れ込むような立地となっている。

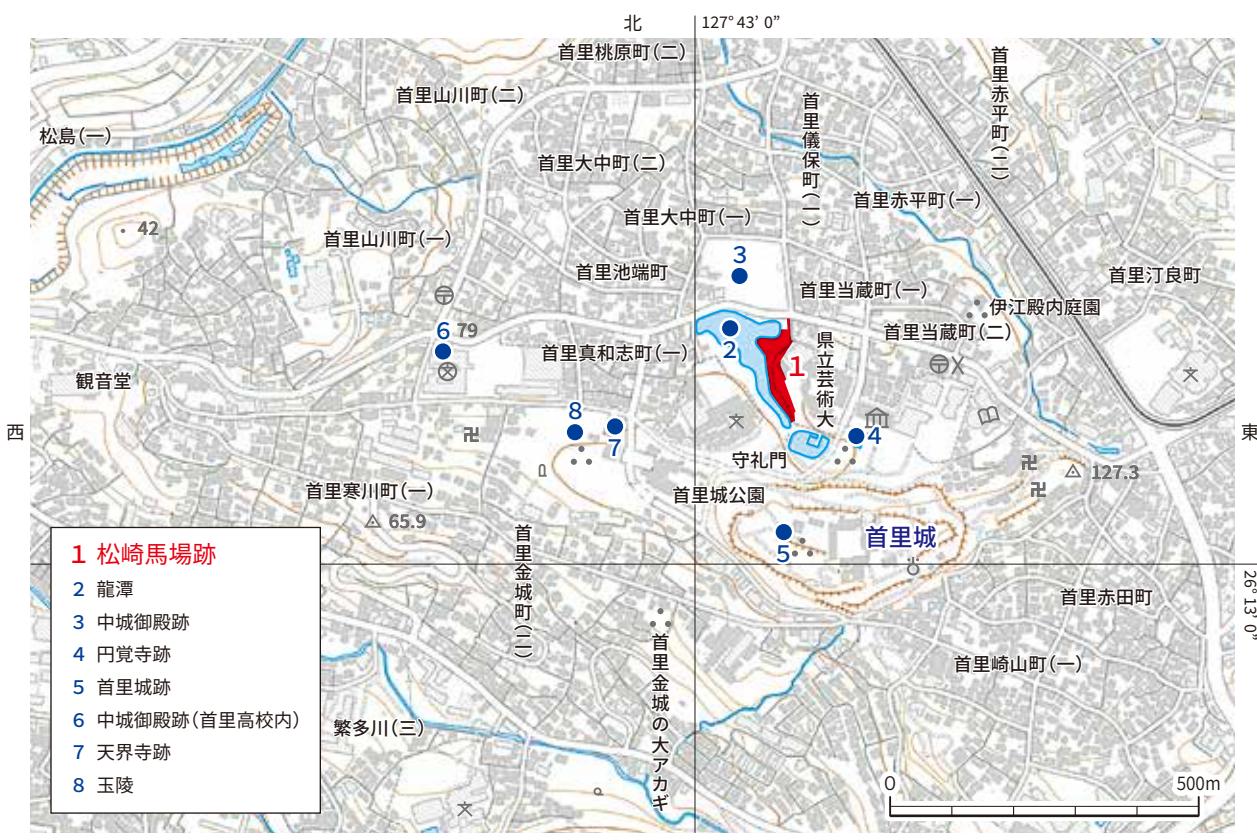


図4 松崎馬場跡の位置

## 第2節 歴史的環境

龍潭の東岸に位置する松崎馬場跡は、南北に長い遺跡で、琉球王国時代には幹線道路の一部や催事場として、戦前は師範学校の敷地として利用された場所であった。

1427年に建立された石碑「安国山樹華木之記」によると、尚巴志王代の国相懐機の指揮によって龍潭が掘削され、安国山を高く築いたことが記されている。この時、龍潭の南西側に接する安国山に加えて、東側一帯についても、首里城の外苑として何らかの整備が行われた可能性がある。

また、1597年に建立された「浦添城の前の碑」や『球陽』尚寧王9年条によると、板橋を石橋に改修して太平橋と称し、儀保くびりまでの道に石をはめたことが記されている。のことから、首里城を起点に龍潭の東岸を通り、太平橋を経由して浦添城に至る宿道がすでに存在していたことが考えられ、必要に応じて改修工事などが行われていたことがわかる。

さらに、18世紀前葉に成立した首里古地図には、蛇行しながら南北に延びる宿道と、龍潭との間に松林が描か

れています(図5)、この時期にはすでに松崎馬場の原形が成立していたと考えることができる。

1801年、現在の沖縄県立芸術大学の場所に首里王府の最高教育機関である国学が移設された。国学の設置に伴い、その周辺の景観整備も行われていく中で首里三平等と泊村の士族や庶民により、松崎前から国学までの道に嘉木が植栽され、白砂を敷いたことが『球陽』尚温王七年条に記されている(球陽研究会 1974年)。また、1866年に来琉した冊封使を歓待した諸行事の、会場の設営状況を図示した『冠船之時御座構之図』に所収されている「重陽宴松崎之図」には、この時期における松崎馬場の様子が詳細に描かれている(図6)。この図を見ると、龍潭で爬龍船競漕を行う様子や、松崎馬場に観覧席などが設けられたことがわかる。また、龍潭の東側には観覧席からの視界に配慮しつつ、松を主体とした樹木が並んでいる様子がわかる。

明治19(1886)年1月に師範学校が国学跡に移転すると、松崎馬場の様子が大きく変わっていくことになる。



図5 「首里古地図」(沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0) (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

松崎馬場と国学を隔てていた石垣については、一部積みなおしが行われた。これは、国学側の敷地を、一段低い松崎馬場側に拡張するためであった。この拡張工事によって、松崎馬場の南側が狭くなり、通行に支障をきたすようになったと考えられる。

昭和20(1945)年の沖縄戦で師範学校校舎は徹底的に破壊されたことにより、学校も廃止されるに至った。終戦直後の昭和20(1945)年には城北小学校敷地として利用され、その5年後の昭和25(1950)年に琉球政府によって琉球大学が首里城跡に設立され、国学跡並びに松崎馬場跡にも大学男子寮が設置された。この男子寮は鉄筋コンクリート造りであり、それらを建設するために周辺は広く造成が行われた。よって戦前までの様相とは更に一変することとなった。

加えて琉球大学が昭和59(1984)年に西原町へ全面移転が完了した後、松崎馬場跡は昭和61(1986)年に設置された沖縄県立芸術大学当蔵キャンパスの一部として取

り込まれ、図書館などの施設が建てられた。

このように近代以降の松崎馬場跡は、主に学校用地として使用されることとなり、敷地内に学校施設が建てられるなど、大きくその様相が変わった。戦前までは松崎馬場の縁に松の大木が植えられているのが、古写真からうかがうことができるが(写真13～15)、戦後になると、松の木は全く見られなくなる。太平洋戦争時に首里城周辺の松は、壕の坑木として伐採されたという聞き取りがあることから(久手堅2000)、松崎馬場の松も坑木用材として伐採されたと考えることができる。

また、東隣の国学・孔子廟跡は、沖縄県教育委員会により平成元(1989)年に発掘調査された。この調査では国学・孔子廟と松崎馬場を画していた石牆と石溝が約56mにわたって検出されている。あわせて、この調査の際に松崎馬場跡も発掘されている(上原、島袋1991)。なお、平成5(1993)年には、石牆と石溝は「国学・首里聖廟石垣」として県指定史跡となり、現地保存されている。

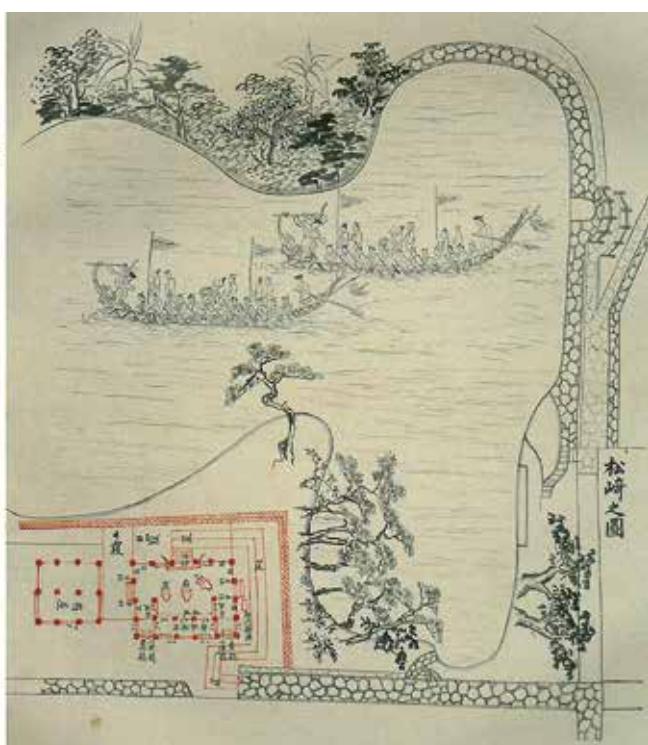
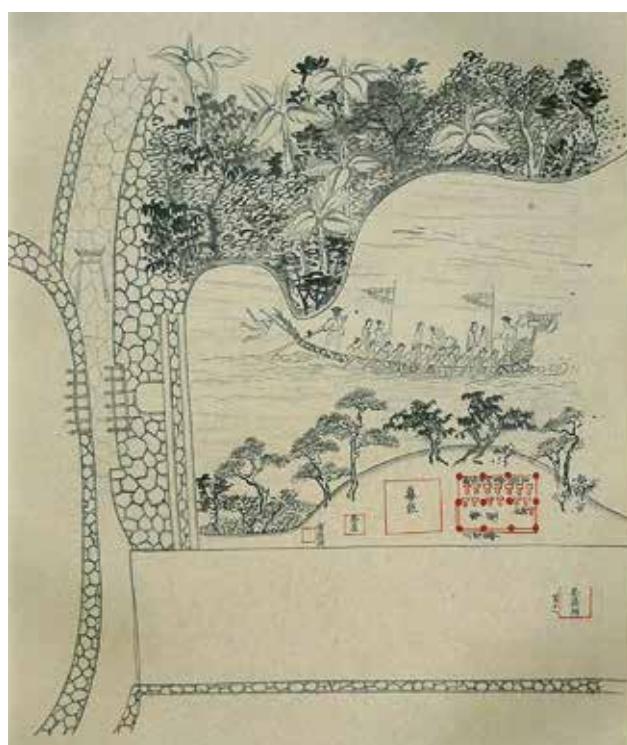
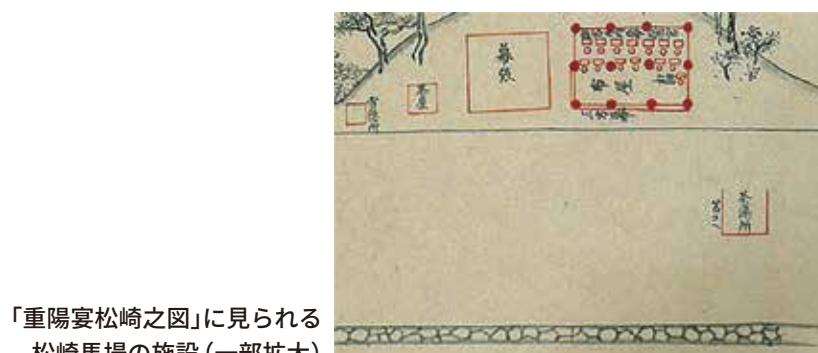


図6 「重陽宴松崎之図」に見られる松崎馬場の施設(沖縄県立博物館・美術館所蔵)



「重陽宴松崎之図」に見られる  
松崎馬場の施設(一部拡大)

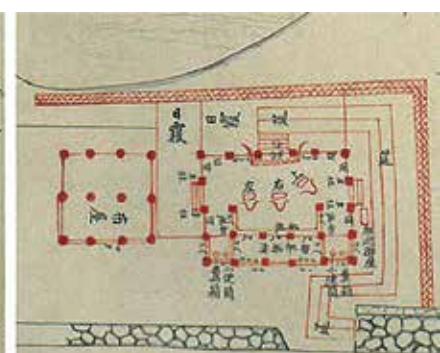




写真 13 明治期の松崎馬場跡（那覇市歴史博物館所蔵）



写真 14 明治期の松崎馬場跡と龍淵橋（琉球大学附属図書館所蔵）



写真 15 戦前の松崎馬場跡（那覇市歴史博物館所蔵）



写真 16 戦前の航空写真（沖縄県教育庁文化財課所蔵）

## 第3章 調査成果

### 第1節 層序

#### 1 トレンチ1(図7)

トレンチ1北壁については、9層に分層した。1層は表土、2・3層は、戦後の搅乱層または平成3年度調査時の埋め土である。4層は、戦前の師範学校の跡と考えられる溝1の下部に堆積している。6層は、クチャが混じる粘質土で、近世の造成土と考えられる。7層は、道跡縁石の外側(東側)に堆積しており、クチャや石灰岩が混じり粘性が強い。近世の造成土か。8層は、道跡である。9層は、8層と同質の石灰岩礫をやや多く含んでいることから、道の造成に関係する層と考えられる。

#### 2 トレンチ2(図9)

トレンチ2北壁については、19層に分層した。1層は表土、2・3層は、平成元年度調査時の埋め土である。7層は、大量の炭からなる層で、現代磁器やガラス製品、プラスチック製品、ゴム製品などが遺物コンテナで3箱分出土した。これらの遺物については、簡単な記録を取ったあと、そのほとんどを現場に残置した。戦後の層と考えられる。14層は、拳大のクチャを大量に含む。15層は、14層の直下に堆積しているが、14層との土質の違いのためか互いの密着度が低かった。そのため、14層を掘削する際、剥がれるようにして15層の表面を検出することができた。その表面は、平坦ではなく凹凸が多い。また表面には、道の路面に使われた石灰岩(牧港石灰岩)と同質の黄褐色をした石灰岩が含まれていることから、道の造成層に相当する可能性がある。18層は、道跡である。最も高い部分は標高約97.4mであるが、後世の搅乱によって削られているため平坦ではない。19層は、地山の可能性があるクチャ層で、トレンチ東端付近の掘削壁面で検出した。

#### 3 トレンチ3(図11)

トレンチ3北壁については、12層に分層した。4層は、石積み1の裏込めに相当する層で、中位に瓦礫層がある。5層は、5mm前後のサンゴ礫が大量に混じる層で、近代の整地層と考えられる。6・7層は近代の造成層と考えられる。8層は、5層と同様にサンゴ礫が中量混じる層で、近世の整地層と考えられる。9層は、地山由来のクチャが混じる粘質土で、近世の造成層と考えられる。10層は、道に相当する明黄褐色の層である。西側(龍潭側)に向かってやや傾斜しており、表面を観察すると、東側に比べて西側の凹凸が目立つ。11層は、石灰岩礫が多く混じる粘性の強い層で、宮古式土器が出土し

た。12層は、20cm前後の石灰岩を固く敷き詰めた層である。道を設置する前に行った、地盤補強のための層と考えられる。

#### 4 トレンチ4(図12)

トレンチ4北壁については、15層に分層した。5層は、石灰岩礫を含む層で、近代以降の整地層の可能性がある。6層は、炭を多く含む黒褐色の層で、瓦や錢貨、ヤコウガイなどの遺物が出土した。6層下位は、拳大の石灰岩礫を多く含む。8層は、サンゴ礫を多く含む層で、近代の整地層と考えられる。9・10層は、クチャを多く含む層で、近代の造成層と考えられる。11層は、サンゴ礫を多く含む層で、近世の整地層と考えられる。12層は、クチャを含む層で、近世の造成層と考えられる。13層は、道に相当する層で、縁石は残っていない。15層は、石灰岩礫を固く敷き詰めた層で、トレンチ3の12層と一連の層である。

#### 5 トレンチ5(図13)

トレンチ5北壁については、5層に分層した。4層は、石灰岩小礫が多く混じる黒褐色の層で、戦前の表土の可能性がある。5層は、石積みの裏込め石を覆う造成土である。



写真17 トレンチ2・3から出土した現代磁器

## 6 土層の特徴

今回の調査では、過去の調査と同様にサンゴ礫、石灰岩礫、クチャを含む層が多く確認された。サンゴ礫は、大きさが1cm前後で均一である。これらは近隣の海岸で採取して持ち込み、意図的に土砂に混ぜられたと考えられる。サンゴ礫を混ぜた理由については、水捌けのためか美観のためかは定かではないが、松崎馬場跡における土地造成の一画期ととらえることもできる。

また、1cm前後の石灰岩礫を多く含む地層もあり、サンゴ礫を多く含む層と同様、意図的に混入させて整地などを行っている様子がうかがえる。

松崎馬場跡の地山はクチャであるため、各時代の土層にクチャが含まれている様子が確認できる。特に近世～近代の造成土中に含まれていることが多い。

## 7 土層の対応関係と解釈

『松崎馬場跡－県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1)－』(22ページ 図11)に掲載されている平成21年度Nトレンチ北壁の土層図については、報告書を作成する際、原図の層序番号を振りなおす作業において、一部混乱が生じていることが判明した。そこでNトレンチ北壁土層の状況を明示し、Nトレンチの南側に設定した令和4年度トレンチ3の北壁土層との対応表を作成した。対応表の作成にあたっては、土層所見や写真等を根拠にした。

令和4年度の調査では、サンゴ礫が密に混じる層を整地層、クチャが混じる粘質土を造成層ととらえた。平成21年度Nトレンチと比べたときに、いくつかの土層については時代や解釈に違いがあるが、これについては今後の課題とする。

表1 土層対応表

令和4年度 トレンチ3		平成21年度 Nトレンチ			
所 見		報告書 図面	報告書 所見	原図	所 見
1層	表土	1	1層	1	腐葉土
2層	戦後の搅乱	—	—	—	搅乱層
3層	戦前	5	4層	5	近代 造成 オリーブ褐色 南側に漆喰片が混入
4層	師範学校 石積み裏込め 瓦だまり	—	—	—	瓦だまり
		2	2層	2	近代 整地 コーラル層 トレンチ東端
		3	3層	3	近代 造成 オリーブ褐色 粘土層
5層	近代 整地 サンゴ礫	2	4層	1-b	近世 整地 コーラル層 トレンチ中央付近
		4	5層	4	近世 整地 コーラル層 原図の1-b層に対応
6層	近世 造成 クチャ	6	6層	6	近世 造成 混クチャブロック土層 混サンゴ礫層に伴う造成土 トレンチ中央～東側
7層	近世 造成 クチャ				
8層	近世 整地 サンゴ礫	7	7層	8	近世 造成 混サンゴ礫層
9層	近世 造成 クチャ	6	6層	6	近世 造成 混クチャブロック土層 混サンゴ礫層に伴う造成土 トレンチ西側
		8	8層	7	宿道 混礫土層 1cm大の石灰岩片多量に混じる
10層	宿道	9	9層	9	宿道 石灰岩紛砂層
		10	10層	10	造成 黄褐色 混クチャブロック土層 グスク土器が出土
11層	礫 宮古式土器が出土	11	11層	11a	造成 オリーブ褐色 混砂礫土層
		12	12層	12	造成 褐色 混砂礫土層
12層	地盤補強敷石	—	—	—	造成 地盤補強敷石
		—	—	—	地山(クチャ)

表2 レンチ1～5 層序対応表

	レンチ1	レンチ2	レンチ3	レンチ4	レンチ5
I層 (歴後～現代)	1層 表土(腐葉土)	1層 表土(腐葉土)	1層 表土(腐葉土)	1層 表土(腐葉土)	1層 表土(腐葉土)
	—	—	—	2層 平成21年度調査時の埋土	2層 平成21年度調査時の埋土
	2層 旧芸大図書館跡・平成3年度調査時の埋土か	—	—	3層 平成3年度調査時の埋土か	2層 平成3年度調査時の埋土か
	3層 平成3年度調査時の埋土か	—	—	3層 平成3年度調査時の埋土か	3層 平成3年度調査時の埋土か
	—	—	—	—	—
	2層 平成元年度調査時の埋土か	—	—	—	—
	3層 平成元年度調査時の埋土か	—	—	—	—
	4層 ケーブルの保護砂	—	—	—	—
	5層 ケーブルの埋土	—	—	—	—
	6層	—	—	—	—
	7層 灰層(現代磁器大量)	—	—	—	—
	8層	—	—	—	—
	9層	—	—	—	—
II層 (近代～戦前)	10層	—	—	4層 龍渕整備時の造成土か、 11層 道跡直上	—
	11層 道跡直上	—	—	2層 振乱(戦後)	—
	12層	—	—	—	—
	13層	—	—	—	—
	14層	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	4層 溝1に伴う造成土か 溝1	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	17層 石列2に伴う造成土か 石列2	—	—	—	—
III層 (近世)	—	—	—	—	—
	5層 近代造成層	—	—	4層 石積み1の裏込め 石積み1	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	5層 近代整地層	—
	—	—	—	6層 近代造成層	—
	—	—	—	7層 近代造成層	—
	—	—	—	8層 近代整地層	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	5層 近代造成層
IV層 (道跡)	8層 道跡舗装面 道跡	18層 道跡舗装面 道跡	10層 道跡舗装面 道跡	13層 道跡舗装面 道跡	—
	9層	—	—	11層	—
	—	—	—	14層	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
V層 (クスク時代)	—	—	—	12層 地盤補強敷石	15層 地盤補強敷石
	—	—	—	—	—
VI層 (地山)	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
VII層 (地山)	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—
VIII層 (地山)	—	—	—	—	—
	—	—	—	—	—

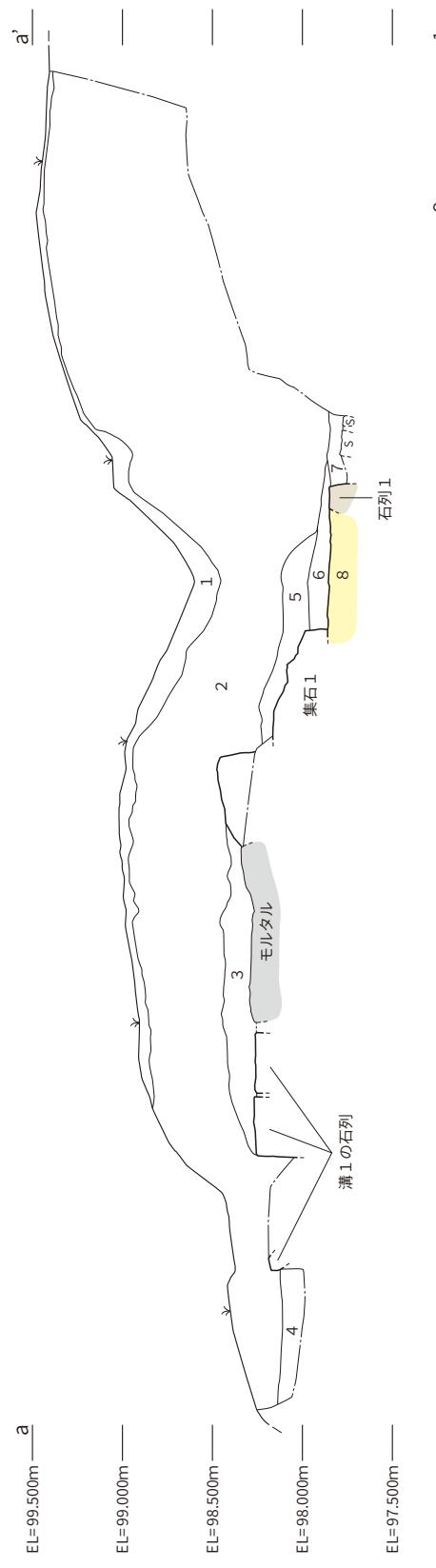


図7 トレンチ1北壁土層図

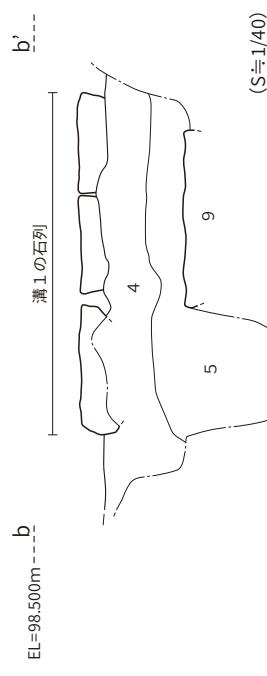


図8 トレンチ1溝1石列下壁面土層図(略図)

## 土層図所見

- 1: 暗褐色(10YR3/3)。繰りなし。小さな石灰岩礫が少量混じる。表土。現代の瓦礫と腐葉土。
- 2: オリーブ褐色(2.5Y4/3)。繰りなし。小さな石灰岩礫が中量混じる。砂質、瓦、煉瓦、現代陶磁器などの遺物を含み、東側はコーラル、砂、土嚢袋など、指乱度合が大きい。
- 3: オリーブ褐色(2.5Y4/3)。繰りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が少量混じる。粘性強い。砂粒含む。
- 4: オリーブ褐色(2.5Y4/3)。繰りややあり。小さな石灰岩礫が少量混じる。小さなクチャ粒が少量混じる。粘性強い。砂粒を少量含む。
- 5: 灰オリーブ色(5Y5/3)。繰りあり。小さな石灰岩礫が少量混じる。小さなクチャ粒が中量混じる。粘性強い。砂岩含む。
- 6: 暗オリーブ色(5Y4/3)。繰りあり。中程度の大きさのクチャ粒が中量混じる。粘性強い。ごく少量の砂粒、砂岩含む。
- 7: オリーブ色(5Y5/4)。繰りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が多量に混じる。中程度の大きさのクチャ粒が少量混じる。粘性強い。混入物ほほなし。
- 8: 明黄褐色(2.5Y7/6)。固く締まる。道跡の舗装面。
- 9: 褐色。石灰岩礫が中量混じる。

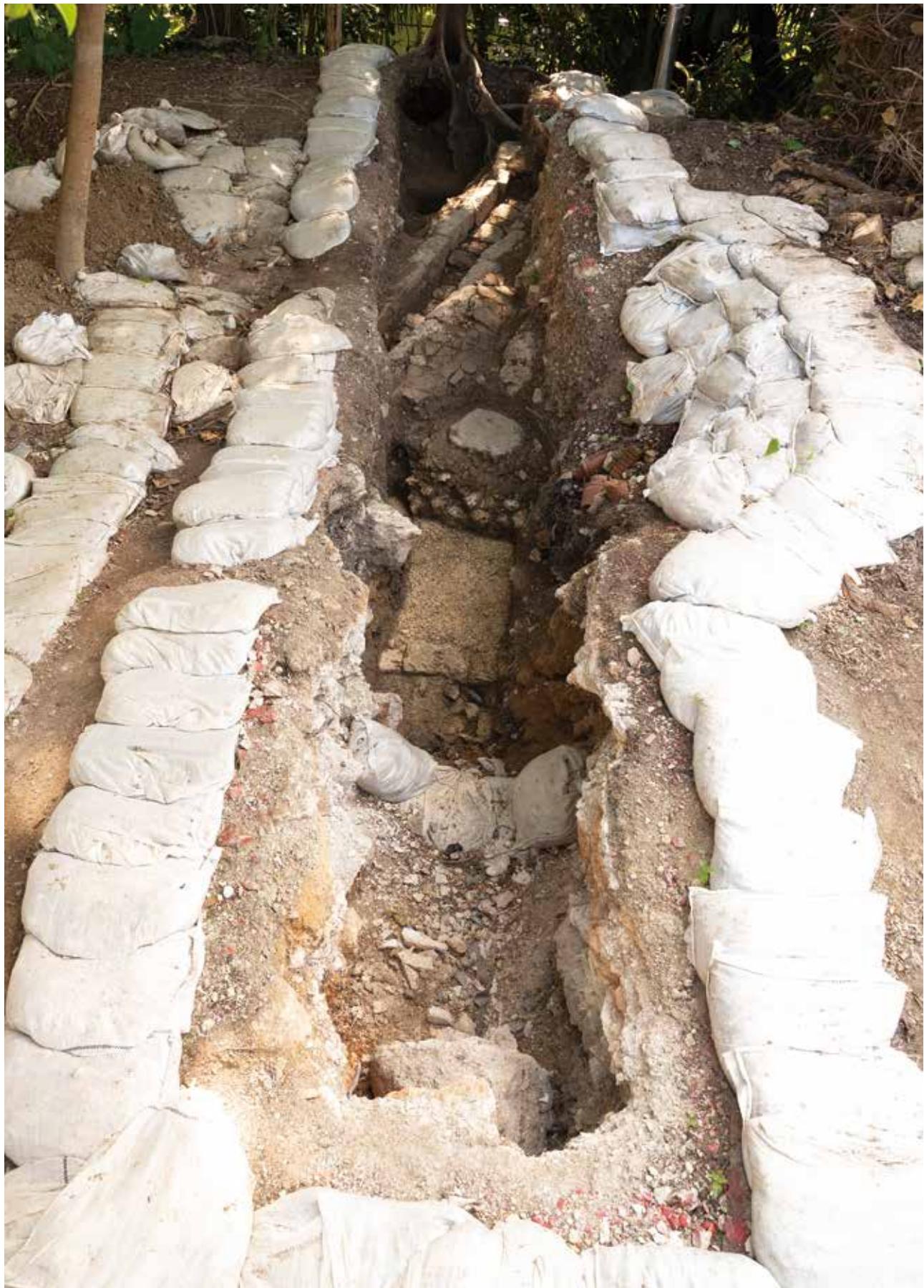


写真 18 トレンチ 1 全景（東から）



写真 19 トレンチ1 北壁分割①(南から)



写真 20 トレンチ1 北壁分割②(南から)



写真 21 トレンチ1 北壁分割③(南から)



写真 22 トレンチ1 北壁分割④(南から)



写真 23 トレンチ1 溝1下部 北壁(南西から)



写真 24 トレンチ1 9層検出状況(上が北)

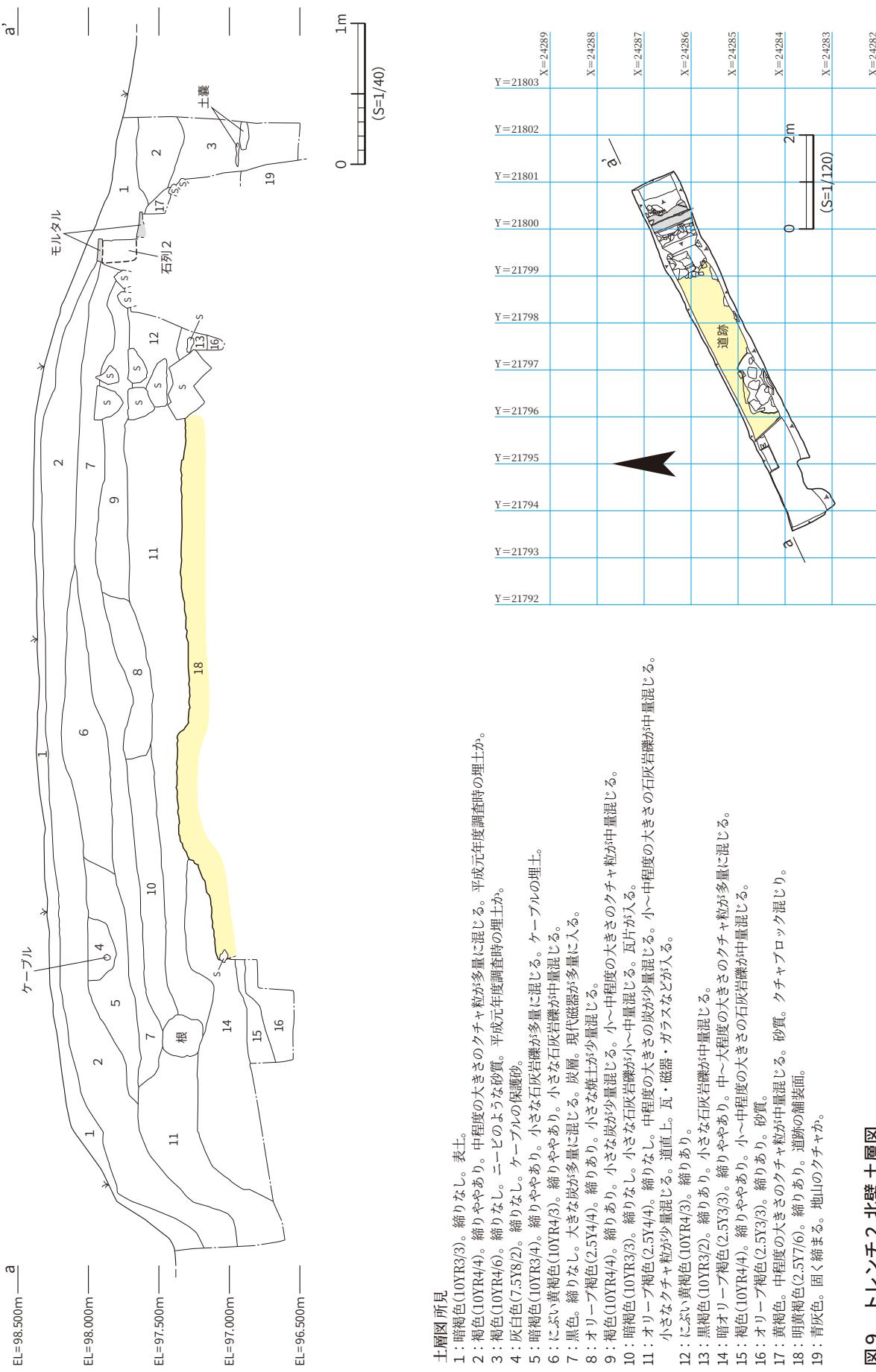




写真 25 トレンチ 2 北壁(南西から)



写真 26 トレンチ 2 南壁(北西から)



写真 27 トレンチ2 北壁分割①(南から)



写真 28 トレンチ2 北壁分割②(南から)



写真 29 トレンチ 2 北壁分割③(南から)



写真 30 トレンチ 2 北壁分割④(南から)



写真 31 トレンチ 2 北壁分割⑤(南から)



写真 32 トレンチ 2 北壁分割⑥(南から)



写真 33 トレンチ 2 7層検出状況(上が北)



写真 34 トレンチ 2 15層検出作業状況(北東から)

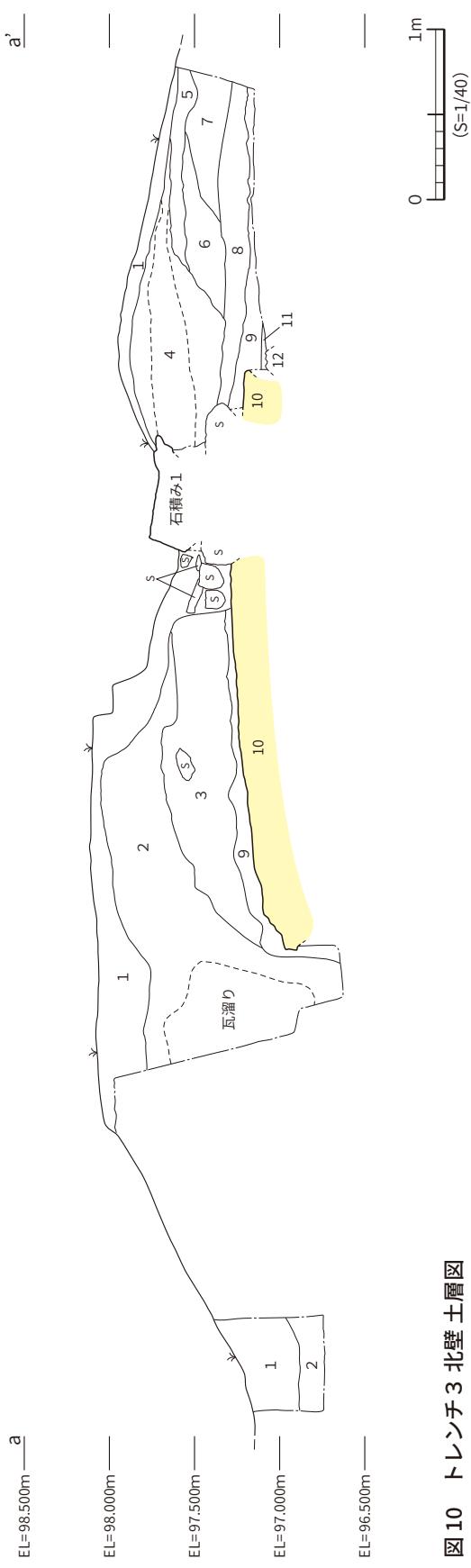


図10 テレンチ3北壁土層図

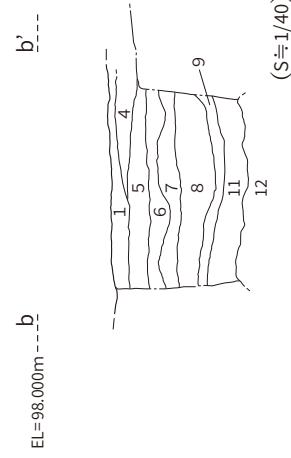


図11 テレンチ3南壁土層図（略図）

## 土層図所見

- 1: 黒褐色(1OYR3/1)。繊りなし。表土。砂質。ガラス・瓦含む。
- 2: 暗褐色(1OYR3/3)。繊りなし。小さな嵌が少量混じる。中程度の大きさの石灰岩礫が中量混じる。
- 3: 暗灰褐色(2.5YR4/2)。繊りあり。小さな嵌が少量混じる。中程度の大きさの石灰岩礫が少量混じる。
- 4: オーブ褐色(2.5Y3/2)。繊りなし。粘性やや強い。裏込めの層。瓦溜まりあり。
- 5: オーブ褐色(2.5YR5/2)。繊りあり。小さなサンゴ礫が多量に混じる。整地層。
- 6: オーブ褐色(2.5YR4/3)。繊りあり。小さな石炭岩礫が少量混じる。中程度の大きさのクチャ粒が中量混じる。粘性は強い。
- 7: オーブ褐色(2.5Y4/3)。繊りあり。小さなサンゴ礫が少量混じる。中程度の大きさのクチャ粒が少量混じる。粘性やや強い。
- 8: オーブ褐色(2.5Y4/3)。繊りあり。固く締まる。道跡の舗装面。
- 9: オーブ褐色(2.5Y7/6)。繊りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が多量に混じる。粘性やや強い。官古式土器出土。
- 10: 明黄褐色(2.5Y5/4)。繊りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が多量に混じる。地盤補強に伴う敷石。
- 11: 黄褐色(2.5Y5/4)。繊りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が多量に混じる。地盤補強に伴う敷石。
- 12: 黄褐色。繊りあり。中程度の大きさの石灰岩礫が多量に混じる。地盤補強に伴う敷石。



写真 35 トレンチ3 北壁(南から)



写真 36 トレンチ3 北壁分割①(南から)



写真 37 トレンチ 3 北壁分割②(南から)



写真 38 トレンチ 3 北壁分割③(南から)



写真 39 トレンチ3 北壁分割④(南から)



写真 40 トレンチ3 南壁(北から)

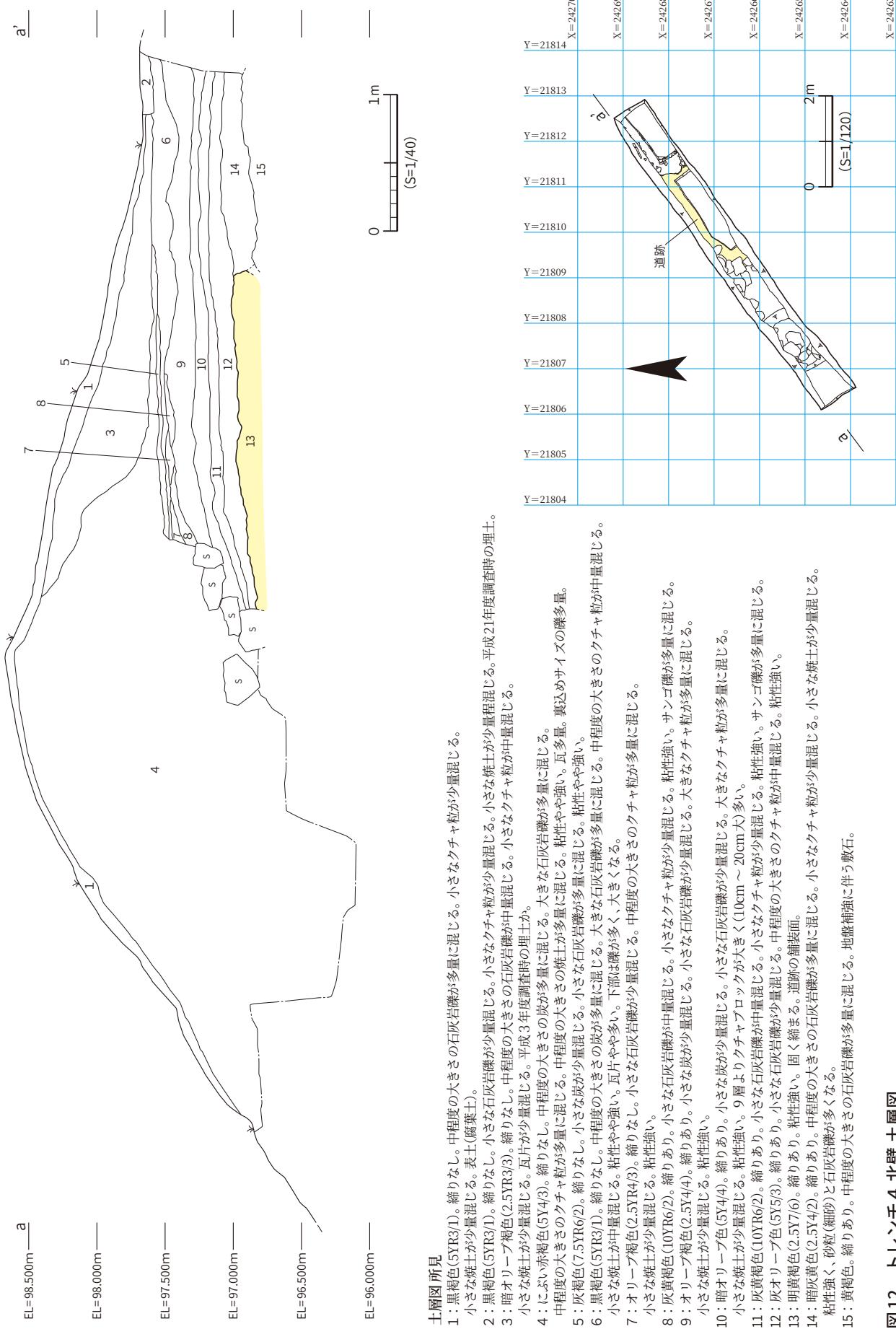


図12 トレンチ4 北壁 土層図



写真 41 トレンチ 4 北壁(南東から)



写真 42 トレンチ 4 北壁分割①(南東から)



写真 43 トレンチ 4 北壁分割②(南から)



写真 44 トレンチ 4 北壁分割③(南から)



写真 45 トレンチ 4 北壁分割④(南から)



写真 46 トレンチ 4 6層検出状況(上が北)



写真 47 トレンチ 4 11層 近世の整地層 検出状況(南西から)



写真 48 トレンチ 4 11・13層 近世の整地層・道跡 検出状況(上が北)

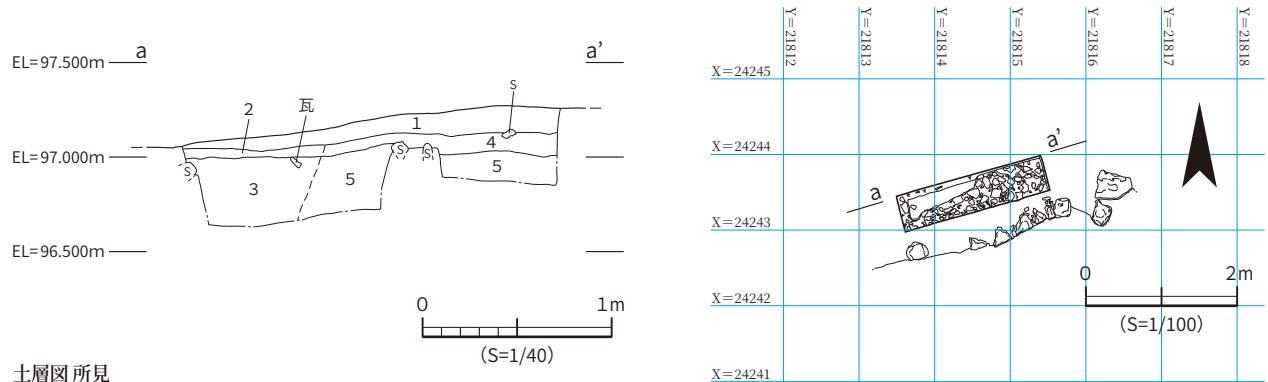


図13 トレンチ5 北壁 土層図



写真49 トレンチ5 北壁(南から)



写真50 トレンチ5 2・4層検出状況(南から)

## 第2節 遺構と遺物

### (1) トレンチ1

#### 1 道跡

3cm前後の石灰岩礫を、硬く突き固めて造った道である。トレンチ2・3・4でも検出されている。道の東端には縁石があり、龍潭の地形に沿って蛇行しながら南北に延びる。西端の縁石については、過去の調査においても検出されていないため、道幅については不明である。トレンチ1における残存道幅は、縁石を含めて約1.2mである。

路面については残りが良く、標高97.86mで、ほぼ平坦に仕上げられている。

#### 2 石列1

道跡の縁石に相当する石列である。石灰岩の切石を南北に並べ、東側に面を持つ。平成3年度テストピット6(平成21年度Nトレンチ)、平成23年度トレンチ1でも検出されており、同様な構造となっている。

#### 3 石敷き1

石列1の東側に接して、拳大の石灰岩を敷いた遺構である。平成3年度テストピット6においても検出されており、排水の用途が考えられる。

#### 4 溝1

側面を石灰岩の切り石で囲い、底面にも平らに加工した石灰岩を敷いている。溝の幅は約30cm、深さは約20~30cmであり、東から西に向かって低くなるように勾配が付けられている。溝の北側には、モルタルで仕上げられた平坦面がある。溝は東西に延びており、平成3年度テストピット6においても検出されていることから、戦前の師範学校の遺構と考えられる。

#### 5 集石1

道跡の直上に、拳大の石灰岩礫を約40cmの高さまで積み上げた遺構である。その上部は、モルタルで覆われており、平らに仕上げられている。礎石として機能していた可能があり、師範学校に伴う遺構と考えられる。同様の遺構は平成23年度の調査で2基検出されているが、上部のモルタルがないという違いがある。

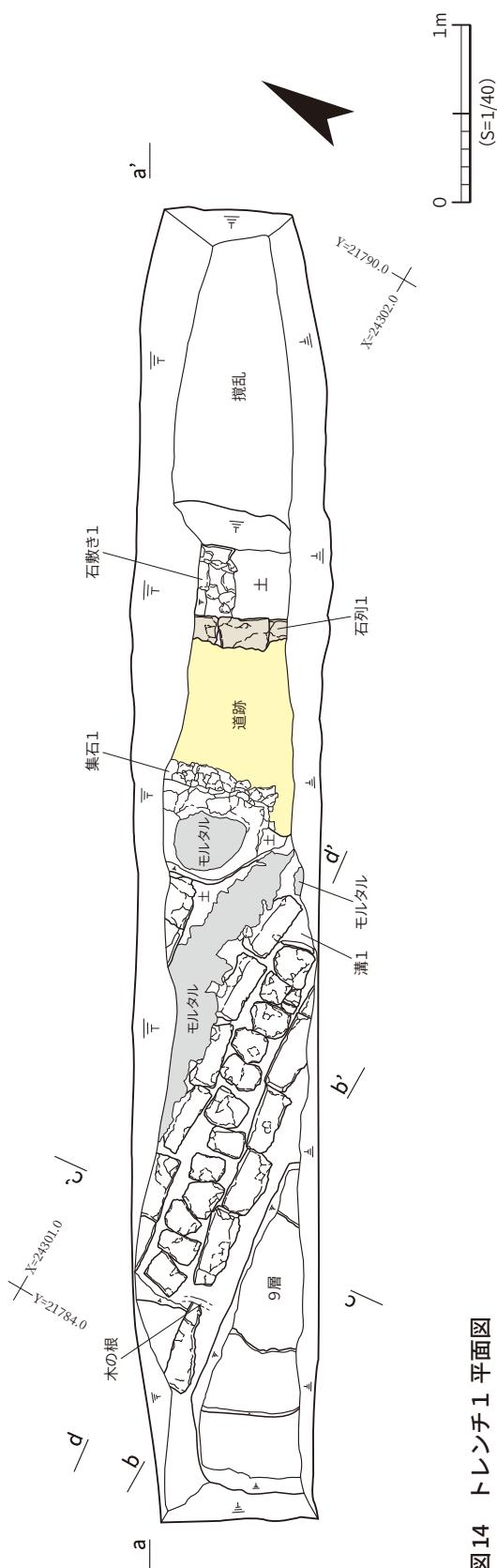


図14 トレンチ1 平面図

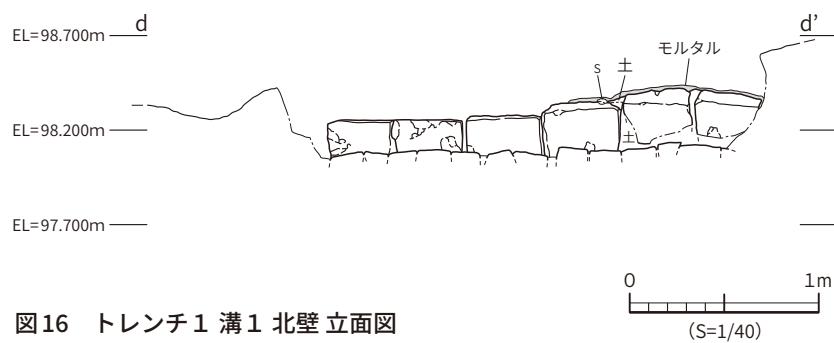
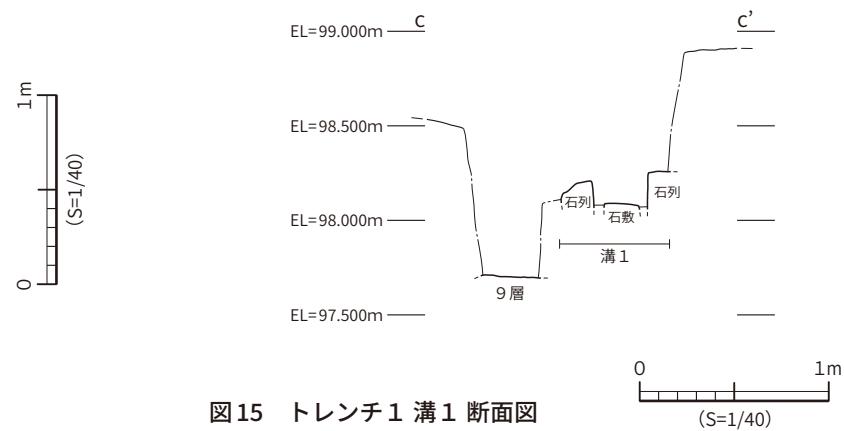
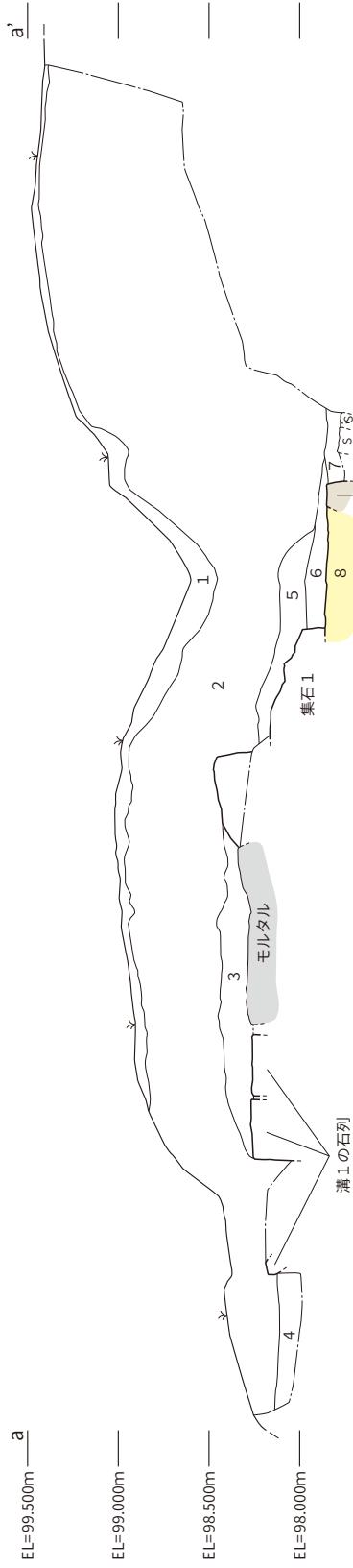


表3 トレンチ1 遺物出土状況

遺物の種類	出土地	重量 (g)					
		2・3層	4層	合計			
	集計分	未集計分	合計				
陶 磁 器 (7点)	タイ産褐釉陶器	1		1	14.9	0.0	14.9
	本土産陶器	1		1	16.5	0.0	16.5
	本土産磁器	1		1	4.4	0.0	4.4
	沖縄産施釉陶器	1	1	2	7.5	0.0	7.5
	沖縄産無釉陶器	1		1	23.2	0.0	23.2
	陶質土器	1		1	21.2	0.0	21.2
建築部材 (1点)	明朝系瓦	1		1	604.3	0.0	604.3
その他の 人工遺物 (2点)	貝製品	2		2	5.2	0.0	5.2
合計		9	1	10	697.2	0.0	697.2



写真 51 トレンチ 1 設定状況（南東から）



写真 52 トレンチ 1 道跡検出作業状況（南から）



写真 53 トレンチ1 道跡、石列1、石敷き1（南から）



写真 54 トレンチ1 道跡、石列1、石敷き1（東から）



写真 55 トレンチ1 溝1（上が南）



写真 56 トレンチ1 集石1（東から）



写真 57 トレンチ1 全景(西から)



写真 58 トレンチ 1 全景（東から）

## (2) トレンチ2

## 1 道跡

3 cm 前後の石灰岩礫を、硬く突き固めて造った道である。トレンチ1・3・4でも検出されている。東西の縁石については残っていないが、残存道幅は約3.8 mであり、これまでの調査で最も道幅の残りが良い場所となっている。路面については残りは悪く、段差や凹凸が目立つ。

道跡の一部を試料として採取し、試料中に含まれる石灰岩について顕微鏡観察による分析を行った結果、牧港石灰岩である可能性が指摘された。

## 2 井戸跡1

トレンチ2の南壁に接して、井戸枠と掘方の一部を検出した。井戸枠はコンクリート製で、厚さは約4 cm、推定直径は60 cmである。掘方は、道跡を破壊して掘られており、推定直径は1.7 m程度となる。井戸枠の下に積まれていたであろう石積みは検出できていない。

井戸が掘られた時期については、道跡よりは新しいことから近世頃としておく。また、井戸枠がコンクリート製であり、井戸枠内に鉄筋のようなものが廃棄されている状況が確認できたことから、少なくとも戦前までは使われていたと考えられる。

## 3 石列2

高さ約30 cm にそろえた石灰岩の切り石を、南北方向に並べ、上面と底部東側にモルタルを塗った遺構である。戦前の師範学校に関する建物の基礎部分と考えられる。

石列2はトレンチ外にも延びており、南側は平成3年度テストピット5で検出されたコンクリート遺構に接続する可能性がある。北側は、平成3年度テストピット6まで伸びており、そこから北東に進路を変えてさらに伸びている。

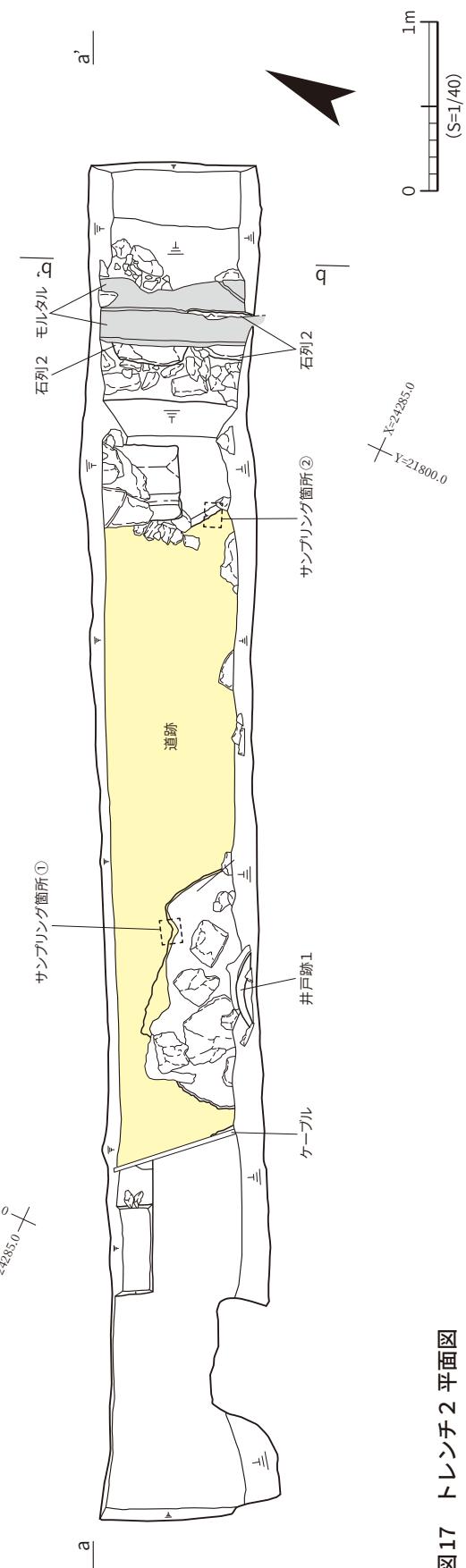


図17 トレンチ2 平面図

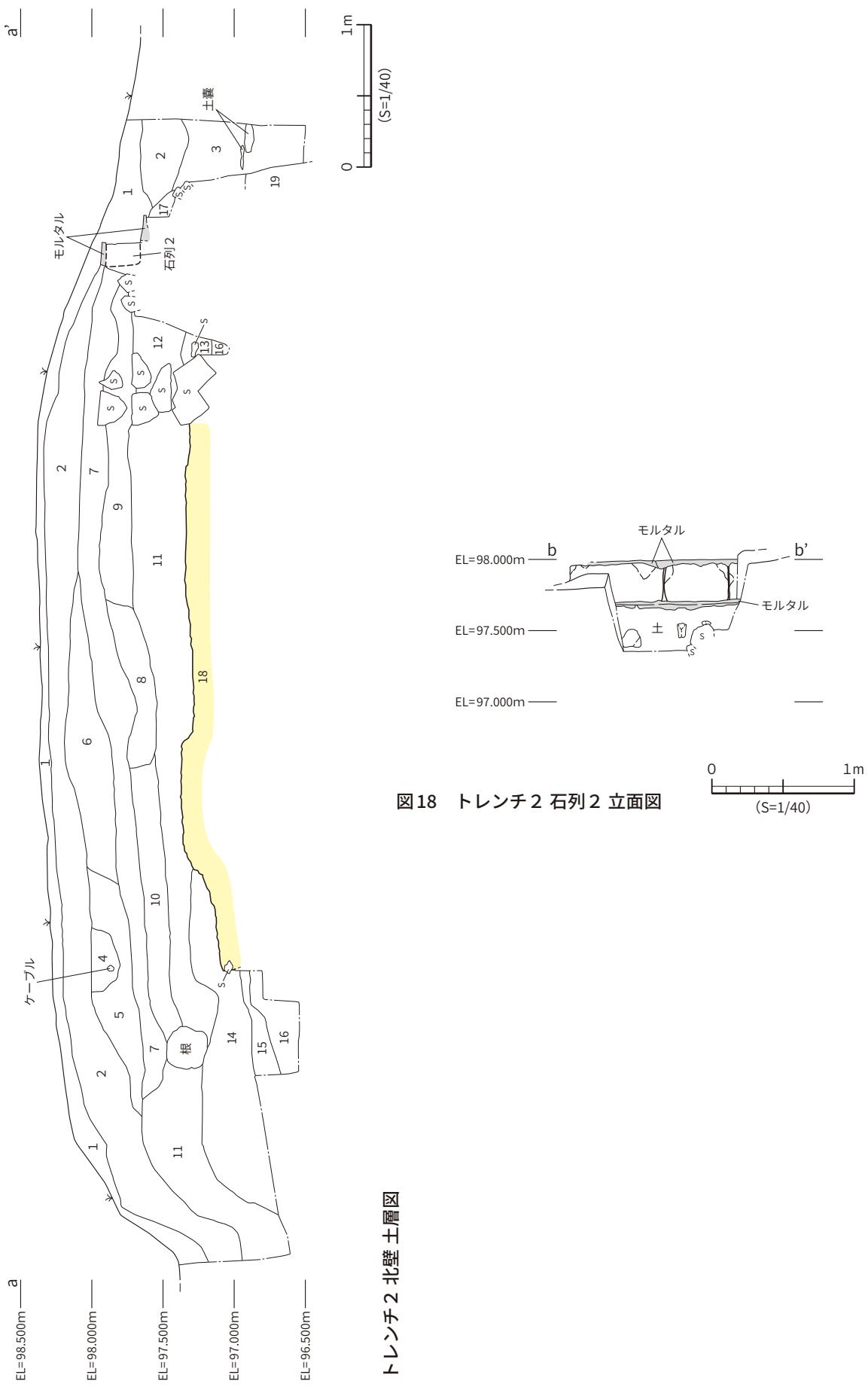


図18 トレンチ2 石列2 立面図

トレンチ2 北壁 土層図



写真 59 トレンチ 2 設定状況(東から)



写真 60 トレンチ 2 作業状況(東から)



写真 61 トレンチ2 道跡①(西から)



写真 62 トレンチ 2 道跡②(西から)



写真 63 トレンチ 2 道跡分割①(上が南)



写真 64 トレンチ 2 道跡分割②(上が南)



写真 65 トレンチ 2 道跡(東から)



写真 66 トレンチ 2 石列 2（東から）



写真 67 トレンチ 2 石列 2（南から）



写真 68 トレンチ 2 石列 2 西側（南から）



写真 69 トレンチ 2 井戸跡 1（北から）



写真 70 トレンチ2 7層検出状況(北東から)

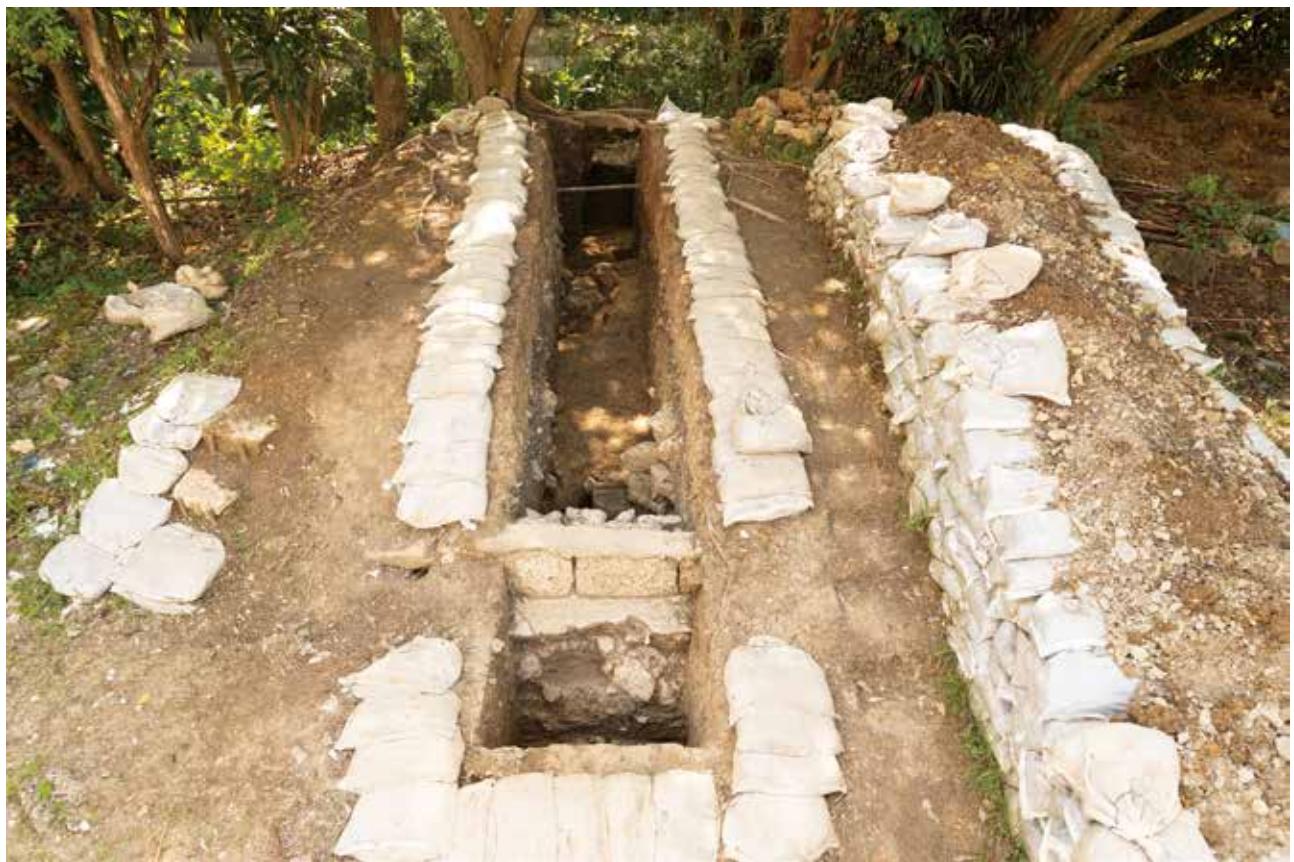


写真 71 トレンチ2 全景(東から)

表4 トレンチ2出土遺物観察表

挿図番号 写真番号	番号	種類	器種	材質/ 分類	部位	法量(単位:cm)( )は復元値			観察事項	出土位置
						口径/ 厚さ	器高/ 長軸	高台径/ 短軸		
図19 写真72	1	本土産 近代磁器	碗	—	口縁部	(10.8)	—	—	内外面共に飴釉を施釉。外面に草花文。	トレンチ2 7層上
図19 写真72	2	本土産 近代磁器	小碗	—	口縁部	(7.8)	—	—	透明釉を全面に施釉。外面に「君」「務」「本」などの文字。	トレンチ2 7層上
図19 写真72	3	本土産 近代磁器	小碗	クロム 磁器	口～ 底部	(8.0)	3.8	(3.6)	クロム青磁。クロム釉を全面に施釉。畠付～高台内は露胎。外面にくずれた鎬連弁文。	トレンチ2 8・9・10層
図19 写真72	4	本土産 近代磁器	皿	—	口縁部	(12.6)	—	—	内面に型紙摺りの文様。透明釉を全面に施釉。	トレンチ2 7層上
図19 写真72	5	本土産 近代磁器	皿	—	口～ 底部	(13.4)	3.3～ 3.35	(9.4)	内面に型紙摺りの文様。透明釉を全面に施釉。内底に3つの目跡あり。外底蛇の目凹形高台で、蛇の目状に釉剥ぎ。	トレンチ2 11層
図19 写真72	6	本土産 近代磁器	合子	—	蓋	厚さ 0.35	1.4	—	内面に透明釉を施釉。外面全体に草花文と透明釉を施釉。口縁部は露胎。	トレンチ2 11層
図19 写真72	7	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～ 底部	(13.6)	6.3	(7.0)	全面に白化粧と透明釉を施釉。内底蛇の目釉剥ぎ。素地はにぶい橙色。畠付に白土塗布。外面に菊花文。	トレンチ2 8・9・10層
図19 写真72	8	明朝系瓦	丸瓦	灰色	玉縁部	厚さ 1.4	—	—	凸面はナデ調整。凹面に布目痕。凸面には横方向に漆喰が付着。玉縁部に記号あり。	トレンチ2 2・5・6層
図20 写真72	9	明朝系瓦	平瓦	赤色	広～ 狭端部	厚さ 1.7	全長 24.5	—	凸面はナデ調整。凹面に布目痕。凸面の両端に少量の漆喰が付着。	トレンチ2 11層
図20 写真72	10	近代 明朝系瓦	軒丸瓦	赤色	瓦当	瓦当厚 1.9	—	—	瓦頭部は無文。瓦頭部、凸面はナデ調整。凹面に布目痕。凸面に漆喰が付着。	トレンチ2 7層上
図20 写真73	11	近代 明朝系瓦	軒丸瓦	赤色	瓦当	瓦当厚 2.2	—	—	瓦頭部は無文。瓦頭部と瓦頭部裏面はナデ調整。	トレンチ2 11層
図20 写真73	12	青銅製品	金具	—	把手	厚さ0.8 厚さ0.3	長軸 10.95	短軸 6.15	青銅製の把手。菊座金具を伴う。割ピンは先端のみ若干開く。	トレンチ2 7層上



図19 トレンチ2 出土遺物(1)

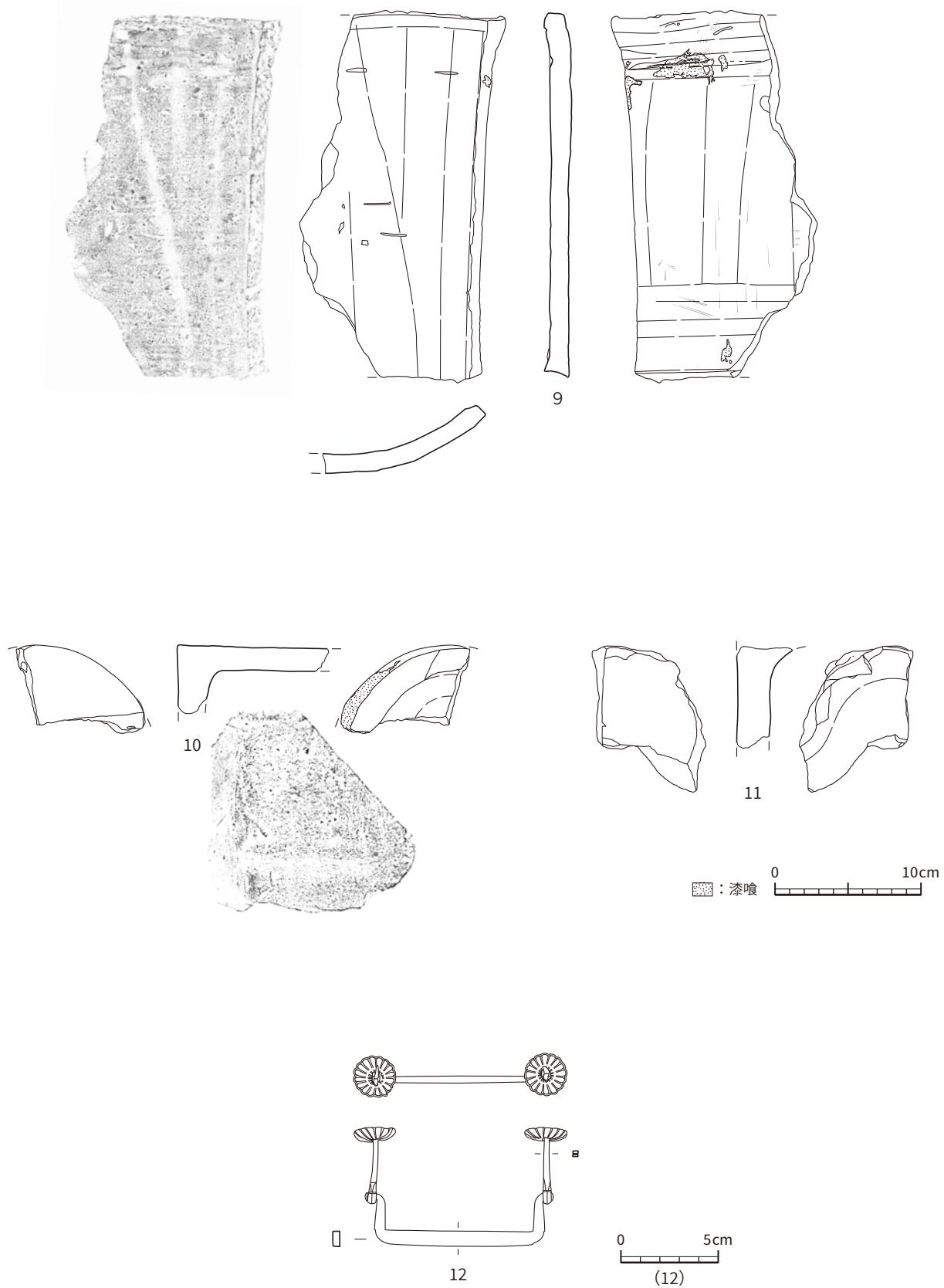


図20 トレンチ2 出土遺物(2)

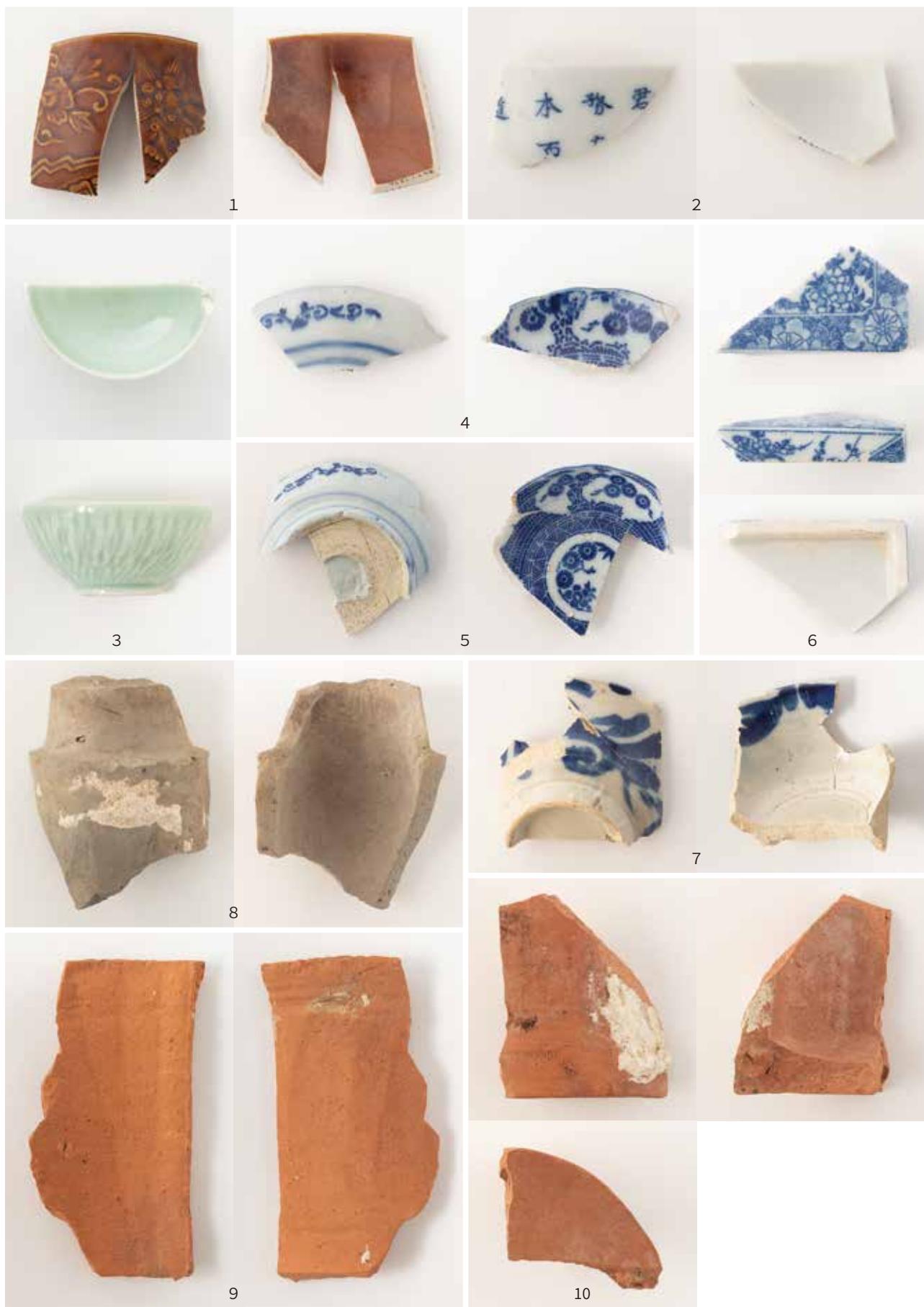


写真 72 トレンチ 2 出土遺物(1)

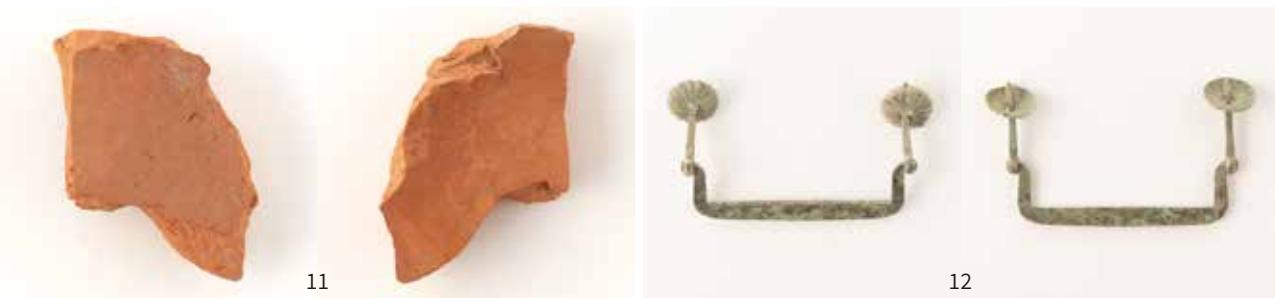


写真 73 トレンチ 2 出土遺物(2)

表5 トレンチ 2 遺物出土状況

遺物の種類	出土地											合計	重量(g)			
		2層	3層	1・2・5層	2・5・6層	7層上	7層下	7層下 + 11層	8・9・10層	11層	13層	15層	集計分	未集計分	合計	
陶磁器 (123点)	中国産 (8点)	青磁				1		*		2			3	32.2	1.1	33.3
		青花		1					1	1			3	7.3	0.0	7.3
		褐釉陶器								1		1	2	7.7	0.0	7.7
	タイ産 (1点)	褐釉陶器					1						1	9.8	0.0	9.8
	本土産 (63点)	磁器				1	1						2	27.6	0.0	27.6
		近代磁器					7	3		2	16	2	30	567.0	0.0	567.0
		現代磁器	1	1			29						31	1,628.4	0.0	1,628.4
	沖縄産 (37点)	施釉陶器				1		3		3	10		17	347.5	0.0	347.5
		初期無釉陶器				1		1		3			5	66.8	0.0	66.8
		無釉陶器	1	2	3		3	1		5			15	1,416.4	0.0	1,416.4
	陶質土器 (14点)			1			3		1	9			14	455.4	0.0	455.4
建築部材 (12点)	陶管 (1点)									1			1	42.4	0.0	42.4
	明朝系瓦 (8点)	1			2		3			2			8	2,306.9	0.0	2,306.9
	近代明朝系瓦 (2点)					1				1			2	477.9	0.0	477.9
	近代大和系瓦 (1点)						1						1	43.5	0.0	43.5
その他の人口遺物 (16点)	金属製品 (3点)					2					1		3	85.5	0.0	85.5
	石製品 (2点)									1		1	2	77.2	0.0	77.2
	ガラス製品 (3点)					3							3	488.9	0.0	488.9
	貝製品 (2点)	1	1										2	191.8	0.0	191.8
	骨製品 (3点)									3			3	14.8	0.0	14.8
	プラスチック製品 (2点)			1		1							2	7.5	0.0	7.5
	現代遺物 (1点)						1						1	10.4	0.0	10.4
自然遺物 (10点)	脊椎動物 遺体 (9点)	魚骨不明					1						1	0.1	0.0	0.1
		イヌ					1	2					3	24.7	0.0	24.7
		ウシ／ウマ					1						1	4.4	0.0	4.4
		イノシシ／ブタ					2	1					3	43.9	0.0	43.9
		種不明					1						1	5.9	0.0	5.9
	貝類 (1点)	巻貝	1										1	95.6	0.0	95.6
合計		3	4	5	9	50	22	1	7	55	3	2	161	8,487.5	1.1	8,488.6

＊…細片のため未集計。重量のみ軽量。

### (3) レンチ3

#### 1 道跡

3 cm前後の石灰岩礫を、硬く突き固めて造った道である。レンチ1・2・4でも検出されている。東西の縁石については残っておらず、残存道幅は約3.4 mである。路面の残りはあまり良くなく、凹凸が目立つ。

道跡の下部構造と考えられる土層に、北壁土層図の11層と12層がある。11層は、黄褐色を呈しており、粘性はやや強く砂質の層である。石灰岩礫を多く含んでおり、宮古式土器が3点出土している。

12層は、10~20cm程度の石灰岩礫を密に敷き詰めた層である。レンチ4や、平成21年度Nレンチでも確認されており、地盤補強を目的とした層と考えられる。

#### 2 石積み1

西側に面を持ち、南北に延びる石積みで、1段目だけが残っている。石灰岩礫を裏込めとしている。

石積み1は、過去の調査においても断片的に検出されており、3段以上積まれた石積みが、国学・首里聖廟石垣とほぼ平行に伸びていることがわかる。南側は、レンチ3から約6m南まで伸びていることが確認できる。北側は、平成3年度テストピット6まで続いており、そこから北東に向を変えながら伸び、平成30年度レンチ3で検出した石牆に繋がると考えられる。

#### 3 近代の整地層と造成層

北壁土層図の5層は、近代の整地層と考えられる。上面は標高97.64mでほぼ水平に堆積しており、厚さは約10cmである。サンゴ礫を大量に含み、西側については、6層とともに削平されているように見える。中国産青花や本土産磁器、沖縄産施釉陶器などが出土している。

6・7層は、5層直下に堆積しており、近代の造成層と考えられる。厚さは最大24cmで、オリーブ褐色の粘質土からなり、クチャや石灰岩礫が混じっている。

#### 4 近世の整地層と造成層

北壁土層図の8層は近世の整地層と考えられる。厚さは最大で約20cmあり、上面の標高は97.28m~98.37mとややばらつきがみられる。遺物は出土していない。

9層は、8層直下に堆積しており、近世の造成層と考えられる。オリーブ褐色の土に、やや大きめのクチャ礫が混じる層である。宮古式土器などが出土している。

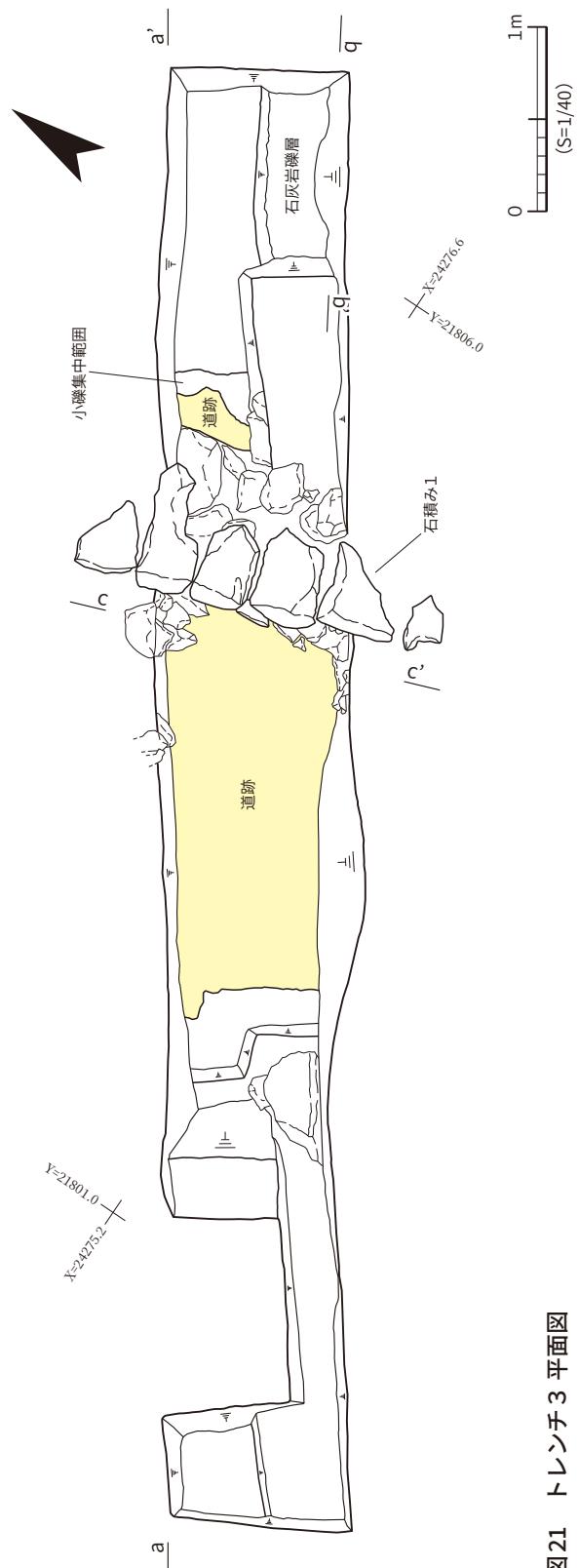
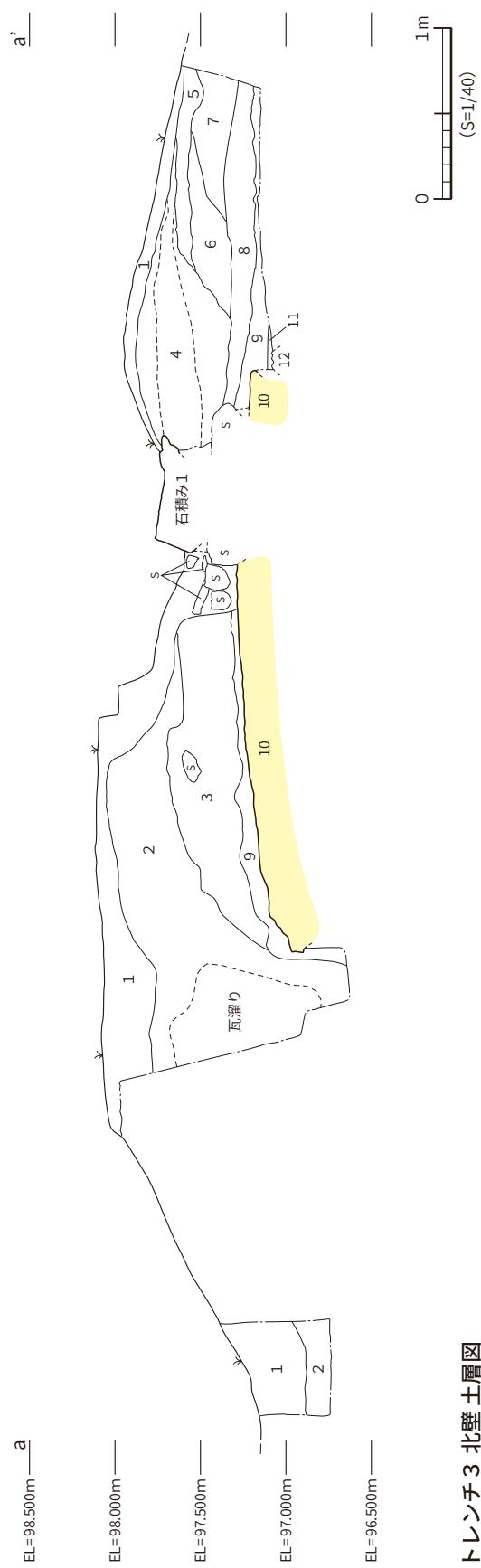


図21 レンチ3 平面図



トレンチ3 北壁土層図

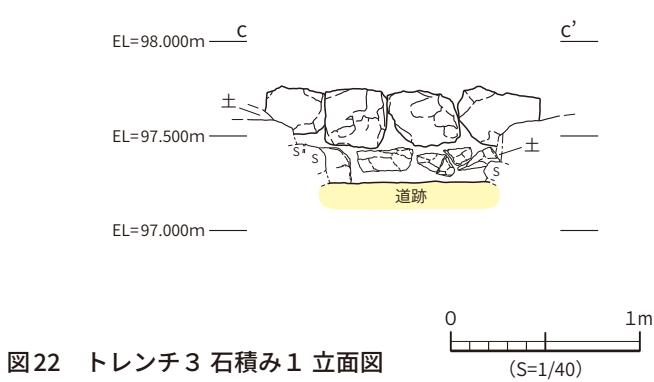


図22 トレンチ3 石積み1 立面図



写真 74 トレンチ 3 設定状況(東から)



写真 75 トレンチ 3 作業状況(北東から)



写真 76 トレンチ3 道跡①(西から)



写真 77 トレンチ3 道跡②(西から)



写真 78 トレンチ 3 道跡西端（南西から）



写真 79 トレンチ 3 道跡西端（西から）



写真 80 トレンチ3 道跡東端(東から)



写真 81 トレンチ3 石積み1と道跡(西から)



写真 82 トレンチ3 5層 近代の整地層(東から)



写真 83 トレンチ3 5層 近代の整地層(西から)



写真 84 トレンチ3 8層 近世の整地層（南から）



写真 85 トレンチ3 9層 近世の造成土（南から）



写真 86 トレンチ 3 南壁の土層堆積状況（北東から）



写真 87 トレンチ 3 全景（東から）



写真 88 トレンチ 3 全景(西から)

表6 トレンチ3出土遺物観察表

挿図番号 写真番号	番号	種類	器種	材質/ 分類	部位	法量(単位:cm)( )は復元値			観察事項	出土位置
						口径/ 厚さ	器高/ 長軸	高台径/ 短軸		
図 23 写真 89	13	沖縄産 施釉陶器	鉢	—	口縁部	—	—	—	鍔縁口縁。内面～外面口唇部にかけて白化粧。内面は透明釉、外面は黒釉。内外面共に細かい貫入あり。素地はにぶい橙色と灰白色。	トレンチ 3 5層
図 23 写真 89	14	土器	不明	—	胴部	—	—	—	内面は橙色、外面はにぶい橙色。胎土に石灰質砂粒、赤色粒を含む。内面は混入物である微砂粒が剥落しポーラスな器面を呈する。宮古式。	トレンチ 3 9層
図 23 写真 89	15	明朝系瓦	丸瓦	赤色	玉縁部	厚さ 1.65	—	—	凸面は横方向のナデ調整。凹面に布目痕。凸面に縦方向に漆喰付着。	トレンチ 3 4層
図 23 写真 89	16	石製品	硯	—	—	厚さ 1.6	長軸 13.85	短軸 7.75	黒色粘板岩製。側面に「師〇照〇〇夫」、底部に「村税」の文字あり。	トレンチ 3 1・2層
図 23 写真 89	17	石製品	硯	—	—	厚さ 1.5	長軸 なし	短軸 6.3	砂岩製。	トレンチ 3 1・2層
図 23 写真 89	18	ガラス製品	瓶	茶色系 殺虫剤瓶	口～ 底部	2.6	22.9	底径 6.2	フマキラーの害虫殺滅液の瓶。底部に「20」の文字あり。	トレンチ 3 1・2層
図 23 写真 89	19	ガラス製品	瓶	無色系 インク瓶	口～ 底部	2.55	6.45	長軸 5.3 短軸 4.4	背面に「60 cc PILOT MADE IN JAPN」、底部に「27」の文字あり。	トレンチ 3 1・2層



図 23 トレンチ3 出土遺物



写真 89 トレンチ 3 出土遺物

表7 トレンチ3 遺物出土状況

遺物の種類			出土地	1・2層	3層	4層	5層	6・7層	9層	11層	合計	重量(g)		
												集計分	未集計分	合計
陶磁器 (54点)	中国産 (5点)	青磁	1								1	5.6	0.0	5.6
		青花	2			2					4	7.9	0.5	8.4
	本土産 (11点)	陶器	1								1	9.5	0.0	9.5
		磁器	1	1		1					3	18.7	1.0	19.7
		近代磁器	4	1							5	144.6	0.0	144.6
		現代磁器	1	1							2	479.2	0.0	479.2
	沖縄産 (32点)	施釉陶器	13	1		3					17	196.3	0.0	196.3
		初期無釉陶器	3			4	1				8	188.7	1.4	190.1
		無釉陶器	6			1					7	321.2	0.0	321.2
	土器(1点)								1	*	1	12.0	4.9	16.9
	宮古式土器(5点)								2	3	5	13.1	0.0	13.1
建築部材 (7点)	陶管(1点)		1								1	11.8	0.0	11.8
	明朝系瓦(4点)			2	2						4	882.5	0.0	882.5
	近代明朝系瓦(1点)		1								1	263.6	0.0	263.6
	近代大和系瓦(1点)		1								1	276.4	0.0	276.4
人そ 口の 遺他 物の (8点)	金属製品(1点)		1								1	189.1	0.0	189.1
	石製品(2点)		2								2	574.6	0.0	574.6
	ガラス製品(3点)		3								3	549.8	0.0	549.8
	現代遺物(1点)		1								1	3.1	0.0	3.1
	不明(1点)					1					1	4.4	0.0	4.4
遺自然 (2点)	脊椎動物遺体 (1点)	ウシ		1							1	62.0	0.0	62.0
	貝類(1点)	巻貝				1					1	1.7	0.0	1.7
合計			42	7	2	13	1	3	3	71	4,215.8	7.8	4,223.6	

＊…細片のため未集計。重量のみ計量。

#### (4) トレンチ4

##### 1 道跡

3cm前後の石灰岩礫を、硬く突き固めて造った道である。トレンチ1～3でも検出されている。東西の縁石については残っておらず、残存道幅は約2.7mである。路面の残りはあまり良くなく、凹凸がある。

道跡の下部構造と考えられる土層に、北壁土層図の15層がある。15層は、10～20cm程度の石灰岩礫を密に敷き詰めた層である。トレンチ3や、平成21年度Nトレンチでも確認されており、地盤補強を目的とした層と考えられる。

##### 2 近代の整地層と造成層

北壁土層図の8層は、近代の整地層と考えられる。層上面の標高は、97.3～97.5mとばらつきがあり、西側にやや傾斜している。層の厚さは、最大で9cmあり、サンゴ礫を大量に含んでいる。

9層は、8層直下に堆積しており、近代の造成層と考えられる。厚さは最大24cmで、オリーブ褐色の粘質土からなり、クチャや石灰岩礫が混じっている。

10層についても、9層と同様に近代の造成層と考えられる。厚さは最大12cmで、9層よりも大きめのクチャが混入している。トレンチ東側についてはほぼ平坦に堆積しているが、中央付近から西側にかけては、やや傾斜している。これは直下の11層が同様に傾斜しているためと考えられる。9・10層からは、沖縄産無釉陶器や明朝系瓦などが出土している。

8～10層より上位にも、整地層や造成層と考えられる層がある。5層は、厚さが最大で5cm、層上面が標高97.52～97.57mでほぼ平坦に堆積している。灰褐色の粘質土で、2cm以下の石灰岩礫を多く含む。6層は、5層の直下に堆積している層で、黒褐色を呈し、炭や石灰岩礫、クチャなどを含む。特に層下部には10cm前後の石灰岩礫が多く含まれている。また6層からは、沖縄産施釉陶器や陶質土器、明朝系瓦、ヤコウガイ製品など多くの遺物が出土している。

ヤコウガイ製品は、主に体層の多くが切り取られたものを指すが、これは螺鈿細工などの原料を切り取った後の残滓である。松崎馬場跡の約100m東には、かつて貝摺奉行所が存在したとされていることから、工芸品の材料としてヤコウガイを加工し、その残滓が松崎馬場跡へ紛れ込んだと考えられる。

##### 3 近世の整地層と造成層

トレンチ4北壁の11層は(図25下)、近世の整地層と考えられる。上面の標高については、トレンチ東側は97.16m～97.26mの範囲で平坦に堆積しているが、中央付近から西側にかけては、やや傾斜している。この傾斜については、整地面に降った雨水を龍潭側に自然排水するために意図的に造った可能性がある。

12層は、11層直下に堆積しており、近世の造成層と考えられる。灰黄褐色の粘質土に、クチャが混じる層である。12層からは、明朝系瓦と円盤状製品(中国産褐釉陶器を転用)が出土している。

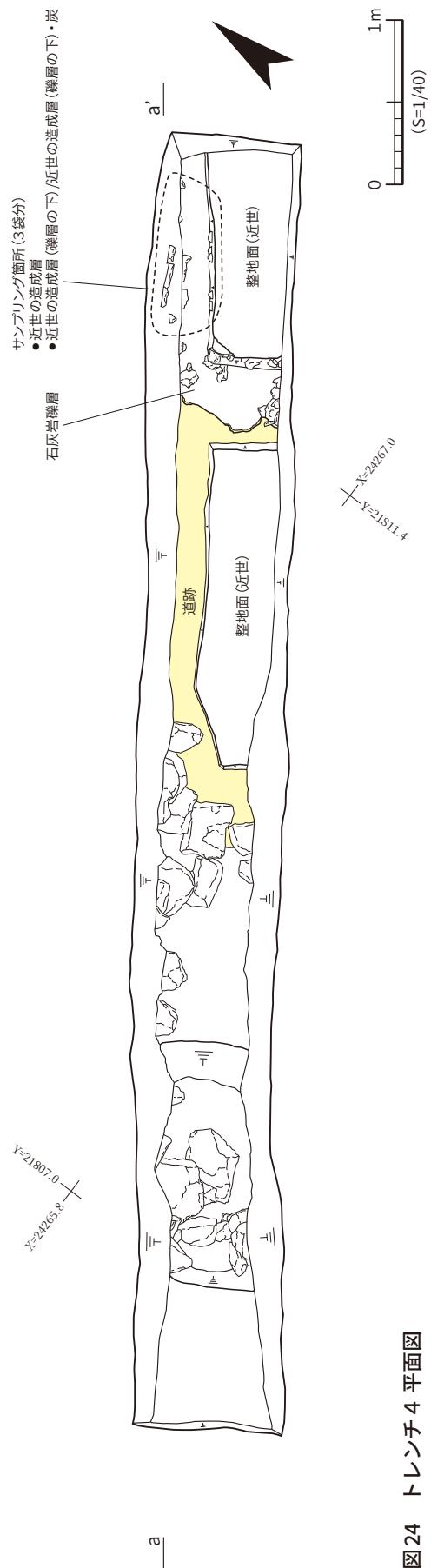


図24 トレンチ4 平面図



写真 90 トレンチ 4 設定状況(東から)



写真 91 トレンチ 4 設定状況(北東から)



写真 92 トレンチ 4 作業状況(北東から)



写真 93 トレンチ 4 道跡東端①(東から)



写真 94 トレンチ 4 道跡東端②(東から)



写真 95 トレンチ 4 道跡東端(上が南)



写真 96 トレンチ 4 6 層検出状況(東から)



写真 97 トレンチ 4 8 層 近代の整地層(東から)



写真 98 トレンチ 4 11 層 近世の整地層(北西から)



写真 99 トレンチ 4 11 層 近世の整地層（北東から）



写真 100 トレンチ 4 全景(東から)

表8 トレンチ4出土遺物観察表

挿図番号 写真番号	番号	種類	器種	材質 / 分類	部位	法量(単位:cm)( )は復元値			観察事項	出土位置
						口径 / 厚さ	器高 / 長軸	高台径 / 短軸		
図25 写真101	20	沖縄産 施釉陶器	碗	—	底部	—	—	(7.65)	灰釉碗。内面胴部～外面胴部にかけて灰釉を薄く施釉。外面上半と内底は露胎。内外面共にロクロ痕が明瞭。内底に重ね焼きの跡。素地は浅黄橙色。	トレンチ4 6層下
図25 写真101	21	沖縄産 施釉陶器	皿	—	口～ 底部	(13.8)	4.5～ 4.2	6.9	内面全面に白化粧と透明釉を施釉。内面白口唇部～外面口唇部に黄色味を帯びた黒釉。外面は黒褐色釉。内底蛇の目釉剥ぎ。疊付に白土塗布。高台内は露胎。素地はぶい橙色。	トレンチ4 4層、6層上 、6層下
図25 写真101	22	沖縄産 施釉陶器	火炉	—	底部	—	—	最大径 (10.6)	外面は全面に褐色釉を施釉。内面は露胎。底部は疊付～高台内は露胎。内面と高台内にロクロ痕が残る。高台に逆「V」字状の抉りあり。素地は淡灰色。	トレンチ4 6層上
図25 写真101	23	陶質土器	火炉	—	底部	—	—	(9.0)	ロクロ成形。内面一部にロクロ痕残る。素地は橙褐色で褐色粒を僅かに含む。高台に1条の圈線。	トレンチ4 6層上、6層下
図25 写真101	24	陶質土器	蓋	—	撮み	撮み径 (7.6)	—	—	ロクロ成形。内外面共に丁寧なナデ。素地は橙褐色。掘みは貼付で断面は台形。掘み部分に2条の圈線。	トレンチ4 6層上
図25 写真101	25	陶管	—	—	狭端部	最大厚 1.85	—	最大径 (26.2)	褐色釉を内外面に施釉。内面には同心円形のあて具痕と、櫛状工具による横位の調整痕。素地に白色粒、黒色粒、石英を含む。	トレンチ4 1・3層
図25 写真101	26	陶管	—	—	狭端部	最大厚 2.3	—	最大径 (24.4)	褐色釉を内外面に施釉。接地面の大部分は露胎。内面は櫛状工具による横位の調整痕。外面結合部に6条の圈線。素地に白色粒、黒色粒を含む。	トレンチ4 1・3層
図25 写真101	27	陶管	—	—	筒部	最大厚 1.25	—	最大径 (22.8)	褐色釉を内外面に施釉。内外面共に櫛状工具による横位の調整痕。内面に約5cm間隔で輪積み痕が見られる。素地に白色粒を含む。	トレンチ4 1・3層
図26 写真102	28	明朝系瓦	平瓦	褐色	狭端部	厚さ 1.65	—	—	凸面は横方向のナデ調整。	トレンチ4 14層
図26 写真102	29	埴	—	褐色	—	厚さ 4.25	—	—	平面敷。両面とも凹凸が目立つ。形状は不明。	トレンチ4 1・3層
図26 写真102	30	埴	—	灰色	—	厚さ 3.2	—	—	平面敷。上面に僅かに漆喰が付着。下面は広範囲に漆喰が付着。周縁を打ち欠き、円形を呈す。	トレンチ4 6層下
図26 写真102	31	円盤状製品	—	中国産 褐釉陶器	—	厚さ 0.75	長軸 2.8	短軸 2.75	内外両面から剥離加工。方形に近い円形を呈す。	トレンチ4 12層
図26 写真102	32	円盤状製品	—	沖縄産 無釉陶器	—	厚さ 1.1	長軸 4.6	短軸 4.5	内面から剥離加工。円形を呈す。内面にロクロ痕が残る。	トレンチ4 1・3層
図26 写真102	33	鉄製品	角釘	—	—	—	長軸 11.05	短軸 1.0～1.1	頭部一方に折れる角釘。軸部から先端にかけて先細る。 材質は鉄。	トレンチ4 1・3層
図26 写真102	34	錢貨	寛永通寶	—	—	厚さ 0.12	外径 2.34	孔径 0.57	新寛永(III期)。重量2.6g。	トレンチ4 6層下
写真102	35	貝製品	—	ヤコウガイ	—	—	—	—	体層を大きく欠損し、螺塔及び螺唇、臍盤を残す。	トレンチ4 6層上
写真102	36	貝製品	—	ヤコウガイ	—	—	—	—	体層奥部から殻口部まで欠損する。	トレンチ4 6層下

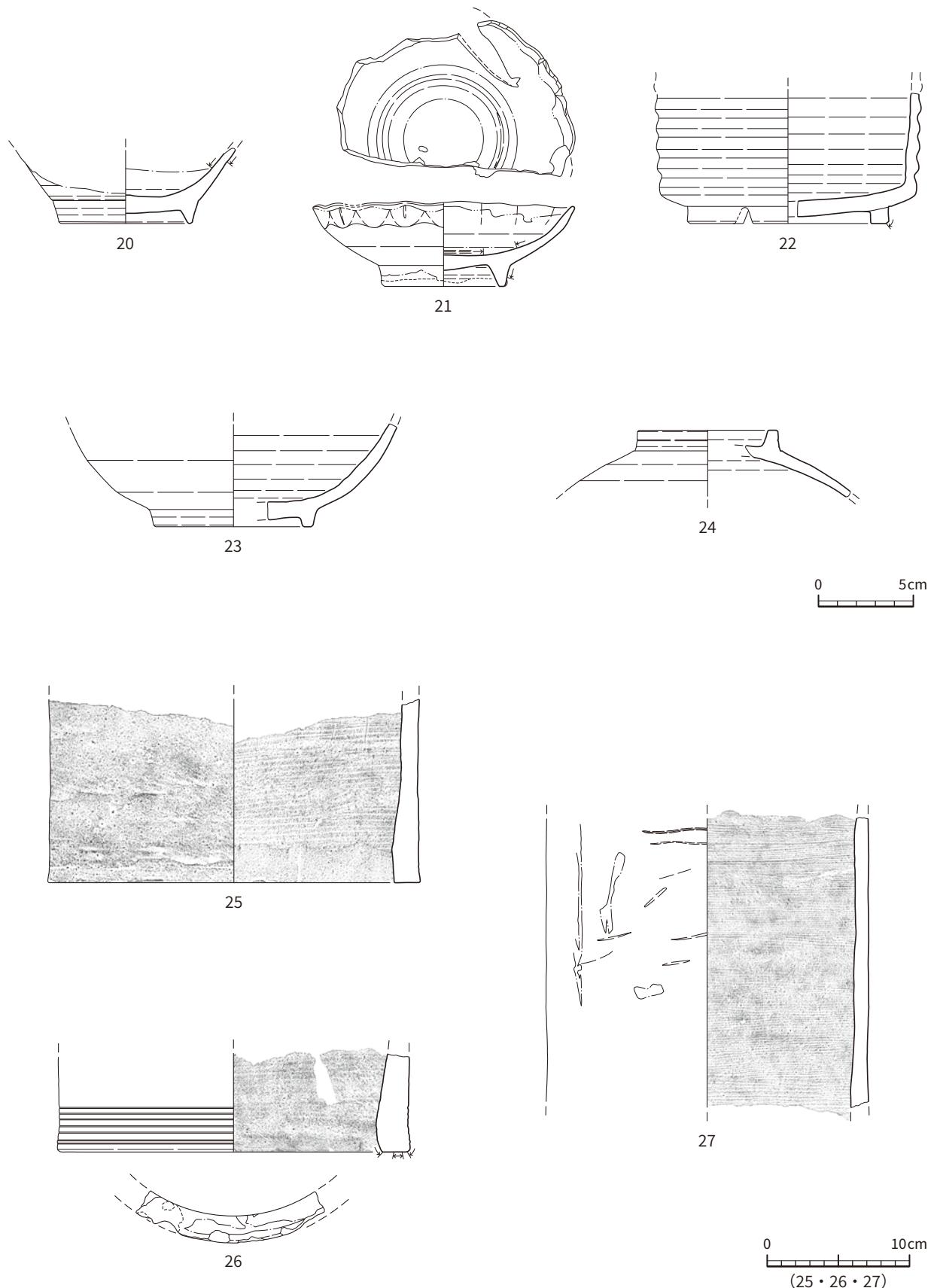


図25 トレンチ4 出土遺物(1)

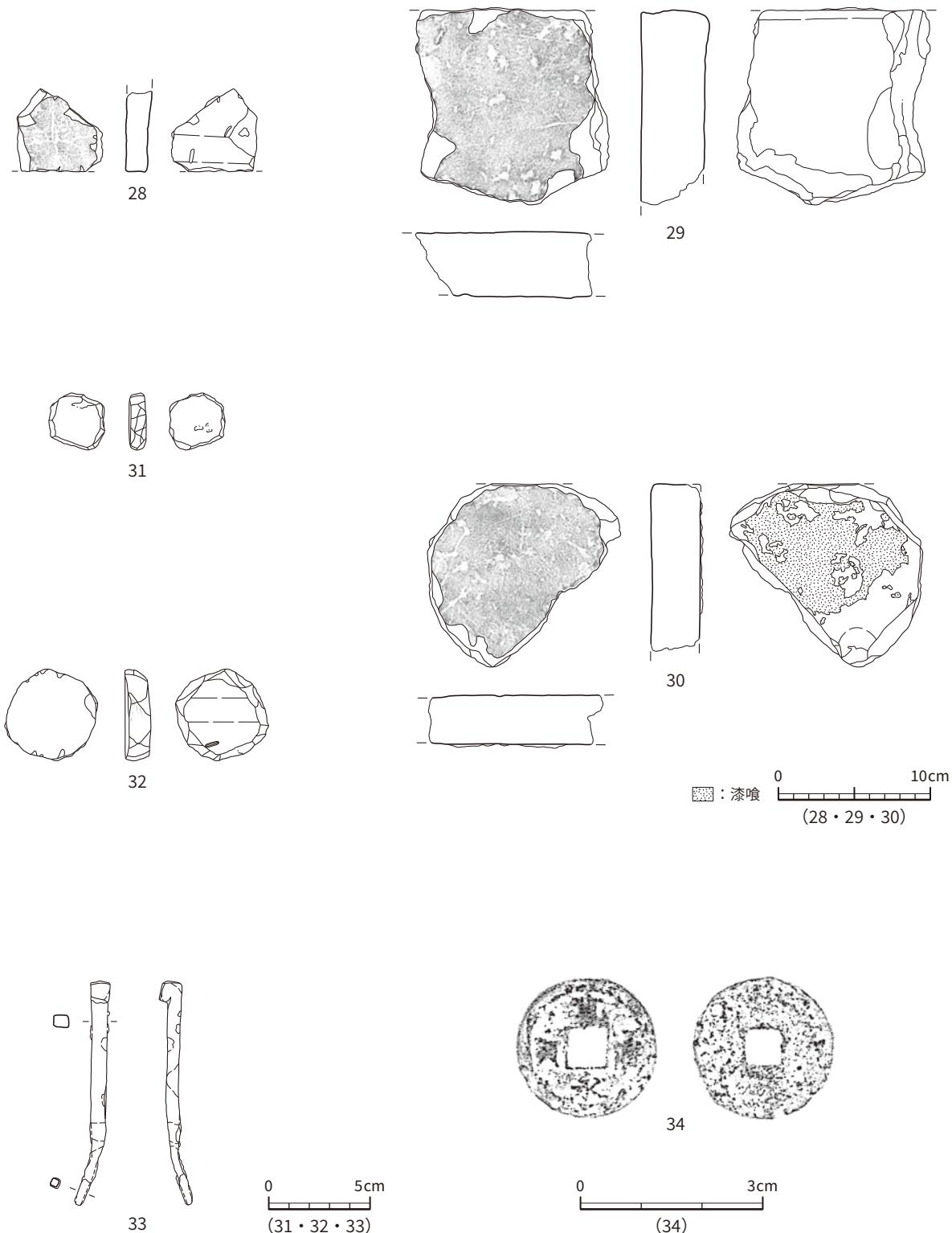


図 26 トレンチ 4 出土遺物(2)



写真 101 トレンチ4 出土遺物(1)

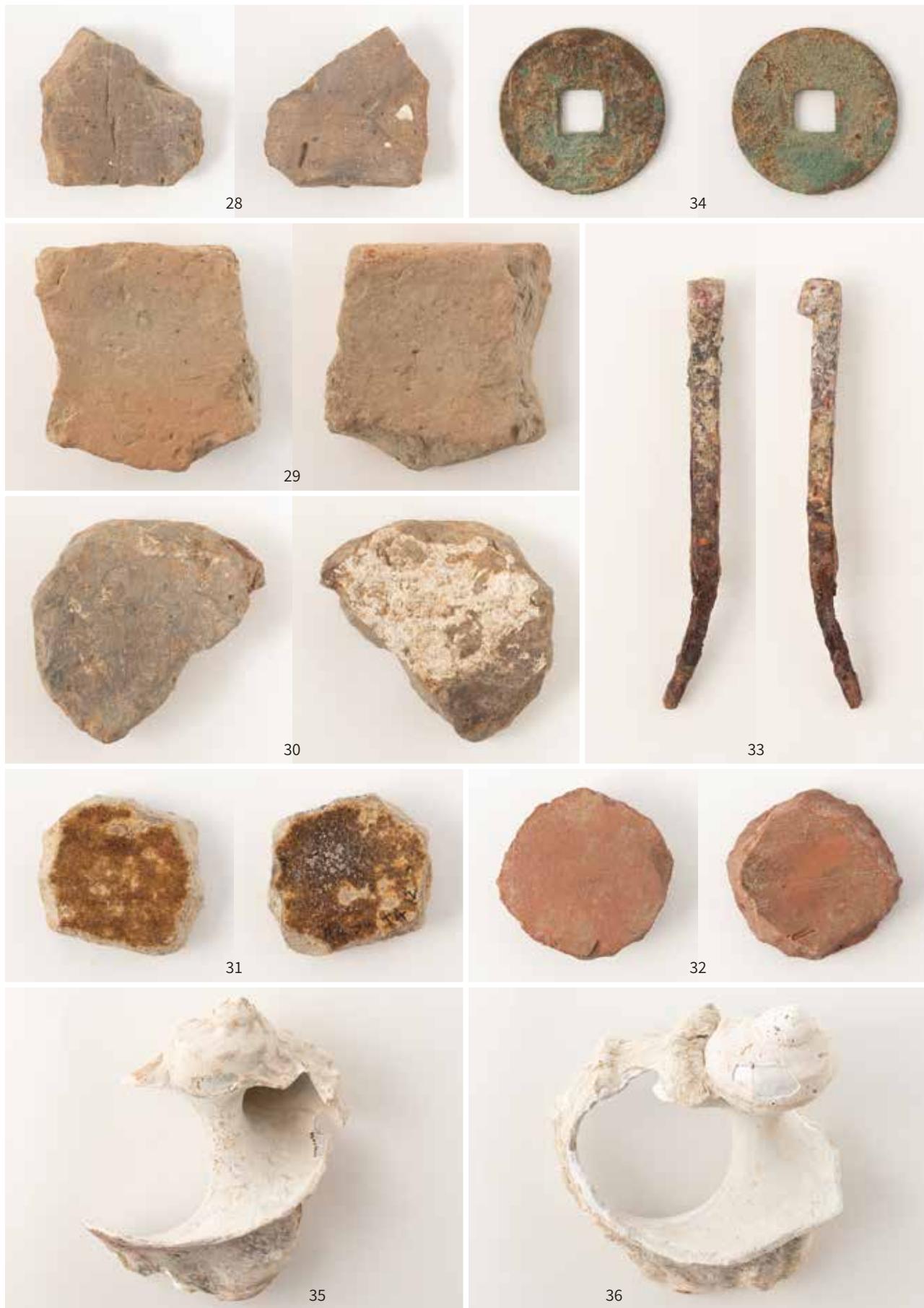


写真 102 トレンチ 4 出土遺物(2)

表9 トレンチ4 遺物出土状況

遺物の種類	出土地											合計	重量(g)		
		1・3層	4層	5層	4層 + 6層上 + 6層下	6層上	6層下	6層上 + 6層下	9・10層	12層	14層		集計分	未集計分	合計
陶磁器 (128点)	中国産 (18点)	青磁	1	1			1					3	12.4	0.0	12.4
		青磁染付	2									2	13.1	0.0	13.1
		白磁			1		1					2	11.3	0.0	11.3
		青花	2				1	1				4	12.7	0.0	12.7
		瑠璃釉		1								1	1.1	0.0	1.1
		褐釉陶器		3						1		4	44.0	0.0	44.0
		褐釉磁器	1									1	11.9	0.0	11.9
		褐釉染付	1									1	3.8	0.0	3.8
	本土産 (10点)	磁器		1								1	1.5	0.0	1.5
		近代磁器	7	2								9	89.0	0.0	89.0
	沖縄産 (75点)	施釉陶器	18	2	1	1	21	7				50	824.4	1.5	825.9
		初期無釉陶器	5									5	98.6	0.0	98.6
		無釉陶器	13	1			5			1		20	996.1	0.0	996.1
	陶質土器(23点)		9		2		8	2	1	1		23	341.1	0.8	341.9
	瓦質土器(1点)							1				1	81.7	0.0	81.7
	土器(1点)						1					1	1.4	0.0	1.4
建築部材 (76点)	陶管(28点)	28										28	3,246.9	0.0	3,246.9
	明朝系瓦(37点)	3	3	8		6	1		8	7	1	37	2,873.1	11.2	2,884.3
	近代大和系瓦(9点)	4	5									9	1,913.8	0.0	1,913.8
	埴(2点)	1					1					2	1,411.3	0.0	1,411.3
人そ口の遺他物の (19点)	円盤状製品(8点)	5					1			1	1	8	241.1	0.0	241.1
	金属製品(3点)	1	2									3	41.3	0.0	41.3
	錢貨(1点)						1					1	2.6	0.0	2.6
	土製品(1点)						1					1	12.8	0.0	12.8
	貝製品(5点)	1					2	1		1		5	1,602.4	0.0	1,602.4
	平瓦の加工品(1点)						1					1	77.0	0.0	77.0
遺自然 (3点)	二枚貝(2点)						1		1			2	441.6	0.0	441.6
	ウニ網(1点)	1										1	0.8	0.0	0.8
合計		103	21	12	1	48	17	1	14	8	1	226	14,408.8	13.5	14,422.3

表10 トレンチ2／トレンチ4 遺物出土状況

遺物の種類	出土地	合計	重量(g)			
			集計分	未集計分	合計	
自然遺物 (1点)	脊椎動物遺体 イヌ	トレンチ2 7層下 + トレンチ4 9・10層	1	6.5	0.0	6.5

## (5) トレンチ5

## 1 石積みの裏込め

10cm前後の石灰岩礫が詰め込まれた遺構で、石積みの裏込めに相当する。石積みについては、平成3年度の調査で検出されおり、南側に面を持ち、3段以上積まれていることが確認できる。石積みは現在、舗装道路から僅かに露出している状況である。

石積み・裏込めの控えには、オリーブ褐色で締りのある

粘質土(北壁の5層)があり(図28左下)、造成層と考えられる。石積みは、造成土を支えるための土留めとして造られたと考えられる。

## 2 戦前の表土

北壁の4層は、石灰岩小礫を多く含む黒褐色の層で、戦前の表土と考えられる。

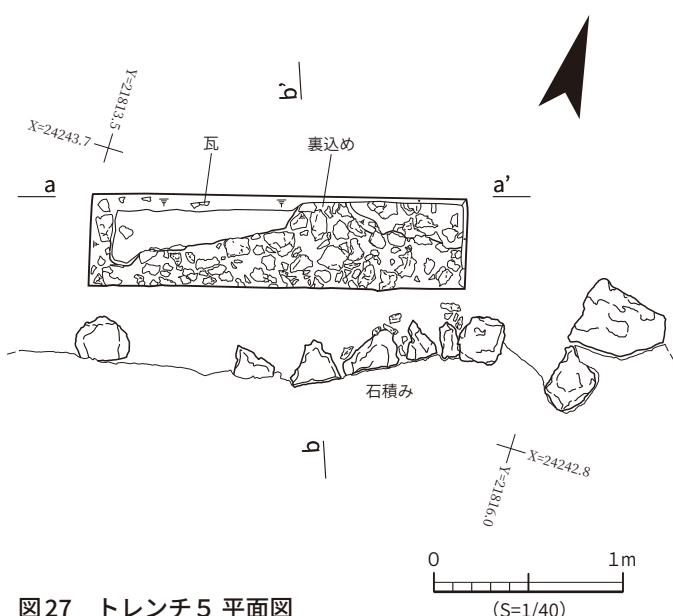
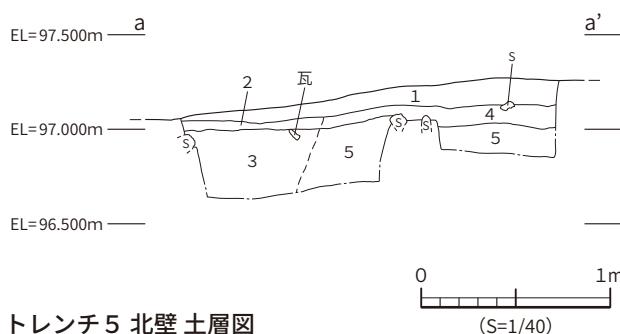


図27 トレンチ5 平面図

表11 トレンチ5 遺物出土状況

遺物の種類	出土地	1層	合計	重量(g)	
				集計分	未集計分
陶磁器(4点)	中国産褐釉陶器	1	1	8.5	0.0
	本土産近代磁器	1	1	2.2	0.0
	沖縄産施釉陶器	1	1	1.8	0.0
	沖縄産無釉陶器	*	0	0.0	1.6
	陶質土器	1	1	1.4	0.8
自然遺物(2点)	脊椎動物遺体 種不明	2	2	2.1	0.0
合計		6	6	16.0	2.4
18.4					

\*…細片のため未集計。重量のみ計量。



トレンチ5 北壁 土層図

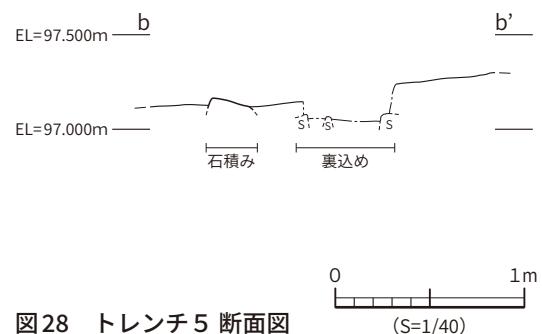


図28 トレンチ5 断面図



写真 103 トレンチ 5 設定状況(南西から)



写真 104 トレンチ 5 作業状況(南西から)



写真 105 トレンチ 5 表土掘削状況(北西から)



写真 106 トレンチ 5 全景(南から)



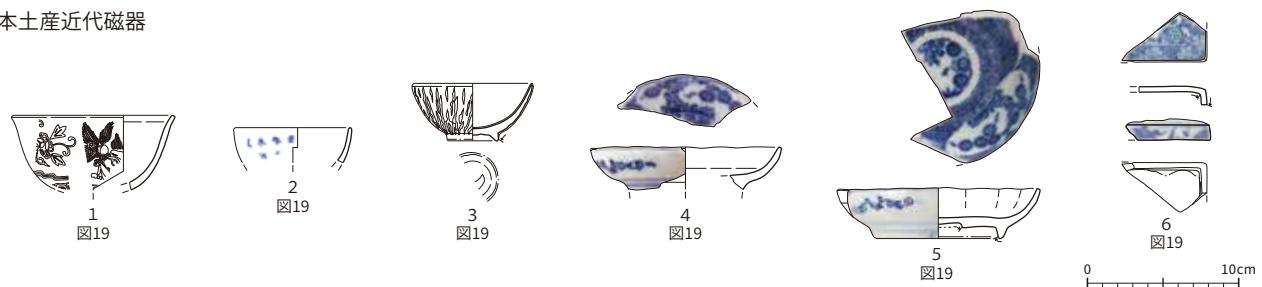
写真 107 トレンチ 5 全景(東から)

### 第3節 遺物の種類別概観

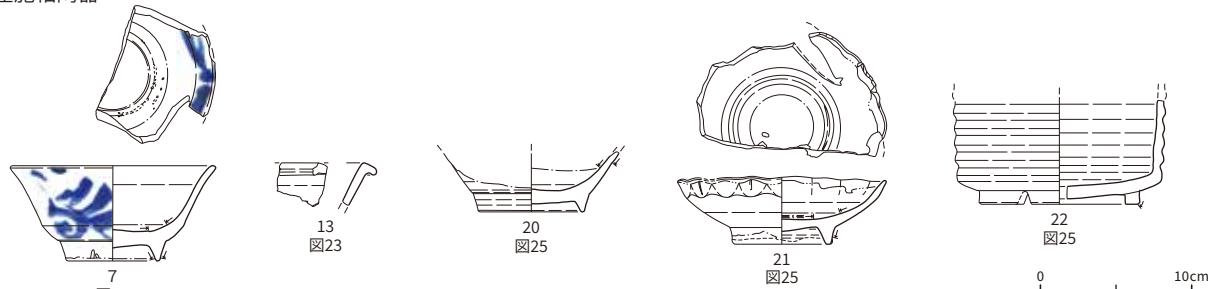
ここでは、種類別に遺物の実測図や集計表を掲載し、概観する。今回の調査では、482点の遺物(遺物収納コンテナで4箱)が出土している。松崎馬場跡は、道や広場として利用された歴史が長いため、人々の日々の生活を物語る遺物

が少なく、食糧残滓である貝類や脊椎動物遺体もわずかである。陶磁器については、近世から近代に属するものが多く、グスク時代の遺物も少量含まれる。瓦などの建築部材については、近世から近代に属するものがほとんどである。

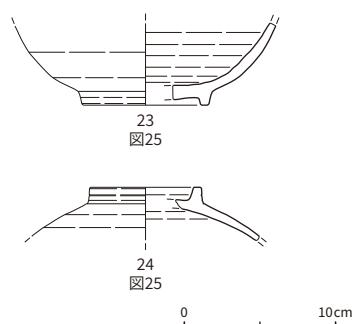
本土産近代磁器



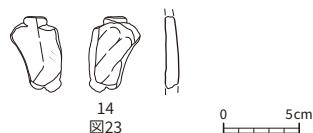
沖縄産施釉陶器



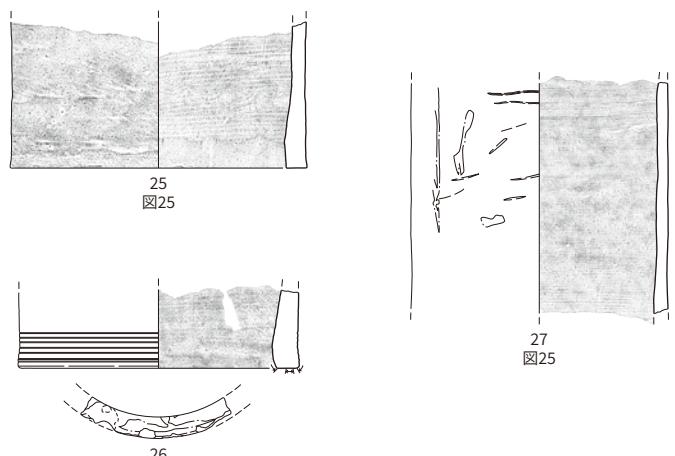
陶質土器



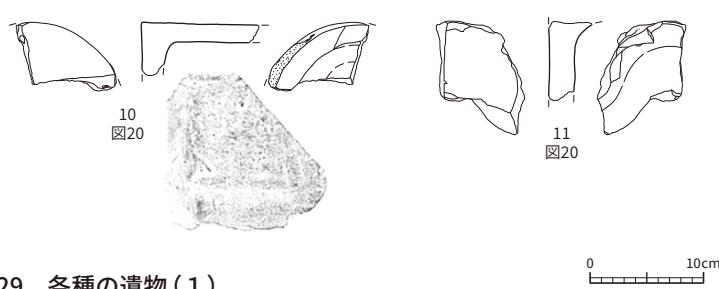
土器



陶管



近代明朝系瓦



金属製品

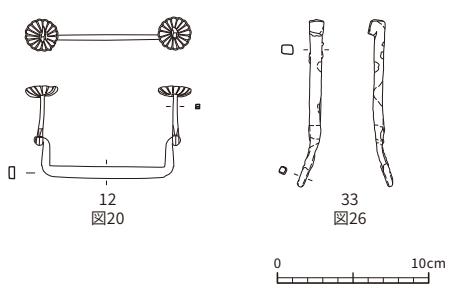
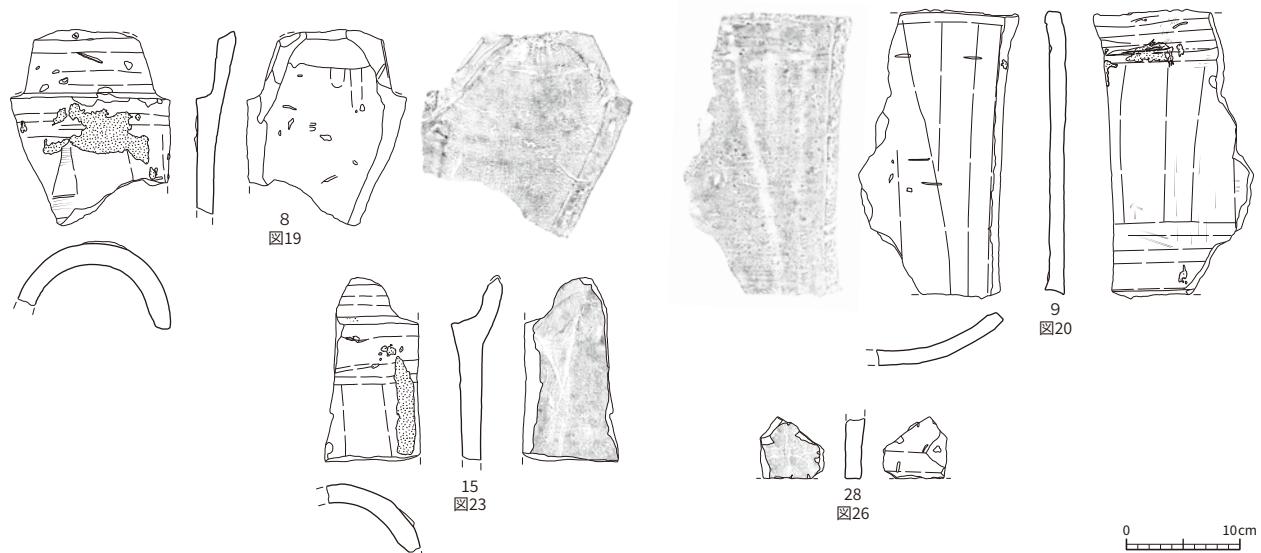
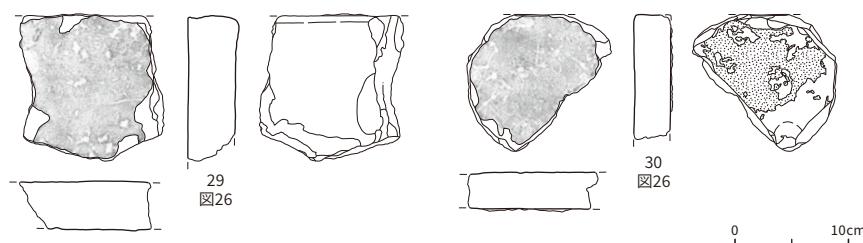


図 29 各種の遺物(1)

明朝系瓦



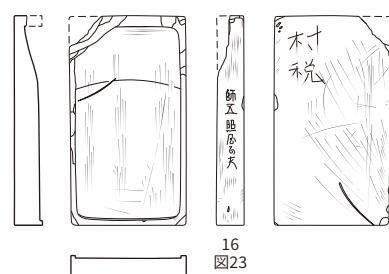
磚



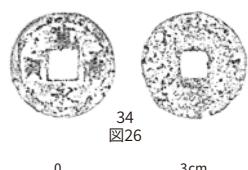
ガラス製品



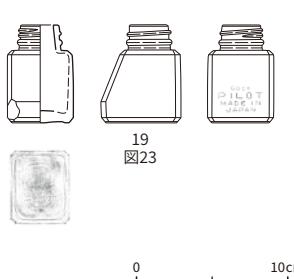
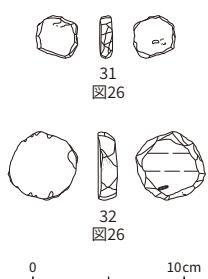
石製品



銭貨



円盤状製品



貝製品



図 30 各種の遺物 (2)



写真 108 脊椎動物遺体 イヌ 1. 下顎骨 P<sub>2</sub> M<sub>1</sub> M<sub>2</sub> 右 2. 大腿骨 右 3. 第2中足骨 右 イノシシ/ブタ 4. 肩甲骨? 左  
5. 上腕骨 左 6. 大腿骨 右 ウシ 7. 中手骨 右 種不明 8. 胸椎



写真 109 貝及びウニ類遺体

巻貝 1. リュウテン科 チョウセンサザエ 二枚貝 2. シャコガイ科 不明 ウニ網 3. ナガウニ科 パイプウニ

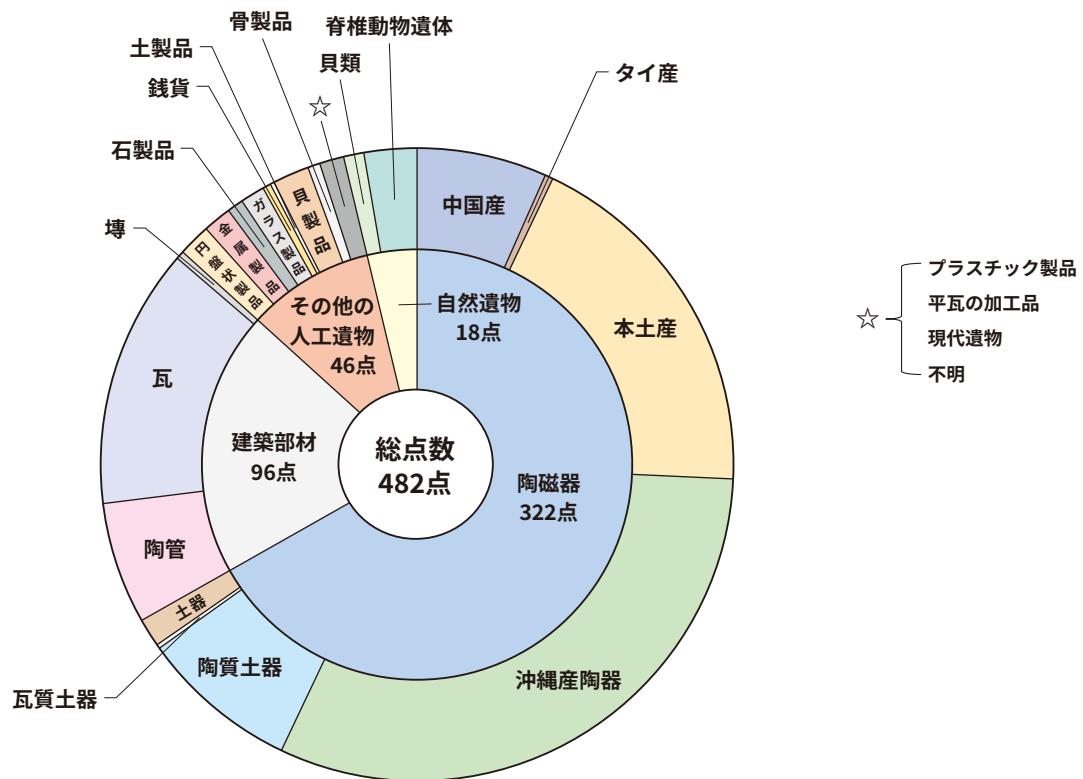


図 31 出土遺物点数の円グラフ

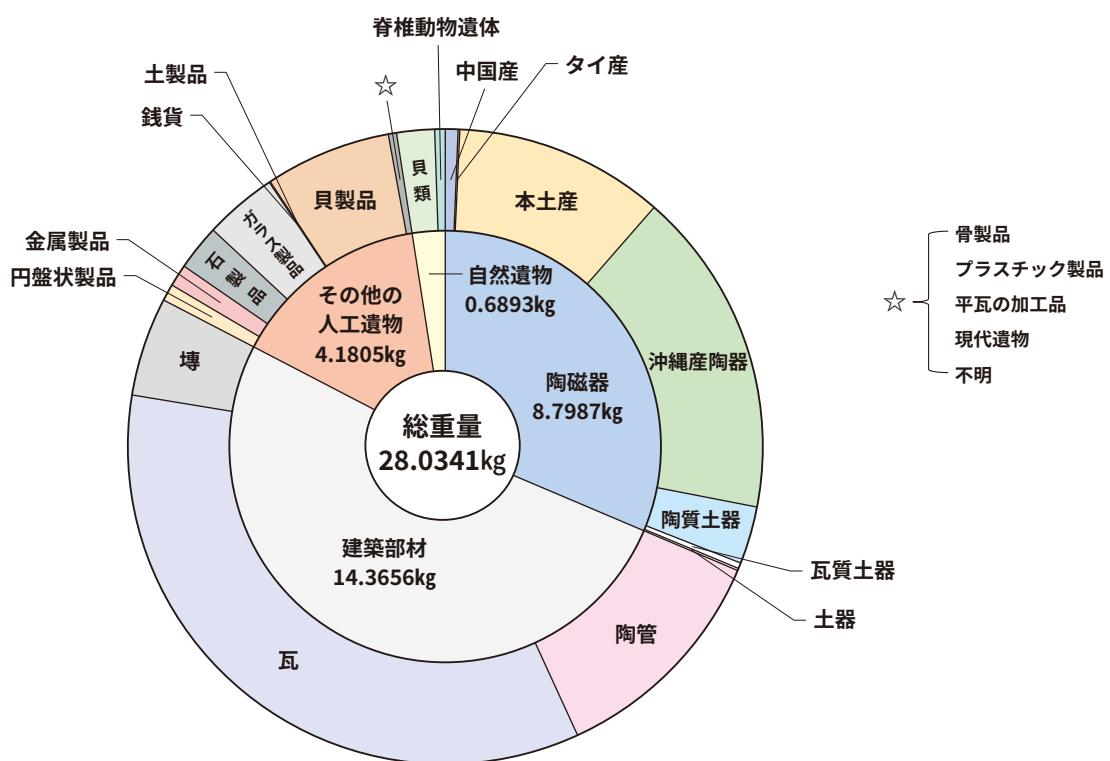


図 32 出土遺物重量の円グラフ

表12 遺物出土状況(総合)

遺物の種類			出土地		ト レ ン チ 1	ト レ ン チ 2	ト レ ン チ 3	ト レ ン チ 4	ト レ ン チ 5	ト レ ン チ 4	ト レ ン チ 2	表 探	不 明	合計	重量(g)		
					集計分	未集計分	合計										
陶 磁 器 (322点)	中国産 (32点)	青磁		3	1	3							7	50.2	1.1	51.3	
		青磁染付				2							2	13.1	0.0	13.1	
		白磁				2							2	11.3	0.0	11.3	
		青花		3	4	4							11	27.9	0.5	28.4	
		瑠璃釉				1							1	1.1	0.0	1.1	
		褐釉陶器		2		4	1						7	60.2	0.0	60.2	
		褐釉磁器				1							1	11.9	0.0	11.9	
		褐釉染付				1							1	3.8	0.0	3.8	
	タイ産(2点)	褐釉陶器	1	1									2	24.7	0.0	24.7	
		陶器	1		1								2	26.0	0.0	26.0	
	本土産 (90点)	磁器	1	2	3	1							7	52.2	1.0	53.2	
		近代磁器		30	5	9	1			3			48	811.3	0.0	811.3	
		現代磁器		31	2								33	2,107.6	0.0	2,107.6	
		施釉陶器	2	17	17	50	1						1	88	1,379.1	1.5	1,380.6
	沖縄産 (151点)	初期無釉陶器		5	8	5							18	354.1	1.4	355.5	
		無釉陶器	1	15	7	20	*			2			45	2,923.3	1.6	2,924.9	
		陶質土器(39点)	1	14		23	1						39	819.1	1.6	820.7	
	瓦質土器(1点)					1							1	81.7	0.0	81.7	
	土器(2点)					1	1						2	13.4	4.9	18.3	
	宮古式土器(5点)					5							5	13.1	0.0	13.1	
建築部材 (96点)	陶管(30点)				1	1	28						30	3,301.1	0.0	3,301.1	
	明朝系瓦(50点)			1	8	4	37						50	6,666.8	11.2	6,678.0	
	近代明朝系瓦(3点)				2	1							3	741.5	0.0	741.5	
	近代大和系瓦(11点)				1	1	9						11	2,233.7	0.0	2,233.7	
	埴(2点)						2						2	1,411.3	0.0	1,411.3	
その他の人工遺物 (46点)	円盤状製品(8点)						8						8	241.1	0.0	241.1	
	金属製品(7点)			3	1	3							7	315.9	0.0	315.9	
	石製品(4点)			2	2								4	651.8	0.0	651.8	
	ガラス製品(6点)			3	3								6	1,038.7	0.0	1,038.7	
	銭貨(2点)					1				1			2	3.6	0.0	3.6	
	土製品(1点)					1							1	12.8	0.0	12.8	
	貝製品(9点)			2	2		5						9	1,799.4	0.0	1,799.4	
	骨製品(3点)				3								3	14.8	0.0	14.8	
	プラスチック製品(2点)				2								2	7.5	0.0	7.5	
	平瓦の加工品(1点)						1						1	77.0	0.0	77.0	
	現代遺物(2点)			1	1								2	13.5	0.0	13.5	
	不明(1点)					1							1	4.4	0.0	4.4	
自然遺物 (18点)	脊椎動物遺体 (13点)	魚骨不明		1									1	0.1	0.0	0.1	
		イヌ		3					1				4	31.2	0.0	31.2	
		ウシ			1								1	62.0	0.0	62.0	
		ウシ／ウマ		1									1	4.4	0.0	4.4	
		イノシシ／ブタ		3									3	43.9	0.0	43.9	
		種不明		1			2						3	8.0	0.0	8.0	
	貝類 (5点)	巻貝		1	1								2	97.3	0.0	97.3	
		二枚貝				2							2	441.6	0.0	441.6	
		ウニ網				1							1	0.8	0.0	0.8	
合計			10	161	71	226	6	1	6	1	482	28,009.3	24.8	28,034.1			

\*…細片のため未集計。重量のみ計量。

表13 中国産青磁出土状況

出土地		トレンチ2		トレンチ3		トレンチ4		合計
		2・5・6層	11層	1・2層	1・3層	4層	6層上	
碗 (5点)	胴部		1		1	1	1	4
	底部	1						1
器種不明 (2点)	胴部		1	1				2
染付 (2点)	小碗 (2点)	底部			2			2
合計		1	2	1	3	1	1	9

表14 中国産白磁出土状況

出土地		トレンチ4		合計
		5層	6層上	
小碗 (1点)	底部		1	1
皿 (1点)	底部	1		1
合計		1	1	2

表15 中国産青花出土状況

出土地		トレンチ2		トレンチ3		トレンチ4		合計	
		3層	8・9・10層	11層	1・2層	5層	1・3層	6層下	
碗 (6点)	口縁部			1				1	2
	胴部				1		2		3
	底部					1			1
小碗 (1点)	口縁部		1						1
皿 (2点)	胴部					1			1
	底部						1		1
小杯 (1点)	底部	1							1
器種不明 (1点)	底部				1				1
合計		1	1	1	2	2	2	1	11

表16 中国産瑠璃釉出土状況

出土地		トレンチ4		合計
		4層		
碗 (1点)		胴部		1

表17 中国産褐釉出土状況

出土地		トレンチ2		トレンチ4		トレンチ5		合計
		11層	15層	1・3層	4層	9・10層	1層	
陶器	壺 (5点)	胴部	1			3	1	5
	器種不明 (2点)	胴部		1			1	2
磁器	壺 (1点)	胴部			1			1
	染付 (1点)	底部			1			1
合計			1	1	2	3	1	9

表18 タイ産褐釉陶器出土状況

出土地		トレンチ1		トレンチ2		合計
		2・3層	7層下	7層下	7層下	
壺 (1点)	胴部			1		1
器種不明 (1点)	胴部	1				1
合計		1		1		2

表19 瓦質土器出土状況

出土地		トレンチ4		合計
		6層下	6層下	
蓋 (1点)	庇	1	1	1

表20 土器出土状況

出土地		トレンチ3		トレンチ4		合計
		9層	11層	6層上	6層上	
土器	器種不明 (2点)	胴部	1		1	2
宮古式 土器	器種不明 (5点)	胴部	2	3		5
合計		3	3	1	1	7

表21 本土産陶磁器出土状況

出土地			トレンチ1		トレンチ2							トレンチ3			トレンチ4			トレンチ5	表採	合計
種類・器種・部位			2・3層	2層	3層	2・5・6層	7層上	7層下	8・9・10層	11層	13層	1・2層	3層	5層	1・3層	4層	1層			
陶器 (2点)	碗(1点)	底部											1					1		
	器種不明(1点)	胴部	1															1		
磁器 (7点)	碗(2点)		口縁部										1					1		
	碗(2点)		胴部										1					1		
	蓋(1点)	庇	1															1		
	袋物(1点)	胴部										1						1		
	器種不明(1点)	口縁部			1													1		
	染付 碗 (1点)	底部				1												1		
	白磁 碗 (1点)	胴部													1			1		
近代磁器 (48点)	碗(17点)			口縁部				3			3		2			2			10	
	碗(17点)			胴部						3	1						1		5	
	碗(17点)			底部									1		1				2	
	小碗(17点)			口～底部					2	1	1								4	
	小碗(17点)			口縁部			1	2		2	1	1			1				8	
	小碗(17点)			胴部						1					1				2	
	小碗(17点)			底部				1		1					1				3	
	皿(9点)			口～底部							2								2	
	皿(9点)			口縁部			1									2	2	5		
	皿(9点)			胴部												1	1			
	皿(9点)			底部						1								1		
	蓋(2点)	撮み				1			1									2		
	合子蓋(1点)	口縁部							1									1		
	急須(1点)	注口				1												1		
	器種不明(1点)	胴部												1				1		
現代磁器 (33点)	碗(3点)	口～底部				3												3		
	色絵	碗(2点)	胴部				2											2		
		口～底部				7						1						8		
		口縁部		1		10						1						12		
		胴部	1			3												4		
		底部				4												4		
合計			2	1	1	1	37	3	2	16	2	7	3	1	7	3	1	90		

表22 沖縄産施釉陶器出土状況

器種・部位	出土地	トレンチ1		トレンチ2				トレンチ3			トレンチ4						トレンチ5	不明	合計
		2・3層	4層	2・5・6層	7層下	8・9・10層	11層	1・2層	3層	5層	1・3層	4層	4層 + 6層上 + 6層下	5層	6層上	6層下	1層		
碗 (24点)	口～底部					1												1	
	口縁部					1	1	2			1					2	1	8	
	胴部				1			3	1							2	1	8	
	底部						2				3				1	1		7	
小碗 (15点)	口縁部							1			1	1			5			8	
	胴部										1				3	1		5	
	底部										1				1			2	
皿 (3点)	口～底部												1					1	
	口縁部														2			2	
瓶 (3点)	口縁部	1																1	
	胴部			1											1			2	
壺(1点)	胴部										1							1	
鉢 (10点)	口縁部							1		1								2	
	胴部							3			1				1			5	
	底部				2								1					3	
鍋 (3点)	口縁部										2							2	
	底部										1							1	
火炉(1点)	底部														1			1	
蓋 (3点)	底～袴							1	1									2	
	底									1								1	
急須蓋(1点)	底～袴										1							1	
急須 (7点)	口縁部							1										1	
	胴部										1							1	
	底部							1			1				2			4	
	注口														1			1	
酒器 (3点)	胴部						1	1										2	
	底部						1											1	
袋物(6点)	胴部		1						1				1		3			6	
器種不明(8点)	胴部							3			1	3				1		8	
合計		1	1	1	3	3	10	13	1	3	18	2	1	1	21	7	1	88	

表23 沖縄産無釉陶器出土状況

種類・器種・部位	出土地	トレンチ1 2・3層	トレンチ2 1・2・5層 3層 2・5・6層 7層下 7層下 + 11層					トレンチ3 11層 1・2層 5層 6・7層			トレンチ4 1・3層 4層 6層上 9・10層				表採	合計	
			2・3層	1・2・5層	3層	2・5・6層	7層下 + 11層	11層	1・2層	5層	6・7層	1・3層	4層	6層上	9・10層		
初期沖縄産無釉陶器(18点)	碗(2点)	口縁部										1				1	
		底部										1				1	
	壺(4点)	口縁部							1							1	
		胴部			1							1	1			3	
	鉢(4点)	口縁部				1			1	1						3	
		底部										1				1	
	器種不明(8点)	胴部						3	1	3		1				8	
沖縄産無釉陶器(45点)	壺(4点)	胴部				1	1									1	3
		耳										1				1	
	鉢(6点)	口縁部							1				1			2	
		胴部							1			1				2	
		底部			1									1		2	
	擂鉢(5点)	胴部		1						1		1	1			4	
		底部						1								1	
	水鉢(1点)	口縁部	1													1	
	甕(5点)	口縁部	1	1				1				1				4	
		胴部							1							1	
	袋物(1点)	胴部										1				1	
	器種不明(23点)	胴部	1		2	1		3	3			8	4		1	23	
合計			1	2	1	4	4	1	8	9	5	1	18	1	5	2	63

表24 陶質土器出土状況

出土地 器種・部位		トレンチ1	トレンチ2				トレンチ4						トレンチ5	合計
		2・3層	1・2・5層	7層下	8・9・10層	11層	1・3層	5層	6層上	6層下	6層上 + 6層下	9・10層	1層	
碗(1点)	底部						1							1
鉢(2点)	口縁部	1		1										2
鍋 (7点)	口縁部					1								1
	胴部						2	2		1				5
	底部								1					1
火炉 (3点)	把手								1					1
	受部											1		1
	底部										1			1
蓋 (3点)	撮み								1	1				2
	庇					1								1
焜爐 (2点)	口縁部			1										1
	胴部			1										1
器種不明 (21点)	口縁部						1							1
	胴部				1	8	4		4				1	18
	底部								1					1
	不明		1											1
合計		1	1	3	1	9	9	2	8	2	1	1	1	39

表25 陶管出土状況

部位	出土地	トレンチ2	トレンチ3	トレンチ4	合計
		11層	1・2層	1・3層	
狭端部(4点)				4	4
筒部(26点)	1	1	24	26	
合計	1	1	28	30	

表26 塚出土状況

色調	出土地		合計
	トレンチ4	1・3層	
褐色(1点)	1		1
灰色(1点)		1	1
合計	1	1	2

表27 瓦出土状況

種類・器種・部位	出土地	トレンチ1	トレンチ2					トレンチ3				トレンチ4							合計
			2・3層	2層	2・5・6層	7層上	7層下	11層	1・2層	3層	4層	1・3層	4層	5層	6層上	6層下	9・10層	12層	14層
明朝系(50点)	軒丸瓦(1点)	瓦当	赤色					1											1
	軒平瓦(2点)	瓦当	赤色			1													1
		筒部	灰色											1					1
	丸瓦(16点)	玉縁部	赤色				1				2	1			1	1			6
			褐色										1						1
			灰色		1							1	1		2				5
			硬質陶器質										1						1
		端部	赤色	1															1
			硬質陶器質									1							1
		筒部	褐色														1		1
	平瓦(19点)	広端部～狭端部	赤色					1											1
			褐色											1					1
			硬質陶器質											1					1
		狭端部	赤色	1												1			2
			褐色															1	1
			灰色						1		1			1	1		1		4
			硬質陶器質				1			1									2
		筒部	赤色									1				1			2
			褐色												2				2
			灰色											2	1				3
	不明(12点)	筒部	赤色					1											1
			褐色											1			1		2
			灰色										3			2			5
			硬質陶器質									2							2
		不明	赤色														1		1
			褐色												1				1
近代明朝系(3点)	軒丸瓦(2点)	瓦当	赤色			1		1											2
	軒平瓦(1点)	瓦当	赤色						1										1
近代大和系(11点)	丸瓦(2点)	玉縁部	灰色			1						1							2
	平瓦(9点)	端部	赤色									1							1
			灰色						1		2	1							4
			赤色									1							1
		筒部	褐色								1								1
			灰色								2								2
				1	1	2	1	4	3	2	2	2	7	8	8	6	1	8	7
合計																			64

表28 円盤状製品出土状況

素材	出土地				合計
	1・3層	6層上	9・10層	12層	
中国産褐釉陶器（1点）				1	1
沖縄産施釉陶器（1点）		1			1
沖縄産無釉陶器（1点）	1				1
明朝系瓦（5点）	4		1		5
合計	5	1	1	1	8

表29 金属製品出土状況

種類・器種・部位	出土地				合計
	7層上	13層	1・2層	1・3層	
青銅製品 (3点)	金具 把手	2			2
	砲弾		1		1
鉄製品 (4点)	桶受け金具		1		1
	角釘			1	2
合計	2	1	1	1	7

表30 石製品出土状況

器種	出土地			合計
	11層	15層	1・2層	
硯（3点）	1		2	3
器種不明（1点）		1		1
合計	1	1	2	4

表31 ガラス製品出土状況

器種・部位・色調	出土地			合計
	7層上	1・2層	トレンチ2	
瓶 (6点) 口縁部 ～底部	緑色系	-	1	1
	茶色系	-	1	1
	殺虫剤瓶		1	1
	無色系	調味料瓶	1	1
	インク瓶		1	1
合計		3	3	6

表32 錢貨出土状況

錢種	出土地			合計
	トレンチ4	表採	6層下	
1円（1点）			1	1
寛永通寶（1点）	1			1
合計	1	1		2

表33 土製品出土状況

器種	出土地		合計
	トレンチ4	6層上	
羽口（1点）		1	1

表34 貝製品出土状況

器種	出土地		トレンチ4	合計
	トレンチ1	トレンチ2		
ヤコウガイ（8点）	2	1	1	8
チョウセンサザエ（1点）			1	1
合計	2	1	1	9

表35 骨製品出土状況

器種	出土地		合計
	トレンチ2	11層	
歯ブラシ（3点）		3	3

表36 プラスチック製品出土状況

器種	出土地		合計
	1・2・5層	7層上	
歯ブラシ（1点）	1		1
簪（1点）		1	1
合計	1	1	2

表37 平瓦の加工品出土状況

種類	出土地		合計
	トレンチ4	6層下	
明朝系瓦（1点）		1	1

表38 現代遺物出土状況

種類	出土地		合計
	トレンチ2	トレンチ3	
スレート（2点）	1	1	2

表39 不明遺物出土状況

器種・部位	出土地		合計
	トレンチ3	5層	
器種不明（1点）	1	1	1

表40 脊椎動物遺体種類一覧

硬骨魚綱	OSTTEICHTHYES
目・科不明	
哺乳綱	MAMMALIA
食肉目	Carnivora
イヌ科	Canidae
イヌ	<i>Canis lupus familiaris</i>
奇蹄目	Perissodactyla
ウシ科 / ウマ科	Bovidae / Equidae
ウシ / ウマ	<i>Bos taurus / Equus ferus</i>
鯨偶蹄目	Cetartiodactyla
イノシシ科	Suidae
イノシシ / ブタ	<i>Sus scrofa / S. s. domesticus</i>
ウシ科	Bovidae
ウシ	<i>Bos taurus</i>
目・科不明	

表41 脊椎動物遺体（魚類）出土状況

トレンチ2

層位	分類	部位	左	右	不明	—	計
7層上	不明	椎骨				1	1

表42 脊椎動物遺体（哺乳類）出土状況

トレンチ2

層位	分類	部位	残存状況	解体痕	左	右	不明	—	計
7層上	イヌ	下顎部	下顎体 P <sub>2</sub> M <sub>1</sub> M <sub>2</sub>			1			1
	ウシ / ウマ	部位不明	骨幹部				1		1
	イノシシ / ブタ	上腕骨	骨幹部—遠位部	有り	1				1
		大腿骨	近位部—骨幹部	有り		1			1
	種不明	胸骨	椎体（胸椎）	有り				1	1
7層上	イヌ	大腿骨	遠位端			1			1
		中足骨	完形			1			1
	イノシシ / ブタ	肩甲骨？	骨幹部—遠位部		1				1
合計					2	4	1	1	8

トレンチ2 / トレンチ4

トレンチ / 層位	分類	部位	残存状況	解体痕	左	右	不明	—	計
トレンチ2 / 7層下 トレンチ4 / 9・10層	イヌ	大腿骨	骨幹部—遠位部			1			1

トレンチ3

層位	分類	部位	残存状況	解体痕	左	右	不明	—	計
3層	ウシ	中手骨	近位端—骨幹部	有り		1			1

トレンチ5

層位	分類	部位	残存状況	解体痕	左	右	不明	—	計
1層	種不明	部位不明	骨幹部				1		1
		肋骨	骨幹部	有り			1		1
合計							2		2

表43 貝類の生息地類型

大区分		底質等
I	外洋 - サンゴ礁域	a 岩礁
II	内湾 - 転石域	b 転石
III	河口干潟 - マングローブ域	c 砂 / 泥
IV	淡水域	d 河川礫底
V	陸域	f 植物上
VI	その他	

小区分		
0	潮間帯上部	
	I - 0 ノッチ	5 止水
	III - 0 マングローブ	6 流水
1	潮間帯中・下部	7 林内
2	亜潮間帯上縁部	8 林内・林縁部
	I - 2 イノ一内	9 林縁部
3	干瀬	10 海浜部
4	礁斜面	11 打ち上げ物
		12 化石

表44 貝及びウニ類遺体出土状況

種類	科名	種名	生息地	トレンチ 2	トレンチ 3	トレンチ 4			計
				2層	5層	1・3層	6層下	9・10層	
巻貝	リュウテン科	チョウセンザザエ	I - 3 - a	1					1
	タカラガイ科	不明	—		1				1
小計				1	1				2
二枚貝	シャコガイ科	不明	I - 2 - c				1		1
	不明		—					1	1
小計							1	1	2
ウニ綱	ナガウニ科	パイプウニ	I - 3 - a			1			1

## 第4章 自然科学分析

### はじめに

松崎馬場跡は沖縄県那覇市に所在する、首里城から浦添方面に至る街道の一部および広場の名称とされるものである。龍潭の突き出した一帯に松が植えられたことが名前の由来となっている。1801年に国学が置かれた際に、この一帯が整備された。中国からの冊封使が来琉した際に、爬龍船競漕見物のための桟敷席が設けられた。

今回は令和4年度の発掘調査において確認された遺構覆土を対象に、道路面構築状況などの情報を得ることを

目的として自然科学分析を実施する。

### 1. 試料

試料は、松崎馬場跡より確認された道跡、近世の造成層などから採取された土壤試料を対象に、花粉分析4点、植物珪酸体分析2点、微細物分析4点、顕微鏡写真撮影4点を実施する。また、土壤試料より抽出された炭化材を対象に、放射性炭素年代測定3点を実施する。分析試料および分析項目の詳細を表45に示す。

表45 分析試料、分析項目一覧

No.	トレンチ	遺構名	層序名	種類	14C	花粉	珪酸体	微細物	顕微鏡	備考
1	2	道跡	18層	石、土壤		●		●	●	
2	2	道跡	18層	石、土壤		●		●	●	
3	4		14層	土壤	●	●	●	●	●	近世の造成層
4	4		14層	土壤	●	●	●	●	●	近世造成層(礫層の下)
5	4		14層	炭	●					近世造成層(礫層の下)

1) 14C: 放射性炭素年代測定、花粉: 花粉分析、珪酸体: 植物珪酸体分析

微細物: 微細物分析、顕微鏡: 顕微鏡写真撮影

### 2. 分析方法

#### (1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。試料表面の汚れをメス、ピンセット、超音波洗浄等により物理的に除去する。塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する(酸-アルカリ-酸処理:AAA)。なお、通常は水酸化ナトリウム水溶液の濃度を上げていき、最終的に1M溶液で処理を実施するが、試料が脆弱で必要な炭素を得られなくなる可能性がある場合、水酸化ナトリウム溶液の濃度が薄い段階で処理を停止する。濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と記載する。その後、試料を燃焼させてCO<sub>2</sub>を発生させる。

真空ラインで不純物(水など)を取り除き、CO<sub>2</sub>を精製する。これを鉄を触媒として水素で還元し、グラファイトを生成させる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料、バックグラウンド試料の測定も行う。

δ<sup>13</sup>Cは試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma; 68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う

(Stuiver and Polach, 1977)。また、曆年較正用に一桁目まで表した値も記す。曆年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk, 2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al., 2020)である。

#### (2) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉(1973)、中村(1980)、三好ほか(2011)等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。

#### (3) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壤化や搅乱などの影響によって分離する。「すさ」として植物遺体などが混入していれば、組織構造を反映する珪化組織片や植物珪酸体が土壤中に残されている可能性が考えられる。

珪化組織片や植物珪酸体の検出には、以下の方法を試みた。過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、珪化組織片や植物珪酸体を分離・濃集する。

これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由來した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由來した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。

#### (4) 微細物分析

試料を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物や植物片を粒径0.5mmの篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物等を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す(約20回)。残土を粒径0.5mmの篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料(炭化物・植物片主体)と水に沈んだ試料(砂礫主体)を、粒径別に常温乾燥する。

水洗・乾燥後の炭化物・植物片主体試料と砂礫主体試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体や葉遺体の他、主に径2mm以上の炭化材などの遺物を抽出する。

種実遺体等の同定は、現生標本や中山ほか(2010)、鈴木ほか(2018)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。炭化材は最大径と重量、炭化材主体、植物片、サンゴ片主体は重量を一覧表に併記する。

分析後は、種実遺体等を分類群別に容器に入れて保管する。他の抽出物と残渣も容器に入れて保管する。

#### (5) 顕微鏡写真撮影

試料を微量採取し、スライドガラス上に蒸留水を用いて塗り広げ、スメアスライドを作製する。偏光顕微鏡(Nikon 製 ECLIPSE LV100POL)で、下方ポーラー下および直交ポーラー下において、試料の構成物について、観察記載を行う。構成物の量比は、構成物全体に対して、多量(>50%)、中量(20~50%)、少量(5~20%)、微量(<5%)およびきわめて微量(<1%)という基準で目視により判定する。代表的な箇所を下方ポーラーおよび直交ポーラー下で撮影を行った。マイクロスコープ観察は、キーエンス社製のマイクロスコープ(VHX-1000)を用いて観察を行った。観察対象としたのは、分析前試料と、洗い出し済み径2mmの礫である。

### 3. 結果

#### (1) 放射性炭素年代測定

結果を表46、図33に示す。同位体補正を行った値は、No.3が180±20BP、No.4が350±20BP、No.5が170±20BPを示す。暦年較正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5,568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、その後訂正された半減期(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データーセットは、IntCal20(Reimer et al., 2020)を用いる。2σの値は、No.3がcalAD1660~calAD1950、No.4がcalAD1472~calAD1635、No.5がcalAD1662~calAD1950を示す。

表46 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代			Code No.	
						年代値	確率			
No.3 トレンチ4 14層 近世の造成層	炭化物	AAA	180±20	-27.45 ±0.26	180±21	σ cal AD 1668 - cal AD 1683	282	- 267	calBP 0.128	IAAA- 222051
						cal AD 1736 - cal AD 1782	214	- 168	calBP 0.389	
						cal AD 1798 - cal AD 1803	152	- 147	calBP 0.034	
						cal AD 1930 - cal AD 1950	20	- 0	calBP 0.131	
						2σ cal AD 1660 - cal AD 1694	290	- 256	calBP 0.197	
						cal AD 1726 - cal AD 1811	224	- 139	calBP 0.564	
						cal AD 1917 - cal AD 1950	33	- 0	calBP 0.194	
No.4 トレンチ4 14層 近世の造成層 (礫層の下)	炭化物	AAA	350±20	-27.31 ±0.23	348±20	σ cal AD 1489 - cal AD 1522	461	- 428	calBP 0.281	IAAA- 222052
						cal AD 1575 - cal AD 1625	375	- 325	calBP 0.402	
						2σ cal AD 1472 - cal AD 1529	478	- 421	calBP 0.382	
						cal AD 1542 - cal AD 1635	408	- 315	calBP 0.572	
No.5 トレンチ4 14層 近世の造成層 (礫層の下)	炭化物	AaA	170±20	-24.35 ±0.19	174±19	σ cal AD 1670 - cal AD 1683	280	- 267	calBP 0.522	IAAA- 222053
						cal AD 1735 - cal AD 1779	215	- 171	calBP 0.030	
						cal AD 1799 - cal AD 1803	151	- 147	calBP 0.030	
						cal AD 1930 - cal AD 1945	20	- 5	calBP 0.130	
						2σ cal AD 1662 - cal AD 1695	288	- 255	calBP 0.023	
						cal AD 1725 - cal AD 1812	225	- 138	calBP 0.726	
						cal AD 1916 - cal AD 1950	34	- 0	calBP 0.205	

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2) yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

4) AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理、HClは塩酸処理、Edgはエッジング処理、CoExはコラーゲン抽出処理を示す。

5) 暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

6) 暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8) 統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

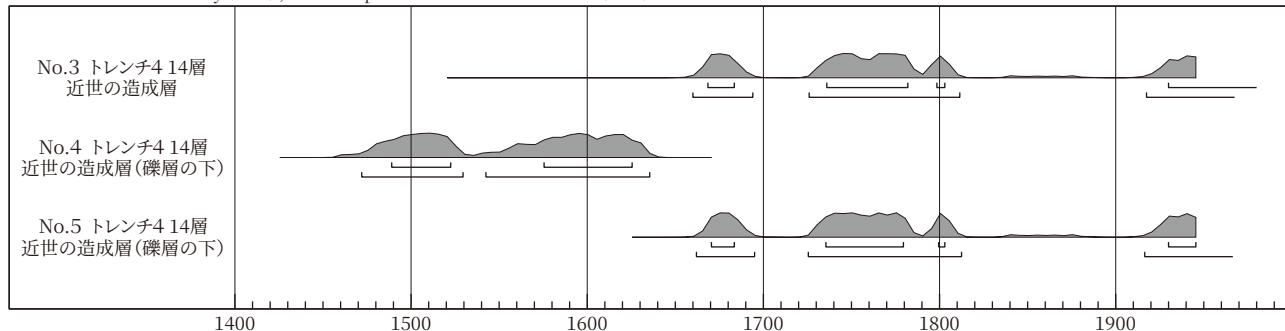


図 33 暦年較正結果

Calibrated date (calAD)

## (2)花粉分析

結果を表47に示す。いずれの試料においても花粉化石の産出が少ない。また、わずかに検出される花粉化石の保存状態も、花粉外膜が破損・溶解している物が多く、全体的にやや悪い。

トレンチ2道跡の18層(No.1, 2)では、マツ属とハンノキ属がわずかに認められる程度である。トレンチ4の14層(No.3, 4)では、マツ属が比較的多く認められ、ウルシ属、イネ科がわずかに認められる。シダ類胞子も、トレンチ4の試料のほうが多く認められた。

## (3)植物珪酸体分析

結果を表48に示す。トレンチ4の14層の各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、その含量や分類群が少なく、また保存状態も悪い。

No.4では、イネ科として分類群が明確にならない不明の機動細胞珪酸体や樹木起源としてマンサク科(イスノキ属)の葉部に形成される植物珪酸体が僅かに検出される。

No.3でも不明の機動細胞珪酸体やマンサク科(イスノキ属)の葉部に形成される植物珪酸体が僅かに検出されるとともに、タケ亜科の機動細胞珪酸体が僅かに見られる。

## (4)微細物分析

結果を表49に示す。4試料3.7kgを洗い出した結果、種実11個(トウダイグサ科、イネ、タイワンソクズ)、葉1個(マツ属複維管束亜属)、卵胞子3個(シャジクモ科)、植物片0.53g、不明炭化物9個、炭化材0.13g、炭化材主体0.32g、サンゴ片主体(貝貝・貝片含む)847.4gが検出された。以下、試料別検出状況を記す。

## ・トレンチ2道跡18層(No.1)

試料515gより、栽培植物のイネの炭化粒(基部)1個の他、植物片0.01g、炭化材主体0.001g、サンゴ片主体(貝貝・貝片含む)243.3gが検出された。

## ・トレンチ2道跡18層(No.2)

試料245gより、植物片0.08g、炭化材0.04g(最大5.8mm)、炭化材主体0.001g未満、サンゴ片主体(貝貝・貝片含む)113.1gが検出されるのみで、種実は確認されなかった。

表 47 花粉分析結果

種類	トレンチ2道跡		トレンチ4	
	18層 (No.1)	18層 (No.2)	14層 (No.3)	14層 (No.4)
木本花粉				
マツ属複維管束亜属	-	-	10	3
マツ属(不明)	1	1	43	35
ハンノキ属	2	-	-	-
ウルシ属	-	-	1	-
草本花粉				
イネ科	-	-	1	-
不明花粉				
不明花粉	-	-	1	1
シダ類胞子				
シダ類胞子	3	1	51	22
合計				
木本花粉	3	1	54	38
草本花粉	0	0	1	0
不明花粉	0	0	1	1
シダ類胞子	3	1	51	22
合計	6	2	107	61

表 48 植物珪酸体分析結果

分類群	トレンチ4	
	14層 (No.3)	14層 (No.4)
イネ科葉身機動細胞珪酸体		
タケ亜科	<100	-
不明	<100	<100
樹木起源珪酸体		
マンサク科	200	<100
合計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	-	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	200	<100
樹木起源珪酸体	200	<100
植物珪酸体含量	400	100

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。

2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

3)<100: 100個/g未満。

## ・トレンチ4 14層(No.3)

試料1671gより、常緑針葉樹のマツ属複維管束亜属(リュウキュウマツ?)の炭化葉1個(残存長2.7mm)、広葉樹のトウダイグサ科(オオバギ?)の種子1個、草本のタイワンソクズの核1個、車軸藻類のシャジクモ科の卵

胞子1個の他、植物片0.27g、不明炭化物6個、炭化材0.08g(最大6.0mm)、炭化材主体0.17g、サンゴ片主体(巻貝・貝片含む)336.3gが検出された。

・トレンチ4 14層(No.4)

試料1272gより、広葉樹のトウダイグサ科(オオバ

ギ?)の種子4個(残存径6.3mm)、草本のタイワンソクズの核4個、車軸藻類のシャジクモ科の卵胞子2個の他、植物片0.18g、不明炭化物3個、炭化材0.01g(最大4.3mm)、炭化材主体0.15g、サンゴ片主体(巻貝・貝片含む)154.7gが検出された。

表49 微細物分析結果

分類群	部位・状態・粒径	トレンチ2 道跡		トレンチ4		備考
		18層 (No.1)	18層 (No.2)	14層 (No.3)	14層 (No.4)	
木本 マツ属複維管束亞属(リュウキュウマツ?) トウダイグサ科(オオバギ?)	葉 種子	破片 破片	- -	1 1	- 4	(個), 残存長2.7mm (個), 残存径6.3mm
草本 イネ タイワンソクズ	穀(基部) 核	破片 完形 破片	1 - -	- 1 -	- 1 3	(個) (個) (個)
車軸藻類 シャジクモ科	卵胞子	完形	- -	1 2	(個)	
植物片			0.01 0.08	0.27 0.18	乾重(g)	
不明炭化物		炭化	- -	6 3	(個), No.3: 3個炭化材?	
炭化材			- 5.8 0.04	6.00 0.08 0.11	4.32 0.01 0.07	最大径(mm) 乾重(g) 乾重(g)
炭化材主体		4-2mm 2-1mm 1-0.5mm	- -	<0.001	0.07 0.08	乾重(g)
サンゴ片主体		>8mm 8-4mm 4-2mm 2-1mm 1-0.5mm	121.2 40.9 34.2 18.3 28.7	81.2 9.0 8.4 7.4 7.1	154.8 48.0 48.7 33.8 51.0	16.1 25.3 32.0 34.9 46.4
分析量			515	245	1671 1272	湿重(g)

(5)顕微鏡写真撮影

試料の顕微鏡観察結果を以下に記す。偏光顕微鏡写真、マイクロスコープによる撮影画像を写真112・113に示す。

・トレンチ2 道跡 18層(No.1)

本試料は、多量の炭酸塩鉱物、微量の鉱物片、少量の岩片から構成される。

炭酸塩鉱物は、粒径0.005mm以下の微細不定形状を呈し、基質の大部分を構成する。鉱物片はシルト～砂粒として含まれ、粒径0.3mm以下で石英などが認められる。岩片は石灰岩である。

マイクロスコープによる観察では、石灰岩礫を多量含む。石灰岩礫は角礫状で、やや多孔質である。

・トレンチ2 道跡 18層(No.2)

本試料は、多量の炭酸塩鉱物、微量の鉱物片、少量の岩片、きわめて微量の植物片から構成される。

炭酸塩鉱物は、粒径0.005mm以下の微細不定形状を呈し、基質の大部分を構成する。鉱物片は、シルト～砂粒として含まれ、粒径0.24mm以下で石英、角閃石などが認められる。岩片は石灰岩である。植物片は、組織が残存しているものや炭化しているものが散見される。

マイクロスコープによる観察では、石灰岩礫を多量

含む。石灰岩礫は角礫状で、やや多孔質である。植物片および泥岩の礫をきわめて微量伴う。

・トレンチ4 14層(No.3)

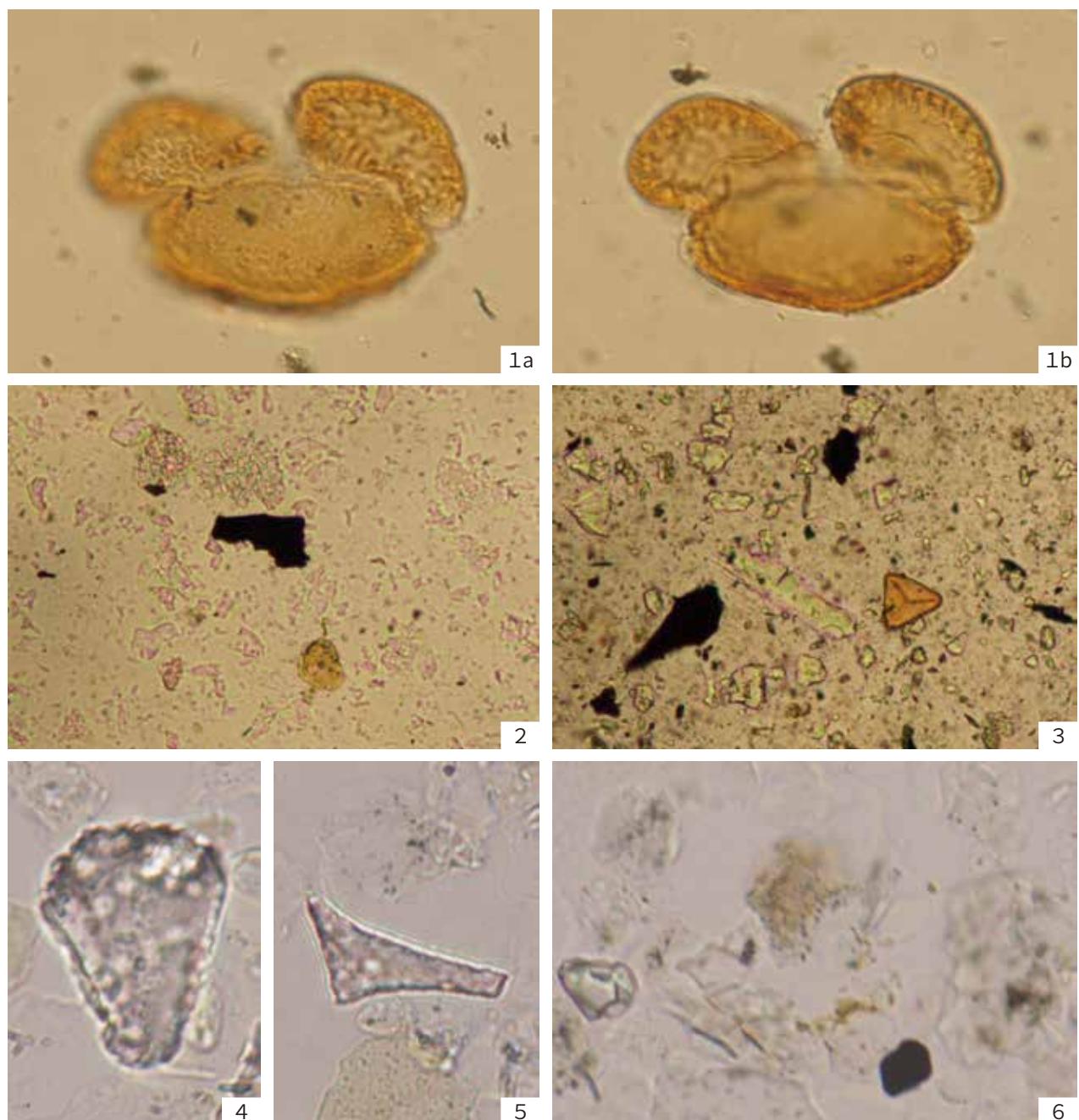
本試料は、多量の粘土、中量の炭酸塩鉱物、少量の岩片および鉱物片、きわめて微量の植物片から構成される。粘土は締まりが強く、灰褐色を呈する。鉱物片は、シルト～砂粒として含まれ、粒径0.34mm以下で石英、斜長石、風化鉱物などが認められる。岩片は石灰岩などである。植物片は、炭化が進行している。その他、有孔虫とみられる化石片も含まれる。

マイクロスコープによる観察では、粘土を伴う石灰岩礫である。石灰岩礫は角礫状で、やや多孔質である。きわめて微量の巻貝を伴う。

・トレンチ4 14層(No.4)

本試料は、多量の粘土、中量の炭酸塩鉱物、少量の岩片および鉱物片、きわめて微量の植物片から構成される。粘土は締まりが強く、灰褐色を呈する。鉱物片は、シルト～砂粒として含まれ、粒径0.28mm以下で石英、斜長石、風化鉱物などが認められる。岩片は石灰岩などである。植物片は、炭化が進行している。

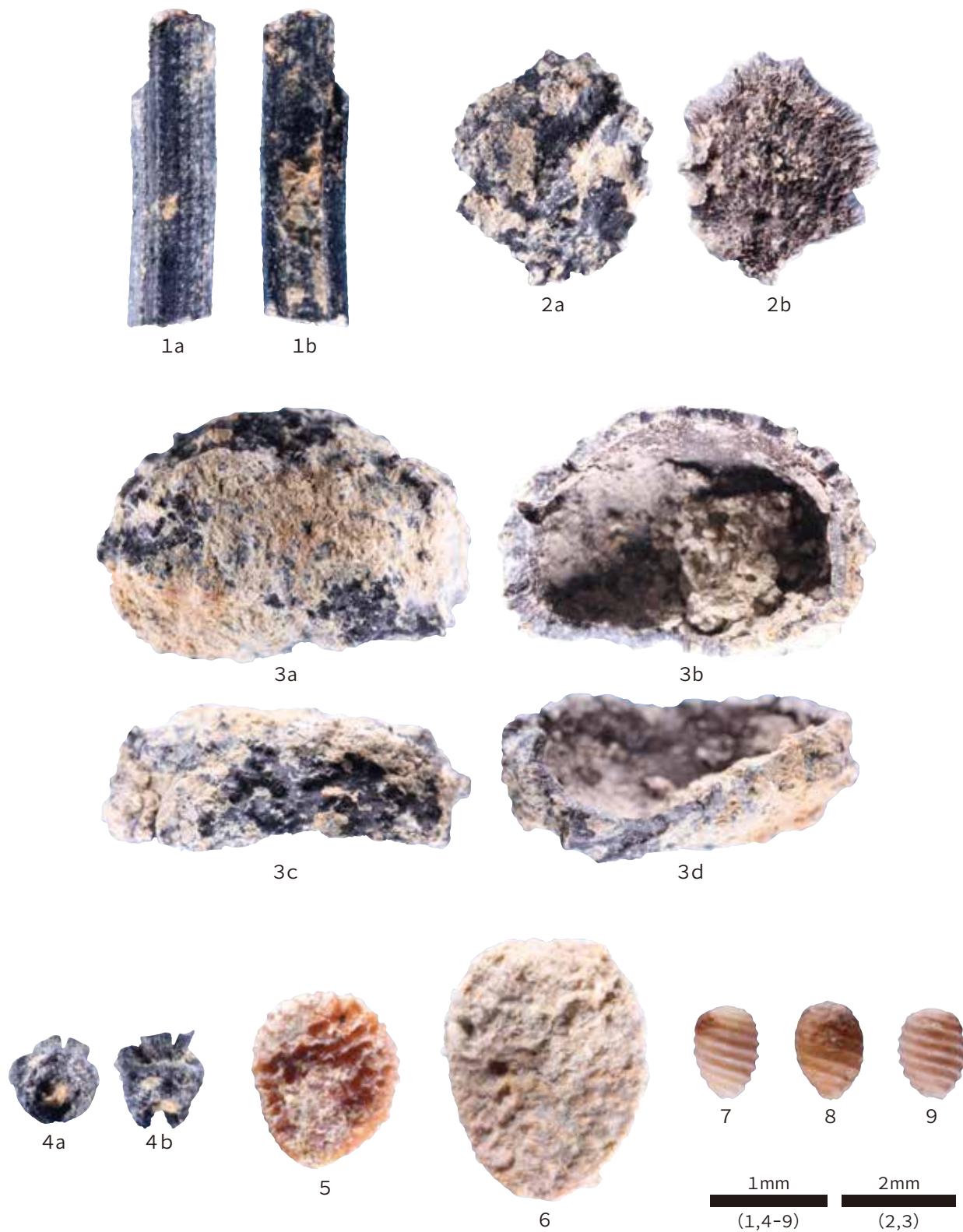
マイクロスコープによる観察では、粘土を伴う石灰岩礫で、きわめて微量の植物片を伴う。石灰岩礫は角礫状で、やや多孔質である。泥岩の礫をきわめて微量伴う。



1. マツ属(トレンチ4 14層 No.3)
2. 花粉分析プレパラート内の状況(トレンチ2 道跡 18層 No.1)
3. 花粉分析プレパラート内の状況(トレンチ4 14層 No.4)
4. タケ亜科機動細胞珪酸体(トレンチ4 14層 No.3)
5. マンサク科葉部珪酸体(トレンチ4 14層 No.3)
6. 植物珪酸体分析プレパラート内の状況(トレンチ4 14層 No.4)

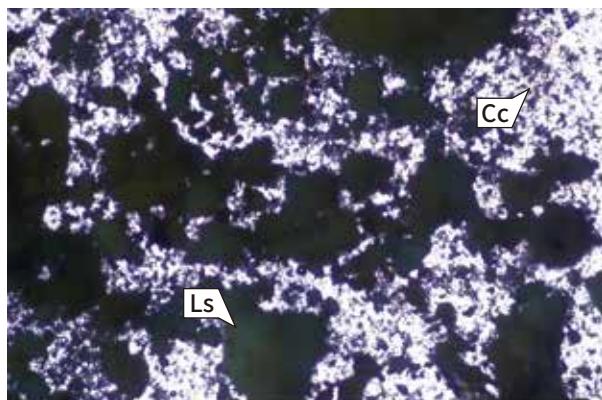
50µm  
(1,4-6)  
50µm  
(2,3)

写真 110 花粉化石・植物珪酸体

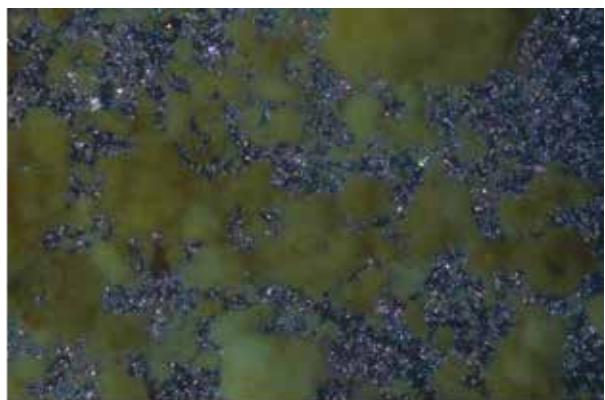


1. マツ属複維管束亜属(リュウキュウマツ?)葉(トレンチ4 14層 No.3)
2. トウダイグサ科(オオバギ?)種子(トレンチ4 14層 No.4)
3. トウダイグサ科(オオバギ?)種子(トレンチ4 14層 No.4)
4. イネ 粉(基部)(トレンチ2道跡 18層 No.1)
5. タイワソクズ核(トレンチ4 14層 No.3)
6. タイワソクズ核(トレンチ4 14層 No.4)
7. シヤジクモ科卵胞子(トレンチ4 14層 No.3)
8. シヤジクモ科卵胞子(トレンチ4 14層 No.4)
9. シヤジクモ科卵胞子(トレンチ4 14層 No.4)

写真 111 大型植物遺体



1. トレンチ2 道跡 18層 (No.1) 下方ポーラー



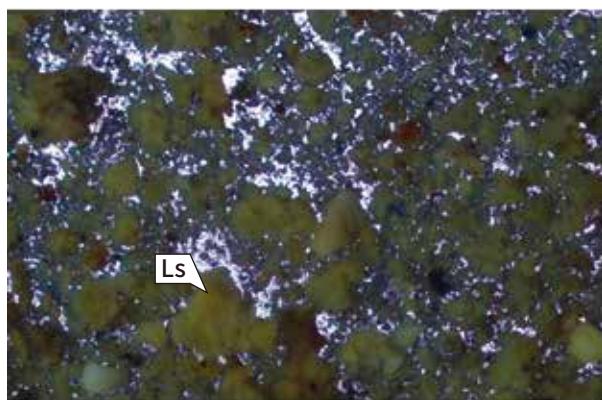
2. トレンチ2 道跡 18層 (No.1) 直交ポーラー



3. トレンチ2 道跡 18層 (No.1) マイクロスコープ分析前試料



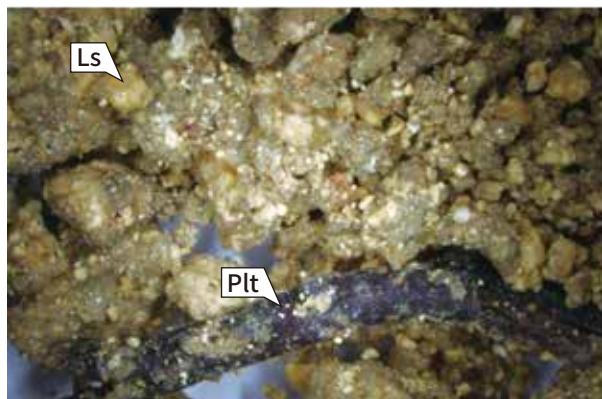
4. トレンチ2 道跡 18層 (No.1) マイクロスコープ 2mm礫



5. トレンチ2 道跡 18層 (No.2) 下方ポーラー



6. トレンチ2 道跡 18層 (No.2) 直交ポーラー



7. トレンチ2 道跡 18層 (No.2) マイクロスコープ分析前試料



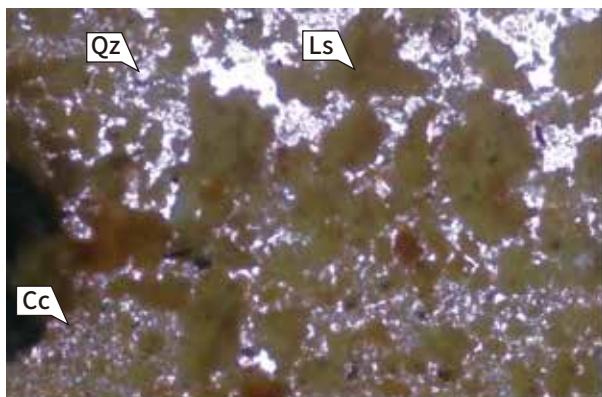
8. トレンチ2 道跡 18層 (No.2) マイクロスコープ 2mm礫

0.5mm

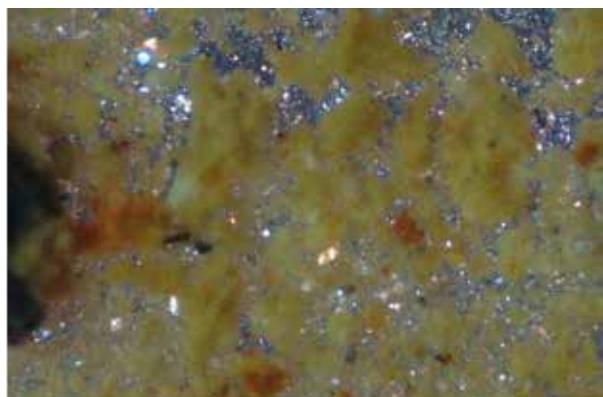
×40  
(1-2、5-6)

Cc : 炭酸塩鉱物. Ls : 石灰岩. Ms : 泥岩. Plt : 植物片.

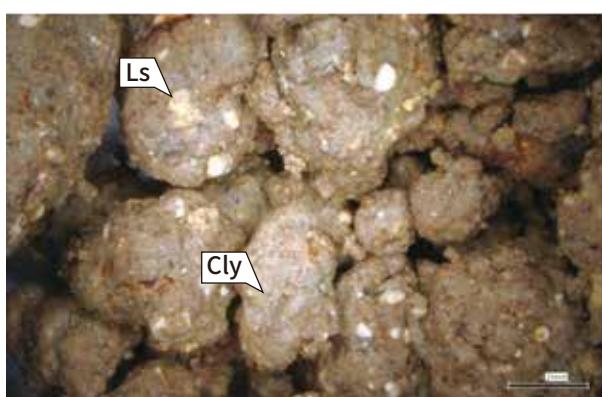
写真 112 頭微鏡・マイクロスコープ (1)



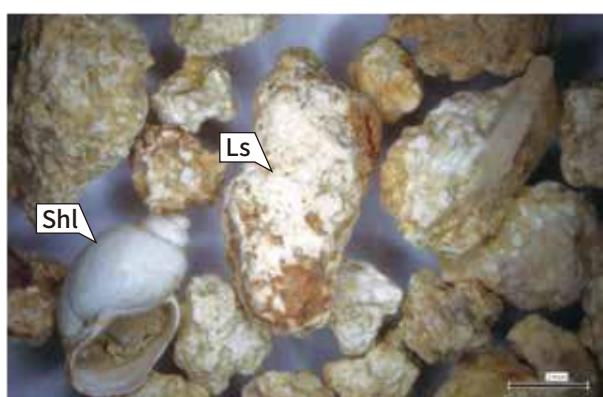
1. トレンチ4 14層 (No.3) 下方ポーラー



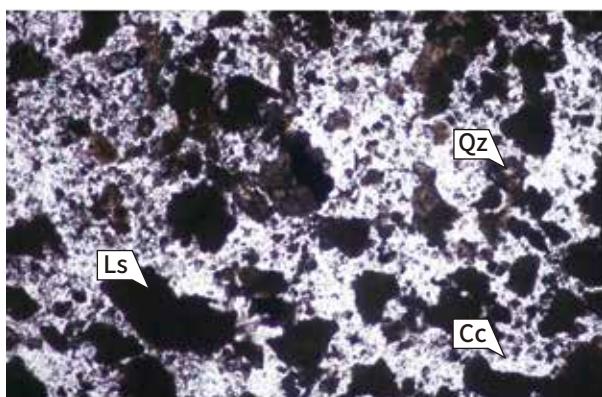
2. トレンチ4 14層 (No.3) 直交ポーラー



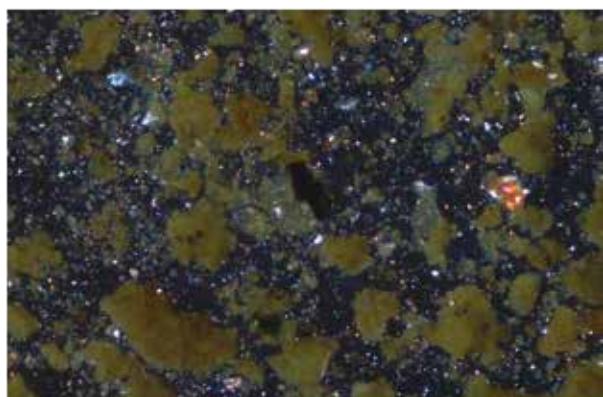
3. トレンチ4 14層 (No.3) マイクロスコープ分析前試料



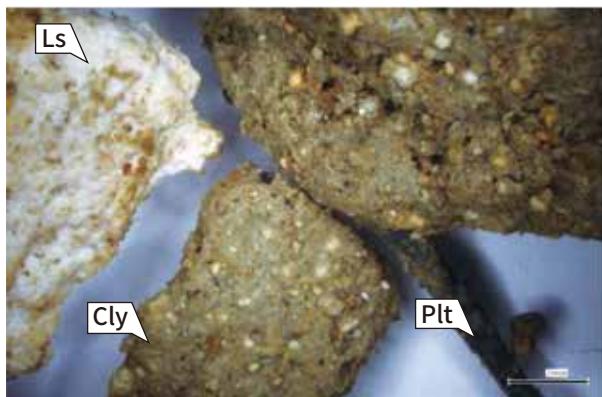
4. トレンチ4 14層 (No.3) マイクロスコープ 2mm 磯



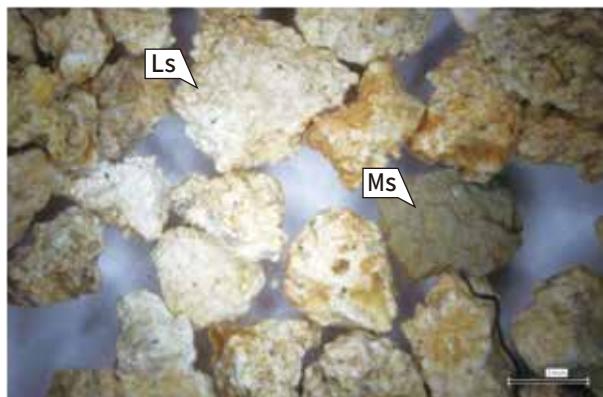
5. トレンチ4 14層 (No.4) 下方ポーラー



6. トレンチ4 14層 (No.4) 直交ポーラー



7. トレンチ4 14層 (No.4) マイクロスコープ分析前試料



8. トレンチ4 14層 (No.4) マイクロスコープ 2mm 磯

Cc : 炭酸塩鉱物. Cly : 粘土. Ls : 石灰岩. Qz : 石英.  
Shl : 貝. Ms : 泥岩. Plt : 植物片.

0.5mm

×40  
(1-2, 5-6)

写真 113 頭微鏡・マイクロスコープ (2)

#### 4. 考察

##### (1) 遺構の年代観

近世以降の試料に対して放射性炭素年代測定を実施した場合、得られる暦年較正曲線は鋸歯状で、較正年代の幅が広くなる。

それを踏まえ、今回分析した炭化材試料3点の暦年結果をみると、いずれも近世以降の年代値を示し、かつ暦年較正曲線も鋸歯状である。この結果は近世造成層14層より採取された試料であることと矛盾していない。

##### (2) 植物化石から見る遺構の状況

首里城に所在する綾門大道に舗装される道路の路面では、琉球石灰岩の石粉とネナシカズラの汁を撒いて敷き詰め固めたり、線香の原となるタブノキの皮を粉にした“香粉(コーダー)”を石粉に混ぜるなど特殊な材料を石粉に混ぜて舗装材に使用したと伝えられている。そのため綾門大道は、“香粉道(コーダーミチ)”とも称されている(沖縄県立埋蔵文化財センター, 2003)。

本分析調査では、道路面構築の際に混入される可能性のある植物の検討のために、花粉分析、植物珪酸体分析、微細物分析を行った。

花粉化石の産状は、トレンチ2道跡およびトレンチ4のいずれも悪い。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998など)。わずかに認められた花粉化石の保存状態も考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解・消失した可能性が考えられる。

植物珪酸体においてもトレンチ4の2試料で産出が悪かった。亜熱帯湿潤気候の下では、堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こる(松井, 1988)。また植物珪酸体はpH9.0以上で急速に溶解することが知られており、溶解性・安定性は特に化学的要素に左右される(近藤鍊三, 2010)。今回も、植物珪酸体が内部で溶解、消失した可能性が考えられる。

なお、少なからず検出された植物化石について見ると、木本類ではマツ属(マツ属複維管束亜属を含む)、ハンノキ属、ウルシ属。植物珪酸体ではマンサク科。微細物分析ではマツ属複維管束亜属の炭化葉、トウダイグサ科の種子が確認された。このうち、マツ属複維管束亜属は、現在でも沖縄本島において海岸から山地にかけて広く自生するリュウキュウマツといってよい。花粉化石だけでなく葉も検出したことから何らかの利用も考えられる。マンサク科の葉部に形成される植物珪酸体は、その給源としてイスノキがこれに含まれる(近藤, 1976)。イスノキは、その樹皮が鳥飼(とりもち)の原料となることから、この粘性が道路面構築の際に利用された可能性もある。

その他では、広葉樹のハンノキ属、ウルシ属、トウダイグサ科(オオバギ?)などが確認されたが、道路面構築の際利用される特徴は推察できない。

草本類ではタケ亜科を含むイネ科やタイワンソクズなどで、遺構周辺の明るく開けた場所に生育する種類である。一方、トレンチ2道跡の18層から穀類のイネが確認された。また、沈水植物(水深のある水湿地に生育)のシャジクモ科が検出されたことから、水田土壤の混入の可能性もある。

##### (3) 顕微鏡観察結果

顕微鏡観察では、トレンチ2道跡のNo.1およびNo.2では、石灰岩に由来する炭酸塩鉱物が多量含まれる傾向が確認された。

マイクロスコープによる観察では、No.1およびNo.2を構成する多量の石灰岩の礫は、角礫状を示しており、人為的に破碎された可能性がある。沖縄本島においては、「粟石」と呼ばれる種類の琉球石灰岩が南城市玉城と浦添市西海岸に所在する石切り場から切り出されていた(安斎, 2019)。「粟石」は、琉球石灰岩の中でも12~13万年前の海侵堆積物をもとにした地層である牧港石灰岩のことと、一般にその岩相は中~粗粒の有孔虫殻砂からなり、多孔質で黄白色~黄褐色をした砂質の石灰岩である。具志頭港川から南城市玉城の周辺が粟石の一大産地であり、石材として比較的軟質で切りやすく、運搬性に優れていた。今回観察された石灰岩の岩相と、粟石の产地と遺跡の地理的位置とを考慮すると、No.1~4に含まれる石灰岩は粟石が使用されている可能性がある。石灰岩礫と粟石の比較検討が必要であると考える。

トレンチ4のNo.3およびNo.4は粘土が含まれており、混在する鉱物片の粒径がNo.1、2に比較して大きい。鉱物片は破片状を呈しており、遺跡周辺の地質に由来するとみられる。No.1、2とは異なり、人為的に粘土を混和させた可能性がある。

トレンチ2道跡のNo.2およびトレンチ4のNo.4は、泥岩の礫をきわめて微量含む。これらの泥岩は、おそらくは新第三紀の島尻層群に由来すると推測される。島尻層群は調査地点周辺においても分布が認められ、人為的に混在させたというより自然礫として含まれているものとみられる。

### 引用文献

- 安斎英介, 2019, 第IV部 九州・沖縄の石切場 三、沖縄における「栗石」の石切場と石切技術. 高田祐一編, 戻光祥近代史論集2 産業発展と石切場—全国の採石遺構を文化資産へ. 254-263.
- Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon, 51, 337-360.
- 近藤鍊三, 1976, 樹木起源の珪酸体について. ペドロジスト, 20, 176-189.
- 近藤鍊三, 2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会, 387p.
- 松井 健, 1988, 土壤地理学序説, 築地書館株式社, 316p.
- 三宅 尚・中越信和, 1998, 森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究, 6, 15-30.
- 三好教夫・藤木利之・木村裕子, 2011, 日本産花粉図鑑. 北海道大学出版会, 824p.
- 中村 純, 1967, 花粉分析. 古今書院, 232p.
- 中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12, 13集, 91p.
- 中山至大・井の口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.
- 沖縄県立埋蔵文化財センター, 2003, 調査報告書第13集 羅門大道跡 一首里城跡守礼門周辺地区発掘調査報告

### 1. 試料写真



トレンチ2 道跡サンプリング①



トレンチ2 道跡サンプリング②



トレンチ4 近世の造成層土壤サンプル



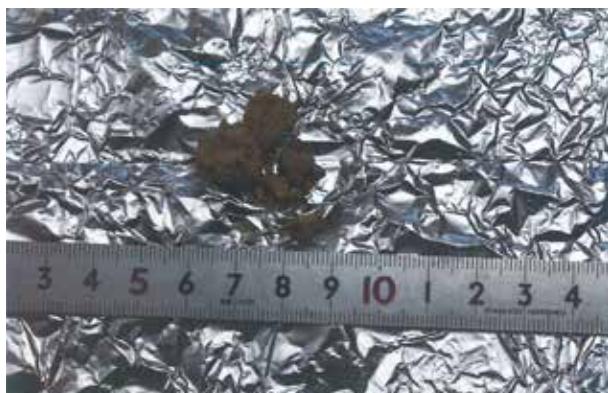
トレンチ4 近世の造成層(礫層下)土壤サンプル

写真 114 作業工程 (1)

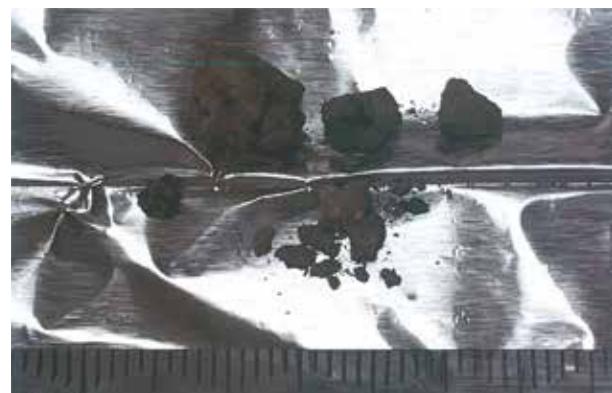
書一, 1-2.

- Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S., 2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal kBP). Radiocarbon, 62, 1-33..島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.
- Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of  $^{14}\text{C}$  Data. Radiocarbon, 19, 355-363.
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる 734 種 増補改訂一. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.
- 徳永重元・山内輝子, 1971, 花粉・胞子. 化石の研究法, 共立出版株式会社, 50-73.

## 2. 年代測定試料写真



トレンチ4 近世の造成層(礫層下) 土壌サンプル



トレンチ4 近世の造成層土壌サンプル



トレンチ4 近世の造成層(礫層下) 土壌サンプル



トレンチ4 近世の造成層(礫層下) 土壌サンプル

## 3. 年代測定



試料秤取り



前処理準備



前処理



加速器前景

写真 115 作業工程（2）

#### 4. 花粉分析



分析準備



分析作業



プレパラート作成



花粉化石同定作業



分析準備



分析作業



プレパラート作成



植物珪酸体同定作業

写真 116 作業工程（3）

## 6. 微細物分析



土壤水洗準備



土壤水洗



水洗試料拾い出し



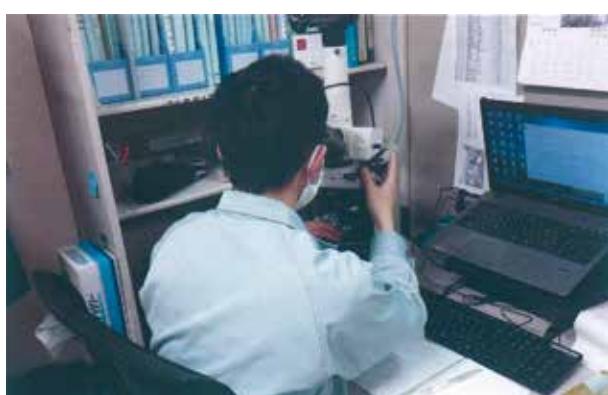
実体顕微鏡同定



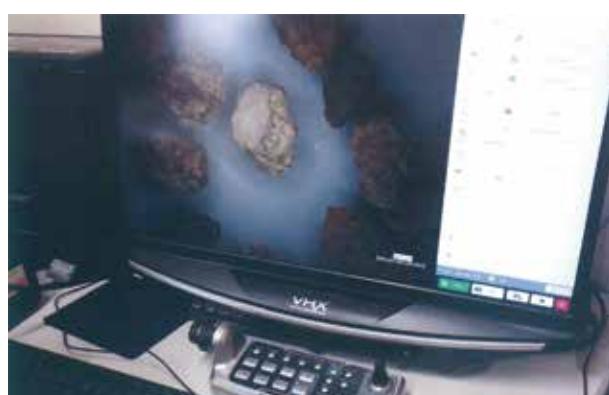
顕微鏡観察準備



試料肉眼観察



偏光顕微鏡観察



マイクロスコープ観察

写真 117 作業工程（4）

## 第5章 総括

### 第1節 はじめに

今回の調査の目的は、松崎馬場跡を歴史公園として整備するために必要となる遺構の状況を確認することであった。松崎馬場跡を東西に横断するように、5本のトレンチを設定して発掘調査を行った結果、道跡をはじめとして、土地造成跡や師範学校跡など各時代の遺構を検出することができた。ここでは、今回の調査成果について、時代ごとに概観することで総括とする。

### 第2節 松崎馬場跡の変遷

#### 1 グスク時代(図34-1、図35)

1427年に建立された石碑「安国山樹華之記」によると、尚巴志王代の国相懐機の指揮によって龍潭が掘削され、安国山を高く築いたことが記されている。この時、龍潭の南西側に接する安国山に加えて、東側一帯についても、首里城の外苑として何らかの整備が行われた可能性がある。

今回調査したトレンチ1～4では、石灰岩礫を突き固めて造った道跡が確認された。最も道幅の残りが良好なトレンチ2では、最大幅3.8mを確認したが、道の両端が残っていないため、本来の道幅は不明である。またトレンチ1では、道の東側に縁石を並べている状況が確認できた。これらの遺構は、琉球王国時代の幹線道路である宿道と考えられる。

この宿道跡の路面に使われている石灰岩礫を分析した結果、牧港石灰岩である可能性が指摘された。牧港石灰岩は「粟石」とも呼ばれ、黄褐色で比較的加工しやすい特徴がある。また、宿道跡の直下には、石灰岩礫が混じる造成層があり、さらにその下層には、10～20cm程度の石灰岩礫を密に敷き詰めた礫層がある。この礫層は、宿道下部の地盤を補強する目的で敷かれたと考えられる。

次に、出土遺物などから宿道跡の年代について検討する。トレンチ2の15層から中国産褐釉陶器が1点、トレンチ3の11層から宮古式土器が3点、トレンチ4の14層から明朝系瓦が1点出土している。これらの層は、宿道の造成に関する層や、宿道と共に近世に埋められた層である。このような少量の遺物から導き出される宿道の時期については、グスク時代から近世と幅を持たせて考えておきたい。トレンチ4の14層から採取した3点の試料について年代測定を行った結果は、試料No.3が1660年～1950年、試料No.4が1472～1635年、試料No.5が1662～1950年となっており、グスク時代から現代という幅広い時代を示す結果となった。

以上のことから、松崎馬場の前身となる宿道が造られた時期は、グスク時代にさかのぼると考えられ、近世の段階で宿道とその周辺が広く平坦に埋められたことによって、

松崎馬場が形成されたと解釈することができる。

18世紀前葉に製作された「首里古地図」(図5)を見ると、龍潭の輪郭に沿うように蛇行しながら南北に延びる道と、道の両側に松とみられる樹木が描かれている。ここに描かれている道は、グスク時代に造られた宿道であり、松崎馬場が広場として整備される以前の様子を示していると考えられる。

#### 2 近世(図34-2)

トレンチ3・4では、20cm前後の厚さでクチャ混じりの粘質土を盛り、さらにその上をサンゴ礫が混じった土で平坦に整えた状況を確認することができた。これらの土は、宿道の上にも盛られていることから、宿道が通っていた場所も含めて、広く平坦に整地されたことが確認できた。

1801年に、首里王府の最高教育機関である国学が、龍潭の東(現在の県立芸術大学)に設置された。その際、「松崎前から国学までの道に嘉木が植えられ、白砂が敷かれた」ことが『球陽』尚温7年条に記されている。トレンチ3・4で確認されたサンゴ礫が、『球陽』に書かれていた白砂であった可能性がある。

国学の設置に伴い、松崎馬場との間には土留めの石垣が設置された。これによって、国学の敷地が明確になるとともに、松崎馬場との間には3mほどの比高差が発生し、両者が明確に区分された。この石垣は、「国学・首里聖廟石垣」として沖縄県指定の史跡となっている。

1866年に来流した冊封使の歓待状況を図示した「重陽宴松崎之図」を見ると、松崎馬場の東側(図の下側)には、「国学・首里聖廟石垣」とみられる石垣が南北に延びている。その北端は通路状の表現となっており、別の石積みが中城御殿前の道まで伸びている。西側については、龍潭や松林が描かれており、松林の東側には1本の直線が描かれている。この直線は、松崎馬場の平坦面と松林がある斜面との境目や、何らかの境界を示していると考えられる。南側については、円鑑地の一部が描かれており、その周りを巡る道と松崎馬場との間にも、直線が描かれている。この直線については、縁石や段差を示しているのか、もしくは路面構造の違いを示しているのかは定かではない。先にみた「首里古地図」とは違い、蛇行する道の表現はなく、中城御殿前の道との接合部の表現などについては、簡略化されて描かれているように見える。これは、「重陽宴松崎之図」が観覽席の設営状況を示すことを主な目的として描かれた図であり、松崎馬場が道であるとともに、広場であると認識されていたためと考えられる。

今回の調査では、過去の調査と同様に「重陽宴松崎之

図」に描かれた観覧席などの各種施設に関する遺構は検出されなかった。

### 3 近代(図34-3)

明治19(1886)年、国学跡に師範学校が移転・設置された。また、明治30(1897)年には、学校の拡張工事が行われた。

トレンチ1～3では、師範学校に伴う建物跡や溝などが検出された。そしてトレンチ3・4では、近世の造成と同じように、クチャ混じりの粘質土や、サンゴ礫・石灰岩礫が混じる土などが確認された。

また、松崎馬場と国学を隔てていた「国学・首里聖廟石垣」には、一部に積みなおした跡が確認されている。これは、国学側の敷地を、一段低い松崎馬場側に拡張するために行われた積みなおしの痕跡である。この拡張工事によって、松崎馬場の南端の大部分が閉じられてしまうこととなる。さらに石積みには、国学跡と松崎馬場跡を行き来するための階段が設置された。

このように師範学校の敷地は、国学跡と松崎馬場跡にまたがる範囲となり、校舎や寄宿舎など多くの建物が立ち並ぶこととなった。これにより、松崎馬場が持っていた道路や催事場としての機能が失われていくこととなる。

### 4 現代

沖縄戦によって、師範学校は壊滅し、瓦礫の山と化した。戦後の松崎馬場跡には、首里博物館や琉球大学男子寮、沖縄県立教育センター、沖縄県立芸術大学などの文教施設が設置されていった。これらの設置工事によって、「国学・首里聖廟石垣」が埋もれてしまうほどの造成などが行われ、戦前の地形は大きく改変されていった。

トレンチ2で確認された炭を大量に含む層(7層)や、トレンチ2・3で出土した大量の現代磁器などは、戦後の各種工事によって堆積・廃棄されたと考えられる。

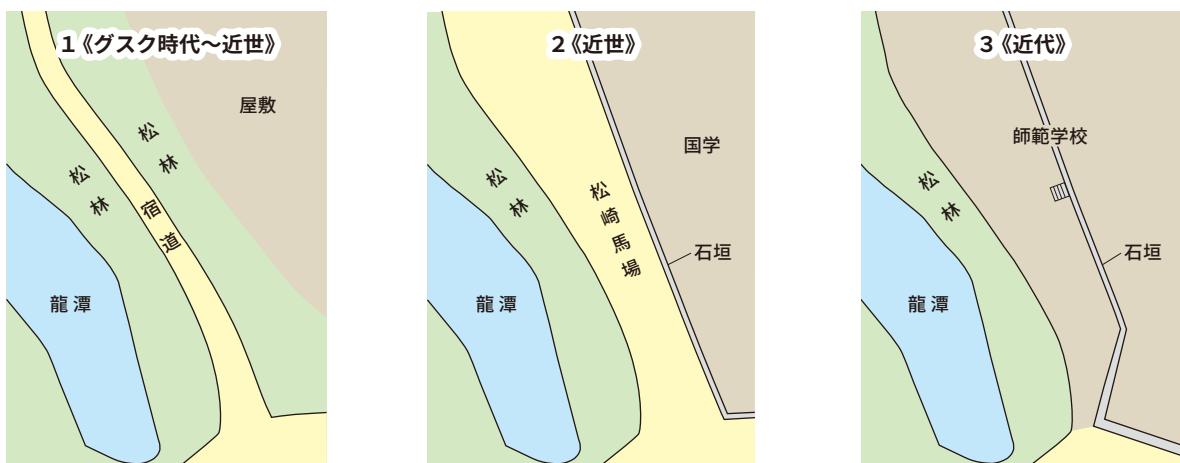


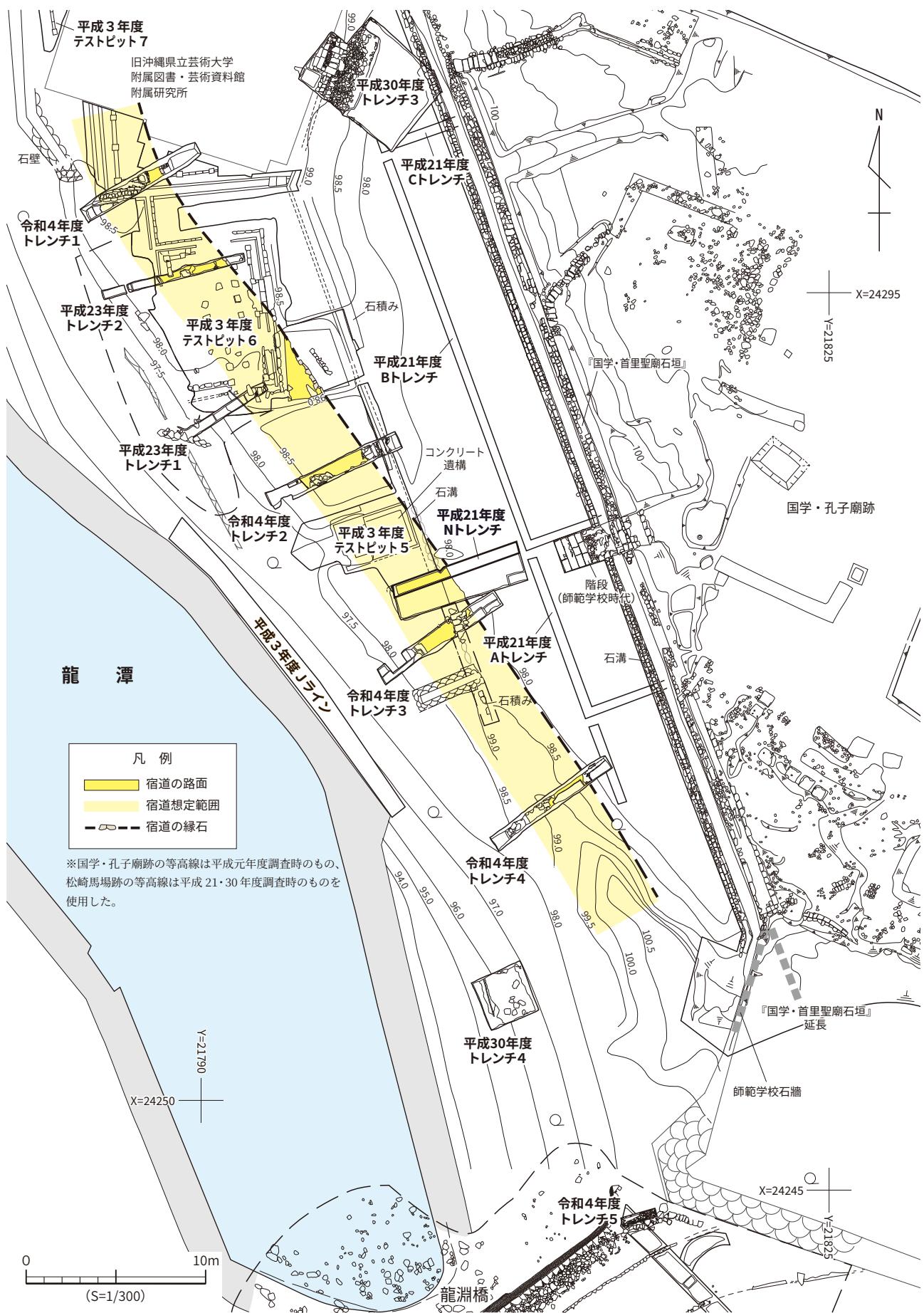
図34 松崎馬場跡の変遷イメージ

### 第3節 今後の課題

宿道の西側一帯については、後世の攪乱が及んでいるため、道幅の確定には至らなかった。また、宿道に伴う遺物が少ないこともあり、時期決定に検討の余地がある。さらに近世から近代にかけての造成についても、過去の調査成果と整合を図る必要が生じている。これらの点については、今後の課題としたい。

### 参考・引用文献

- 安里進・外間政明 編 2022『古地図で楽しむ首里・那霸』  
上原靜・島袋洋 1991「首里国学・孔子廟跡の調査」  
『文化課紀要 第7号』沖縄県教育委員会  
沖縄県土木建築部 1988『首里城公園基本設計』  
沖縄県教育委員会 1985『沖縄県歴史の道調査報告書  
－国頭・中頭方西海道(I)・弁ヶ嶽参詣道－』  
沖縄県教育委員会 1995『龍潭・ハンタン山』  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2017『松崎馬場跡  
－県営首里城公園 松崎馬場跡発掘調査報告書(1)－』  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2020『首里当蔵旧水路  
－龍潭線街路整備に伴う発掘調査報告書－』  
沖縄県立埋蔵文化財センター 2020『真玉道跡・松崎馬場跡  
－県営首里城公園整備に伴う発掘調査報告書－』  
沖縄師範龍潭同窓会 編 1980『龍潭百年』  
球陽研究会 編 1974「球陽 卷十九 尚温王」  
『球陽 読み下し編』角川書店  
久手堅憲夫 2000『首里の地名－その由来と縁起－』  
田山花袋 編 1901『日本名勝地誌』第11編 博文館  
平凡社地方資料センター 編 2002『沖縄県の地名』  
日本歴史地名大系 第48巻 平凡社



## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	まつざきばばあと							
書名	松崎馬場跡(3)							
副書名	— 県営首里城公園 発掘調査報告書 —							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第120集							
編著者名	羽方誠、花城媛子、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752 FAX 098-835-8754							
発行年月日	令和7(2025)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯 26° 13' 10"	東経 127° 43' 05"	発掘期間 2022.07.01 ～ 2022.09.30	発掘面積 33 m <sup>2</sup>	発掘原因 県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
まつざきばばあと 松崎馬場跡	沖縄県那覇市 首里当蔵町 1丁目1番地	47201	—					
所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
松崎馬場跡	広場跡、道跡	グスク時代 ～ 近代	道跡、石敷き、石列 石積み、井戸	中国産陶磁器、本土産陶磁器 沖縄産陶器、陶質土器、瓦				
要約	<p>松崎馬場は、龍潭の東側に沿って造営された広場で、冊封使を歓迎するため爬龍船競槽が行われた際、観覧するための桟敷席が設けられた。発掘調査によって、中頭・国頭方面へと延びていた宿道が検出された。宿道は石灰岩礫を突き固めて路面としていたことが分かった。</p> <p>また、1801年に国学が設置された際、宿道を埋めるように広場として整地されたことが分かった。明治19(1886)年に師範学校が設置されると、道や広場としての機能は失われていった。</p>							

---

---

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第120集

## 松崎馬場跡(3)

— 県営首里城公園 発掘調査報告書 —

発 行 日 令和7(2025)年3月31日

編集・発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7

TEL: 098-835-8752 FAX: 098-835-8754

印 刷 株式会社 アント出版

〒903-0804 沖縄県那覇市首里石嶺町4丁目291-1

TEL: 098-840-3777 FAX: 098-840-3722